

まいぶん講座フォーラム報告3

継体大王と 江沼の豪族

—古墳時代後期の江沼と三湖台古墳群—

石川県小松市教育委員会



序

本書刊行の企画は、埋蔵文化財普及啓発事業として平成15年より実施してまいりました「まいぶん講座」の中で、特別企画として実施した講座内容を図書としてまとめ、広く市民に活用していただくことを目的としたものであります。

これまで、当市では『加賀国府と中宮八院』、『弥生時代の北陸を探る』の2冊のフォーラム報告を刊行しておりますが、多くの市民の方々に読みやすいと好評をいただいております。

平成21年度は、平成19年度に開催しました「まいぶん講座」の特別企画、「フォーラム 古墳時代後期の江沼と三湖台古墳群」の成果を図書としてまとめることといたしました。

当フォーラムの題材として取り上げました、三湖台古墳群は月津台地に所在する100基を超える古墳群であります。古墳時代後期には加賀地域最大勢力を誇る古墳群として君臨し、その地に葬られた豪族たちは、越前三国の地を出身として、この時代に国の政治の頂点へと上り詰めた雑体天皇との関係も想定されています。まさに、江沼の地が日本の表舞台に躍り出た時代であり、当古墳群の一角を占める矢田野エジリ古墳出土の埴輪群は、三湖台古墳群の歴史的な重要性の一端を示してくれています。

本書の刊行が、三湖台古墳群の重要性を再確認するきっかけとなり、多くの市民が小松の地の歴史的重要性、地域的魅力を理解することの一助となれば、幸甚であります。

最後になりましたが、当フォーラムにて報告並びに本書の原稿校正の労をいただきました、菱田哲郎先生、伊藤雅文先生に厚くお礼申し上げます。

平成22年1月

小松市教育長 吉田 洋三

例　言

1. 本書は、小松市教育委員会が、平成19年9月16日（日）に小松市第一地区コミュニティセンター2階多目的ホールにおいて開催した第22回まいぶん講座「フォーラム 古墳時代後期の江沼と三湖台古墳群」の報告、座談会内容をまとめた成果報告書である。
2. 本書は、各報告並びに座談会の内容を録音したテープを活字化し、報告者本人並びに座談会発言者が、内容校正する形で文章化したものである。よって、当日の報告内容をそのまま文章化したものではなく、読者が分かりやすいように、図や説明内容等に一部修正を加えたものがあることを、予め断っておきたい。
3. 本書の編集は、望月精司が担当した。編集では、報告者、座談会発言者の校正に基づき、見出し等を文章中に適時挿入した。また、挿図や写真、史料等についても、当日の報告、説明で使用したスライド資料をもとに、適時、文中に挿入したが、当日配布資料に示されていないものも多く含まれている。

報告者および座談会発言者

報告者

望月 精司（小松市教育委員会埋蔵文化財調査室担当参事兼室長補佐）

菱田 哲郎（京都府立大学文学部准教授）

伊藤 雅文（財団法人石川県埋蔵文化財センター調査部調査第4課課長）

座談会発言者

樫田 誠（小松市教育委員会文化課担当参事兼課長補佐）

当日の日程

13:00 開会の挨拶 小松市教育委員会埋蔵文化財調査室長

13:10 報告1「古墳時代後期の江沼を考える

—三湖台古墳群と南加賀窯跡群— 望月精司

14:00 報告2「古墳時代の窯業生産と南加賀窯跡群」 菱田哲郎

14:50 休憩

15:00 報告3「能美、江沼の古墳動向と三湖台古墳群」 伊藤雅文

15:50 休憩・会場準備

16:10 座談会「古墳時代後期の江沼の実像と三湖台古墳群の謎」

進行役：望月精司 パネラー：菱田哲郎・伊藤雅文

17:45 閉会

目 次

序

例言

報告者および座談会発言者

当日の日程

目次

報告篇

報告 1 古墳時代後期の江沼を考える

—三湖台古墳群と南加賀窯跡群—（望月精司） 2

報告 2 古墳時代の窯業生産と南加賀窯跡群（菱田哲郎） 46

報告 3 能美、江沼の古墳動向と三湖台古墳群（伊藤雅文） 66

座談会篇

古墳時代後期の江沼の実像と三湖台古墳群の謎 94

資料編

時代概説と語句の解説 126

三湖台古墳群分布図 134

参考引用文献、挿図出展一覧 136

報告篇

報告1 「古墳時代後期の江沼を考える
—三湖台古墳群と南加賀窯跡群—」 望月 精司

報告2 「古墳時代の窯業生産と南加賀窯跡群」
菱田 哲郎

報告3 「能美、江沼の古墳動向と三湖台古墳群」
伊藤 雅文



横穴式木室をもつ矢田借屋16号墳

【報告1】

「古墳時代後期の江沼を考える—三湖台古墳群と南加賀窯跡群—」

望月 精司

1. はじめに

今回のフォーラムは、
繼体天皇即位 1500 年を記念した事業であります。

繼体天皇については、皆さんご存知のように即位前は男大迹王と名のつておりまして、また当時はまだ「天皇」という名称が使われておりませんでした。「大王」というのが国の主権者の名称であったわけです。よって、繼体天皇の呼び名は、「男大迹大王」が正式な呼び名であります。



男大迹王が大王として即位したのが 507 年であります。今年は 2007 年ですので、ちょうど 1500 年の節目の年に当たっています。即位 1500 年を記念して、福井県や滋賀県、京都などにおいて、さまざまな記念行事がおこなわれておりますが、このフォーラムにつきましても、繼体天皇との繋がりのある地域という視点で、この節目に当たる時代に焦点を当てて企画した事業であります。

さて、私の報告は、「古墳時代後期の江沼を考える」という演題であります。繼体天皇が生きた時代について時代概説や政治的背景、そして江沼地域との関わり、三湖台古墳群や南加賀窯跡群の調査成果から見た当時の江沼地域について、報告するものであります。

2. 古墳時代後期という時代

(1) 繼体天皇即位までの経緯

まず、繼体天皇の即位までの経緯をお話ししますが、古代の代表的な文書資料であります『日本書紀』や『古事記』に、繼体天皇の出自や即位までの経緯が丁寧に記されてあります。ここでは『日本書紀』を使いますが、史料1のとおり、即位前記には近江の高島郡、三尾の出身である彦主人王という地域首長が、越前三國の出身である振媛を妃に迎えて、男大連王が生まれたと記載されています。彦主人王は男大連王がまだ幼い頃に亡くなってしまい、振媛は故郷の高岡、これはたぶん三国周辺の地域だと思われますが、そ

(五) 繼体天皇

男大連天皇は「更の名は彦太尊」^{彦田天皇の五世の孫}。彦太尊は「彦の子なり。母を振媛」と曰す。振媛は活日天皇の七世の孫なり。天皇の父は振媛が御苦勞姫。長だ離色有ることを聞きて、近江国高島郡三尾の別業より使を遣して、三國の坂中井^中此を即と云ふ。に傳へて、始れて以て妃と為たまふ。遂に天皇を産みます。天皇幼年。父王薨きましむ。振媛歌ひて曰く、「要今速く桑梓を離る。安ぞ能く豚糞ひまつる」とを嘆むや。余焉内裏内は故苑園の色の名なり。」に拂事りて、天皇を奉養らむ。天皇壯大にして、七を覺み寶を禮ひ。承認にます。天皇年五十七歳、八年冬十二月己亥、小治難天御崩りましむ。元より男女無くて、繼室可し。壬子、大伴金利大連説りて曰く、方今絶えて繼嗣無し。天下向所にか心を繋けむ。古より今まで、相勅に由りて祀れり。今延仲連天皇去世の際、使藤王^王・村前田春田在に在す。謂く、試に御内を設けて、御御を來みゆりて、既きて還へ參り、立てて人主と為まつらむ。と、大臣・大連等一に皆賛る。却へ第ること時の如く。是に於て繼彦王遙に祀の兵を冠り、櫻然色を失へり。仍りて山野に遁りて居にむ所を知らず。元年春正月辛酉朔甲子、大伴金利大連、既而禮りて曰く、男大連王。性嗜^嗜天祐と承へづべし。實は不^不是若に勤進めて帝業を継承しめんと。物語新羅火大連、皆勢^勢男大店等^等曰く、「慢^慢孫^孫を廢^廢して繼おな。賢者は嘸^嘸男大連王のみ。と、丙寅、臣津等を遣して、節を持ち以て法服を被へて、三間に詣^詣する。夾^夾著る其^其供^供禮^禮を盡^盡く繫^繫へ、誓^誓請^請前に至る。是に男大連天皇、然^然自若^{自若}而困に應^應す。君臣を背^背へ仰て、既に帝^帝の半身^{半身}に如し。頭^頭を持つ便^便、足^足由りて被^被拂^拂りて、心^心繕^繕け身^身を委^委せて、忠誠を示^示むことを冀^冀す。然るに天皇意の裏に同疑ひ、久しうして祝^祝きたまはず。遇^遇知れる河内馬解首^見難^難に使を遣し奉り、其に大臣・大連等が冠へ奉る所以の本意を述べ。留まる」と二十三夜迷に義し、乃^乃嘲^嘲然^然歌ひて曰く、「越^越きかな、馬倒^倒。汝若^{汝若}使を遣して來り告ぐること無からまいか。殆^殆大下に取^取れまし。世の云ふ、背^背を誇^誇ふ勿^勿れ、但^但其の心を重みすといふは、蓋^蓋九龍^{九龍}が誇^誇か。と、既終に之^之坐りて、厚く言葉に難^難持を加へたまふ。甲申、天皇釋^釋宴^宴に行

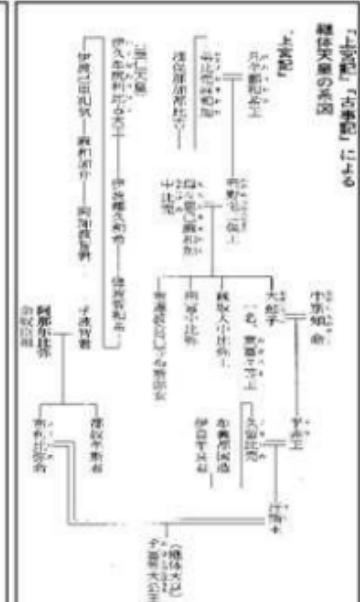
史料1 日本書紀17卷 繼体天皇即位前記及び繼体元年記

こに歸って男大跡王を育てたとされています。

506年、時の大王を務めていた武烈天皇が亡くなります。至急、次の大王が即位する運びとなるのですが、武列天皇には子供がなく、後継者が決まっていませんでした。そこで、当時のヤマト王権の中核にいた大連の大伴金村（おほなべ きんむら）の政治諮問機関が次の大王を誰にするか会議をし、その候補者を決めたのですが、その本人が逃げてしまったりするなど、なかなか次の大王が決まらない状況でした。その中で、コシの地域首長であった男大迹王が人格的にも政治手腕など適任者ではないかという話が出て、諮問機関が推挙し、男大迹王へ大王の要請をすることとなったわけです。

大王就任の要請のために、諸問機関は使者を使わし、三国へ男大迹王を迎えたというふうに書かれておりまして、その後、男大迹王は決断し、507年に樟葉宮において即位したと書かれています。越前の三国を本拠地

史料2 『上宮記』(『聖日本記』所引)



史料3 「上宮記」による系図

とする地方の地域首長が日本国の権力の頂点である大王に上り詰めた訳でして、その点が繼体天皇の魅力であり、様々な伝説を生んでいる所以でもあります。

(2) 繼体天皇と江沼との関係

さて、そのような男大連王が小松とどのように関連してくるのかですが、それは『上宮記』という7世紀に書かれたとされる聖徳太子の伝記的書物に記載が見えます。この史料は『釈日本紀』という鎌倉時代に書かれた、『日本書紀』の注釈書のなかで引用されているものでして、その内容に高い信ぴょう性があるとされるものです。この『上宮記』に繼体天皇の出自等が詳しく書かれておりまして、それをもとに『日本書紀』の繼体天皇即位前記が書かれたとされています。『日本書紀』は8世紀中頃に編纂された書物ですので、記載時期としては『上宮記』の方が古いということになる訳です。

『上宮記』の記載部分を史料2に、その内容をまとめて系図に示したもののが史料3となります。系図を見ますと、一番下が乎富等大公王、繼体天皇です。それが上に上がるにつれて祖先、系統をさかのぼっていくことになりますが、一番下の乎富等大公王から両側に父の汙斯王(=彦主人王)と布利比彌命が位置します。布利比彌命は越前の出身ということになるわけありますが、その父親の乎波智君が越前の首長、母親の阿那尔比彌はどこから嫁いできしたこととなります。この阿那尔比彌の紹介として、わざわざ注書きがなされていまして、『上宮記』の史料2の右から6行目の中ほどに「余奴臣が祖名は阿那尔比彌」と書いてあります。これは布利比彌の母親が、後に「余奴臣」を名のる氏族の出身であることを示しており、余奴臣と男大連王とが親戚関係にあったことを示します。このように人物に何かの注書きがなされる場合、國造名とかの役職名が記される例がほとんどで、男性名ばかりであり、女性名、特に特定氏族の出身であることを注書きするには何か特別な理由があったことを予想させます。男大連王には多くの氏族間で血縁関係があったと予想されますが、特に後に「余奴臣」を名乗る氏族との関連性が重要だったことを示すものと注目されます。

さて、余奴臣とは誰なのかということですが、実際の遺跡出土品にそのような氏族名の存在を示唆する資料が出てきました。小松市の那谷町に金比羅山窯跡群^{かなびらやまやまとぐん}という須恵器の窯跡群があるのですが、ここから7世紀中頃の須恵器平瓶^{へいひん}という壺が出土していまして、胴部に文字が刻まれていました。北陸最古の文字資料でありまして、図1に示しますように、複数の漢字による字句が確認されました。ところどころ欠けているため、全文はわからないのですが、最初の字句は「与野評」^{よのひき}と読み、最後の部分は人名と思われます。ここで注目されるのは「与野評」です。「評」はこおりと読み、後に「郡」という律令政治の国一郡一里という地方行政単位にあたります。飛鳥時代中頃はこの「郡」を「評」と呼んでおり、ここに「ヨノ」という名前の地方行政区画があったことを示します。日本の中で「評」が置かれるようになるのは7世紀中頃とされているため、日本の中でもかなり最初の段階に置かれた「評」だったのでしょう。

評に冠する「与野」は地域を示した言葉です。つまり、当地は与野と呼ばれていた地域であり、現在でも、加賀市の古老たちは江沼郡のことを「ヨノ

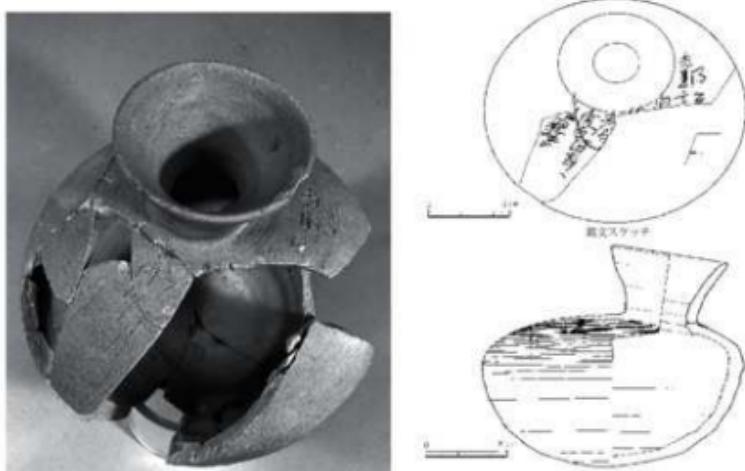


図1 金比羅山窯跡出土の「与野評」刻書須恵器

報告1 古墳時代後期の江沼を考える

ゴオリ」や「ヨヌゴオリ」と呼ぶことからも、南加賀地域の「江沼（えぬま）」の領域にあたる言葉と理解されます。南加賀地域は8世紀に越前が立国する段階においては、越前國江沼郡として一つの郡に包括される地域であり、その中心が加賀市の江沼盆地にあることは、823年に加賀国立国時の能美郡、江沼郡分郡の様子からもわかります。そう考えていくと、先ほどの阿那尔比弥に注記される余奴臣というのと、^{えぬまの臣}江沼臣につながってくるのだろうということになるわけです。

さて、『日本書紀』の史料4、「欽明天皇三十一年五月条」には、「越人江沼の臣」として登場します。この道君隠匿事件は6世紀中頃のものですが、日本書紀は8世紀中頃に書かれたものなので、8世紀中頃の呼び方だと思っていただきたいのですが、「余奴臣」は「江沼臣」という表現に変わっているわけです。多分、7世紀に「ヨノ」や「ヨヌ」と呼ばれていた地は、8世紀になって越前國の江沼郡に位置付けられる際に加賀三湖の入江というイメージからか、入江の「江」を取つて「江渟」と表現するようになつたのではと私は考えています。繼体天皇の勢力基盤は三国に本拠があったことは間違いないと思いますが、江沼の地はひと山を越えたすぐお隣ですので地域的に関連が深かったんだろうと思います。繼体天皇には、なかなか北陸地域で越前以外に、直接的な関連性を示す氏族の記載はないのですが、『上宮記』に記される阿那尔比弥の注書は、江沼地域と男大迹王との繋がりの深さを予感させるに十分なものであろうと考えるわけです。

日本書紀
欽明天皇三十一年五月 越人江沼の臣 道君隠匿事件 阿那尔比弥の注書

史料4 『日本書紀』欽明天皇31年5月条

(3) 繼体天皇を支えた地域勢力

男大迹王を支える地域勢力は、北陸以外に、尾張、近江の地域勢力が、大きく関わっていたと考えられています。史料5の表には『日本書紀』や『古事記』に記載された繼体天皇の妃の名前をまとめて示し、そこ出身地を付記したもののですが、一番右側から皇后位にあたる人は手白香皇女、仁賢天皇の子にあたるわけで、繼体天皇は天皇に即位する際に、妃を迎える、つまりは婿に入ることで、大王として、皇室の一族として迎えられるような条件になったというものです。つまりは、婿養子みたいなものです。

史料の2番目以降に列記される妃が男大迹王擁立の勢力基盤を支える地域勢力間の絆を示すものと理解しています。まず、2番目の目子媛ですが、元妃、つまり前妻にあたるものと表記がなされています。大王に即位した際に、皇族が正規の妃になるわけなので、それまでの妃は最も男大迹王と深いつながりを持っていた氏族から媛を迎えていた可能性が高い。父は尾張連であり、つまりは尾張の大首長の家柄です。男大迹王が大王に迎えられるだけの



図2 繼体天皇關係氏族の位置と宮の位置

史料5 繼体天皇の妃一覧

勢力を得た背景に、尾張勢力が大きな後ろ盾になっていた可能性がある。それを示すように、男大連王と目子媛との間に生まれた子が、後の安閑天皇、宣化天皇に即位している。その点からも繼体天皇が尾張勢力を重視していたことがうかがえます。

3番目の稚子媛や7番目の倭姫^{倭江の姫}というのは、三尾^{三尾の出身}だと書かれています。三尾は近江説と越前説とがあり、どちらかはわかりませんが、男大連王の父方の出身地である近江が有力視されています。4番目の広姫^{ひろひめ}と5番目の麻績娘子^{まきのいらづめ}は近江の坂田と息長の出身であります。先程の三尾は近江とすれば、高島にあたりますので、いわば琵琶湖を囲む湖東、湖西の有力氏族の媛が男大連王と婚姻関係を結んでいたということになります。

近江は父である彦主人王の出身地であり、もともとの勢力基盤でもあるのでしょうか。近江の地域首長が男大連王と手を結び、尾張の大首長とも強いつながりがある。その辺が男大連王が地方首長であるにもかかわらず、大王として迎えられた大きな要因だったのだろうと言われております。尾張と近江は重要な地域勢力であったわけです。図2に示すように、近江を扇の要にして、日本海側の雄である越前と、太平洋側の雄である尾張とが手を結ぶ、それは都から東部の地域に当たる主要地域勢力が結集することを示しており、畿内の王権に圧力をかけて、大王の座、天皇の座に上り詰めたのだろうというわけです。

今回のフォーラムの時代テーマは、古墳時代後期、繼体天皇の頃から安閑、宣化、欽明、敏達、用命、崇峻^{あんかん せんめい けいつ ようめい そじゆ}といふ天皇の時代です。一般的には繼体・欽明朝といわれる時代なのですが、西暦では、だいたい500年から600年ぐらゐの100年間の時代だと思ってください。今から1500年ぐらゐ前の時代をイメージしていただければと思います。

(4) 古墳時代の位置づけと古墳時代後期の政治的な位置付け

古墳時代とは、古墳が造られた時代ですが、特に首長の古墳として、前方後円墳という特徴的な墳形の古墳を、首長たちの共通する墓の形態として位置付け、ヤマト王権の大王の墓をその頂点とし、それと同盟関係にある各地

報告篇

域の首長の幕を階層性に基づいて位置づける独特の古墳秩序が形成された時代とされています。この辺の説明は伊藤さんが詳しくお話をされると思いますので、省くとして、簡潔に言えば、初期国家が形成された時代に当たると考えられます。

古墳時代後期の次は飛鳥時代です。^{（さちじだい）} 飛鳥時代は、聖徳太子を摂政として律令の基礎をつくった推古天皇の時代以降にあたり、その後、成熟した古代国家が形成されます。そのような律令政治の仕組みができる政治的基礎が、この古墳時代に少しづつ形成されたわけで、初期国家から成熟した古代国家に移るまでの過程が、古墳時代だと考えていただければよいかと思います。

律令国家は中央集権国家であります。その国家体制を確立するために屯倉制、部民制、国造制という制度を用いて地方と人民を支配していきます。この辺の政治と古代国家論の話は菱田さんがご専門ですので、後でたっぷりとお話しいただけたるでしょう。成熟した古代国家形成の契機となった歴史上とても重要な時代、この古墳時代後期に、この小松市にある三湖台、そして江沼という地域が非常に重要な役割を担っている。それを皆さんに解説し、理解していただくことが今回のフォーラムの狙いです。報告、座談会を通して、浮き彫りにしていきたいと思います。

繼体天皇について、これまで時代的解説から政治的な位置付けまでいろいろとお話ししましたが、実は繼体天皇については謎も多く、いろいろな学者がいろいろな学説を唱えております。私が今お話ししたこととは、多くの研究者が提唱する話を簡単にまとめただけで、自分の学説を展開したわけではありませんので、その点はご理解ください。

さて、これからお話しする内容は、考古学の話が中心になります。そのため繼体天皇という話がなかなか出にくくなるかも知れません。その辺は討論のところで最後に少しまとめていきたいなと思っています。質問等についても、ストレートに繼体天皇について聞かれても、ちょっとお答えできないような部分がありますので、その点はご了承ください。

なお、資料の巻末に時代概説や用語解説、考古学資料の年代観基準とかいろいろ参考資料を載せてあります。話の中で少し分からぬ言葉とか、そう

いうものは一応想定して簡単に説明して書いてありますので、参考資料としていただけだとありがとうございます。

3. 古墳時代後期の江沼

(1) ヨヌノクニと南加賀地域の地形や地勢

古墳時代後期、南加賀の江沼という地域は、当時、ヨヌノクニと呼ばれていたと考えています。ヨヌノクニは余奴臣の支配する地であり、地域領域としては手取川から南側、福井県境までの広い領域、南加賀地域全体が当時のヨヌノクニにあたっていたと考えております。もともとの地域勢力は梯川や鍋谷川の河川流域を中心とする能美平野と動橋川や八日市川、大型寺川の

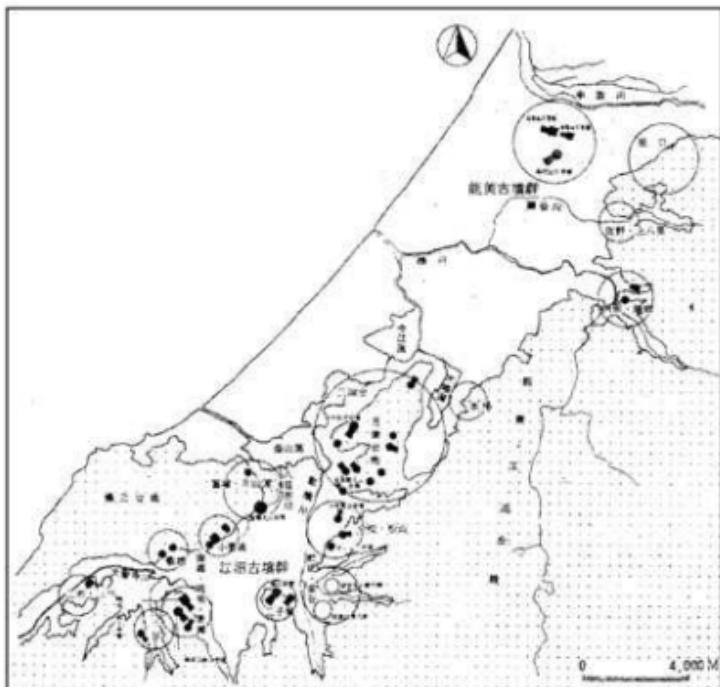


図3 能美地域と江沼地域の古墳群分布

河川流域を中心とする江沼盆地、江沼平野とも言いますが、そのように南北に2つの地域勢力がありました。北の能美平野には農業を生産の糧とする大きな集落がたくさん営まれており、図3に示すように、その東側の丘陵部、里に近い山には大規模な古墳群が形成されています。著名な能美市の和田山古墳群とか、小松市の河田山古墳群など、いろいろな古墳群がこの山側に分布しています。

江沼盆地の方も、河川流域に沿って楕円形の枠の領域に農業生産に従事する集落が営れます。ここは現在でも農業に適した穀倉地帯で、大規模に伝統的な集落形成がなされた地であると理解しています。その盆地の周りをぐるりと囲むように、丘陵地が連なりますが、図4に示すように、そこには多数の古墳群が分布しており、各集落群に伴う形で、その在所の里山に自分たちの先祖の古墳を代々作っていくといった様相が見てとれます。

これに対して三湖台地というのは、今江潟、柴山潟、木場潟の加賀三湖に囲まれた台地にありまして、その近隣には農業生産を基点とするような生活

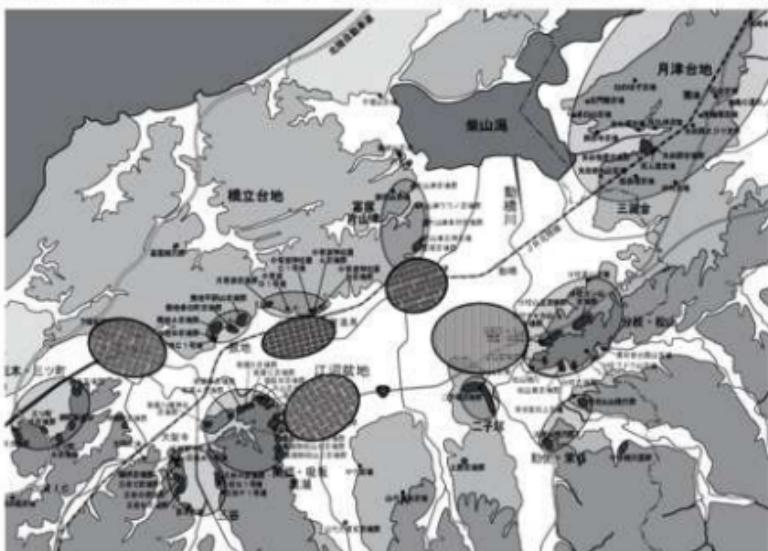


図4 江沼地域の古墳群と江沼盆地の集落遺跡分布

基盤を形成するような平野はなく、台地内においても、水田経営は困難な地域にあたっています。その視点で見ると、先にお話した能美の古墳群や江沼の古墳群のように勢力基盤となる平野を従えた立地をしていないという点で、同様の性格を与えにくい古墳群なのです。そうなると、どこを勢力基盤とする古墳群であるのかという考えが浮かんできます。江沼盆地の勢力なのか、能美平野の勢力なのか、はたまた、新興勢力、新しい勢力なのか。先ほど話した余奴臣との関係はどうなのか、この点が今回の報告の主要テーマなのです。

(2) 遺跡の分布動向から見た江沼盆地

江沼地域について少し詳しく話しておきますと、この盆地のなかに集落が形成されるのは弥生時代後期以降のことです。それ以降古墳時代、そして飛鳥時代、奈良・平安時代と、核となる大きな集落群が継続して営まれており、図4に示す楕円区画の中を中核集落域だとすると、その山側、集落の背後の山には古墳群が形成されているのです。集落と古墳群分布とが整然と対応しているかどうかというのは、私は厳密には分かりませんが、その辺については、伊藤さんの報告でご説明していただければありがたいなと考えています。

大まかには5つほどの核となる集落単位ごとに各地域首長の古墳群が築造されていく様相がざっと見て取れる。それが5世紀中頃を少し過ぎた頃、当地で古墳群が盛んに築造される最終段階頃に、丘陵部から一気に平野部に下りてくるような前方後円墳が出現します。平野の古墳という点に加え、盾形の周溝を持つ前方後円墳で、それまでの首長古墳とは異なる特別な存在として位置づけられた古墳であると理解されています。この古墳は孤山古墳と言いますが、その古墳には100とも言われる群集墳、小規模な円形の古墳が伴い、平地に出現てくるというのが、この江沼地域古墳群最大の画期といわれております。

この江沼盆地の中で各地に核となる集落群が飛鳥時代以降も継続して営まれていきますが、その延長線上にあるのが、古代江沼郡に所在する九つの郷

です。図5には古代の江沼郡内に分布する郷の想定位置と、白鳳期に営まれる古代寺院の位置を落としましたが、これを見ると、弓波遺跡のあるところが忌波郷、大菅波遺跡のあるのが菅波郷で、保賀遺跡のある辺りが山背郷です。山背は現在の山城温泉の山城にあたると考えられます。そして、西山遺跡のある辺りが郡家郷、勅使遺跡のある辺りが三枝郷と考えられます。このように江沼盆地の中に、古代の郷が置かれていくわけですが、その中でも中心となるような郷の中に、7世紀終末から8世紀初頭頃に、白鳳期の寺院が作られていきます。当時としては先進的な技術と文化をもって作られる寺院であり、建立する財力と権力が必要となる。寺院が作られるちょうど山側には、津波倉廃寺には狐山古墳、保賀廃寺には黒瀬古墳、弓波廃寺には富塚丸山古墳といったように、在地首長の古墳が存在する位置関係にある

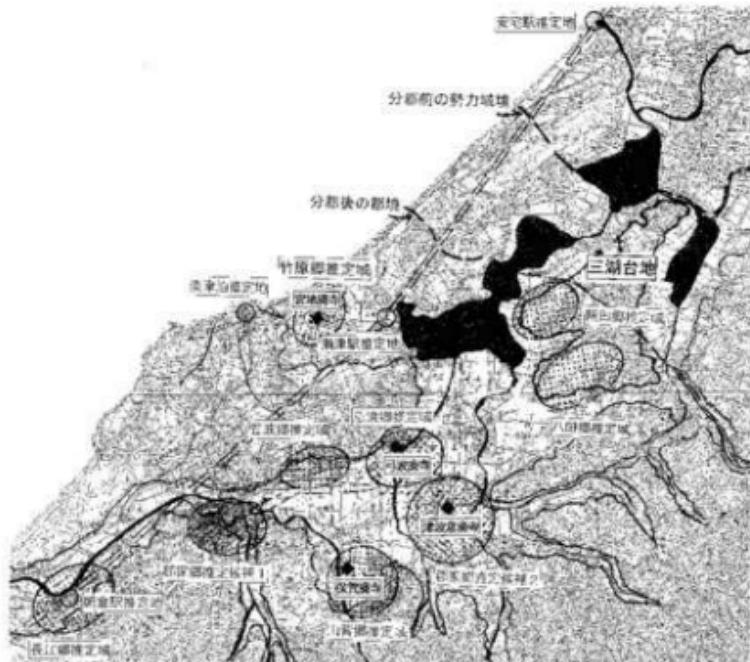


図5 江沼地域の郷比定地と白鳳期寺院の位置

ため、これら古代寺院はもともとの在地の地域勢力によって建立されたもの、地域首長が権力の象徴として築造してきた古墳から寺院という象徴の形へ移行したものとの関係が推測されるわけです。また、一方では、信仰の対象というか、祖先崇拜の対象として古墳を位置付け、古墳に祭られた祖先供養のために、寺院がその前面に建立されたのだと考えを示されている方もいます。

(3) 三湖台地の遺跡分布と三湖台地古代集落遺跡群

以上の江沼盆地の遺跡動向に対して、三湖台地は縄文時代こそは台地に広く集落が点在し、狩猟、漁労、木の実等の採取など、狩猟採取経済に適応できた地域であったと言えますが、弥生時代になりますと、小規模な集落が潟縁や潟から入る谷部に点在する程度となります。台地上と潟とは比高差が10 mほどありますので、台地上に水を引いて水田經營することは当時としては無理があり、農業生産經營を生業とする弥生時代には集落經營が困難であったろうと理解されます。当時の小規模集落經營はそのような理由があり、その後も古墳時代中期まで同様の状況が続くのですが、その集落も500年前後には確認できなくなり、後でお話します三湖台古墳群造営地、つまりは台地全体が墓域となるわけです。それが600年前後、飛鳥時代に入りますと、三湖台地には額見町遺跡^{内かみまち}と呼ばれる



図6 三湖台地古代集落群と丘陵部製陶製鉄遺跡群

はじめ、念仏林南遺跡、矢田野遺跡、薬師遺跡など竪穴建物を主体とする古代の集落遺跡が三湖台地に広く、面的に展開するのです。古代の集落はそれまでの古墳時代以前の集落規模とは全然違います。それがほぼ同時期に台地の北から南まで広く出現してくるということが大きな特徴であり、この時期に当地へ大規模な移民の入植があったことを示します。土器の様相や竪穴建物構造の特徴から、朝鮮系移民を核として近江とか丹波など関西東北部からの移民も加わっていることが分かっており、そういうた移民による大規模集落を形成していくというのが、三湖台地古代集落遺跡群の特徴です。

しかも、丘陵部に存在する南加賀窯跡群や南加賀製鉄遺跡群の経営と連携しており、三湖台地集落遺跡群が手工業生産を生業とする様相を有しています。先程、弥生時代以降の集落経営が衰退する要因として、当地における農地経営が困難であることを上げましたが、手工業生産を生業の中心におけば、集落経営に生かせる土地だったと思えるわけです。そこには加賀三湖、今江潟、木場潟、柴山潟とそれらを結ぶ河川、梯川の水上交通、流通が欠かせないアイテムとして存在していたと理解されます。図に示すように、三湖台地古代集落遺跡群は潟に面して営まれるのが基本であり、潟縁に沿って集落の広がりがあります。これらの集落遺跡群は、先ほど述べました古代江沼郡九郷の一つ、額田郷、八田郷にあたるわけでして、その郷名のとおり、その前身として額田部、矢田部という部民が置かれた地であったろうと理解されます。つまり、7世紀に成立する三湖台の古代集落遺跡群は部民集落の位置づけが可能であるわけです。

4. 三湖台古墳群の概要

(1) 三湖台古墳群の選地と造営主体

先に、三湖台地の地形環境は話しましたが、三湖台の地に古墳群を造営した要因としては、加賀三湖と河川交通、その要の地であることが重要な要素と理解しています。梯川流域の能美平野に面する小松東部丘陵地から能美丘陵にかけての地域や江沼盆地周縁の低丘陵地とは異なり、全く伝統的な集落地を有さない、三湖台地に古墳群造営地を選定するのは、古墳時代中期まで

の伝統的集落域に根差した里山に古墳造営地を置くという考え方を大きく変える何かが存在したと理解したい。しかも、能美地域古墳群と江沼地域古墳群の中間地に位置することは重要と考えられます。

この三湖台古墳群の造営主体については、江沼地域首長層が江沼盆地周辺に営んできた江沼地域古墳群をこの地に移動させたものという考え方と、江沼・能美とは異なる新興勢力がこの地に進出し、三湖台古墳群を造営したとの考え方がありますが、新興勢力だとすれば、その前提となる集落群が台地周辺に営まれることが必要であり、矛盾します。つまり、私は、江沼地域古墳群の造営主体である江沼地域首長が三湖台古墳群を築造したと理解していくとして、後で話します埴輪祭祀の問題や男大迹王の母方の外戚に余奴臣が存在するということと無縁ではないと考えています。

これまでの能美地域古墳群と江沼地域古墳群の勢力図から見て、江沼盆地から北に遷移して墓域を形成する意図は、能美地域勢力への牽制と江沼と能美の両地域を統一支配する統一首長を強くアピールする意識が存在したものと推測されます。また、南加賀地域の交通や物流の基軸となる加賀三湖を支配する王を強くアピールするため、それを見下ろす三湖台地を墓域に選んだのではないか。加賀三湖は梯川に出ないと日本海へは出られず、安宅湊が基点となっています。梯川と安宅湊を支配していたであろう能美地域勢力を強く牽制するために、北へ遷移し、三湖台地に古墳群造営する必要があったと考えるわけです。

しかしながら、能美地域古墳群も6世紀以降、前方後円墳は作られませんが、凝灰岩切石積横穴式石室をもつ有力者の古墳が継続的に造営される点から、江沼勢力との力関係の中で急速に勢力低下したとは言い難く、そこにはヤマト王権ないしは他の力を持つ地方勢力からの外部の力が加わっていた可能性があろうかと考えられます。ヤマト王権が展開する地方支配強化において、北陸の沿岸交通と港湾施設の確保は重要課題であり、加賀地域においてそのような沿岸交通の基点を作ることは必要であったと理解されます。安宅湊を港湾として機能的に利用するためには、加賀三湖と一体的に活用することが必須条件であり、能美と江沼を統一的に支配するために、ヤマト王権

主導で地域統合する必要があったのでしょうか。江沼地域首長は、男大迹大王の外戚としての立場により、ヤマト王権の後盾をもらった可能性は高く、能美地域勢力を牽制する形で、安宅湊から梯川、加賀三湖のルートを掌握したという考えが浮かんできます。

(2) 三湖台古墳群の時期と古墳群構成

三湖台古墳群は、最も北に位置する御幸塚古墳の5世紀末段階の出現をもって、本格的な造墓活動が開始されたと考えています。御幸塚古墳は全長約25mの前方後円墳で、円筒埴輪の樹立を作った古墳です。これに後続する前方後円墳は、6世紀前葉で矢田借屋7・8号墳、蓑輪塚古墳、6世紀中葉で矢田野エジリ古墳、矢田野4号墳、そして矢田借屋12号墳が続くと見られ、三湖台古墳群の中で最大規模（全長52m）を持つ白のはぞ古墳は、地域の盟主墳たる位置付けが可能と見ますが、5世紀前半に置く見方と6世紀中葉に位置づける見方があり、時期の特定ができない状態にあります。私は6世紀中葉とみますが、伊藤さんは5世紀前半の立場を取っておられます。

これら前方後円墳には埴輪樹立を作ったものが大半で、主体部は未調査のものが多く不明な部分が多いのですが、横穴系の主体部を



図7 三湖台古墳群の分布と周辺地形

もつ可能性があります。

ただ、当初から南加賀地域に一般化する凝灰岩切石積横穴式石室が採用されたとは考え難く、矢田借屋7号墳の調査報告で示された側壁を川原石と粘土によって構築するような横穴系の簡易な墓室や横穴式木室など、多様な構造のものであったと予想されます。6世紀中葉でも後葉に近い矢田借屋12号墳が築造されるのを最後に、三湖台古墳群から前方後円墳は消え、首長墳も円墳化して、2段築成の茶臼山古墳や切石積横穴式石室の符津石山古墳、矢崎B古墳、中村古墳へと変遷したものと考えられます。古墳群の終焉は矢田新丸山古墳の6世紀末葉で、ここでは大型自然石を使用する横穴式石室内に家形石棺を納めたとされています。

これらの古墳は、丘陵地の頂部に地域の盟主を意識するかのように立地するものや、潟に面する台地先端部に立地するものなど、単独か少數基で点在しているものが多く、群構成するものは多くないのですが、その中では、馬渡川の開析谷に面する台地先端部には複数の古墳が密集する傾向が見られま



図8 矢田借屋古墳群、矢田野古墳群、百人塚古墳の分布

す。右岸では、念仏塚古墳、念仏林古墳、左岸では、矢田借屋古墳群、矢田野古墳群、百人塚古墳、無名古墳群、矢田新丸山古墳と、多くの古墳が存在し、特に矢田借屋古墳群から矢田野古墳群、百人塚古墳の領域においては、全長25～35m程度の4基の前方後円墳を首長墳として、直径7～13mの19基の小規模円墳が群集して築造されます。これら小円墳の主体部は横穴式木室と言われる特徴的な横穴系墓室で、追葬も可能とする有力家長層の家族墓的性格を有していたものと考えられます。

このように、三湖台古墳群は、現在確認される古墳だけで、前方後円墳8基、円墳約40基、計50基程度を数えます。ただ、この場所を訪れた方は分かると思うのですが、台地中央を国道8号線が縦断し、市街化されている地域ありまして、古くに多くの古墳が壊されていた可能性が高く、古墳群の実数としては100基近かったのではないかと考えられています。この時期の加賀地域の古墳群は衰退期にあるため、三湖台古墳群は加賀地域最大規模であり、最大権勢を誇った古墳群と言えるわけであります。

5. 南加賀窯跡群の成立

(1) 窯跡群の立地と成立時期

次に南加賀窯跡群についてお話しします。この窯跡群は小松市の林町から加賀市松山町の低丘陵上に分布する須恵器窯跡群で、北陸随一の規模と内容を持つ遺跡です。須恵器とは朝鮮半島から5世紀初頭頃に日本へ導入された古代陶器であり、その焼成には窯窓と呼ばれるトンネル式の構造窯が使用されました。それが北陸へ導入されるのは、5世紀終わり頃、三湖台古墳群が造営を開始するのとほぼ同時期であります。しかも窯跡群の出現期段階の窯の分布は、古墳群に最も近い地点、二ツ梨オオダニの入口付近にまとまりまっておりまして、三湖台古墳群から南東方2～3kmの丘陵地入口に位置します。

6世紀代は三湖台地に近い、二ツ梨オオダニと戸津オオダニの結節点を基点として、6地点14基以上の須恵器窯跡が確認されています。ただ、この時期は7世紀以降に比べると、1基の窯で生産される須恵器の量が多く、窯の床を何回も貼り替えながら、焼いていくのです。一つの窯で8回の窯の改

造を行なうながら、50年以上にわたり焼成している窯もあり、古代の須恵器窯の中では突出した操業回数と理解されます。つまり、以降の時期の窯に比べて、生産期間が長く、数倍の生産量をもつ須恵器窯であったわけであって、窯の数からイメージされる生産規模をはるかに超えたものであったと理解されます。

もう一つ、この時期の須恵器生産の特徴として、須恵器窯を使用して埴輪を焼成することがあげられます。二ツ梨殿様池窯、二ツ梨豆岡向山窯では須恵器とともに埴輪が採集できており、埴輪と須恵器を焼く埴輪兼業窯であったと理解されます。また、二ツ梨殿様池窯では矢田野エジリ古墳で出土する人物埴輪が採集できています。円筒埴輪も含め、矢田野エジリ古墳に樹立する埴輪の多くがここから供給されていると予想されます。

この二ツ梨オオダニと戸津オオダニを基点とする須恵器窯場も6世紀末をもって生産を停止し、7世紀初頭には南加賀窯跡群の南端地域と北端地域に分かれて分布するようになります。北端の戸津・林地区の窯場グループは、

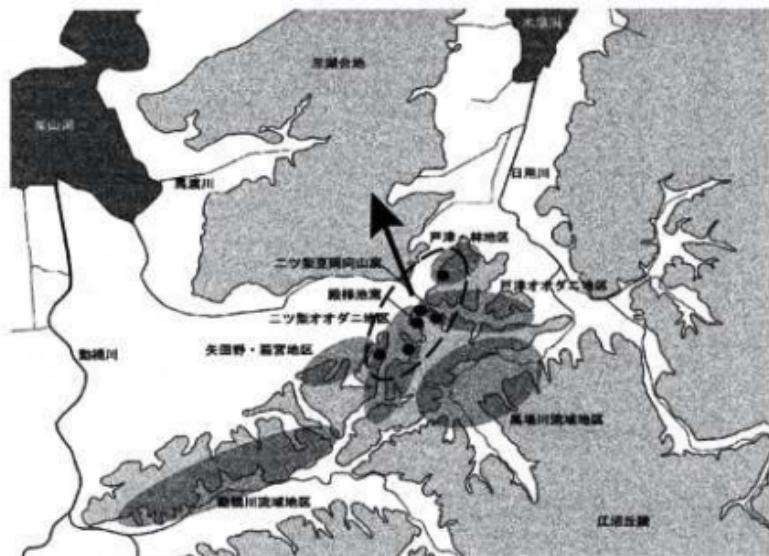


図9 南加賀窯跡群の周辺地形と窯跡分布地区

現在小松ドームの建っている辺りがそうですが、二ツ梨オオダニ・戸津オオダニ地区から元々いた須恵器工人を軸に北へ移動して編成された可能性が高いと思われます。これに対し、南端の分校・松山・那谷地区的窯場グループは、先ほど話の中で登場しました金比羅山窯はこの地区ですが、窯場の数や生産規模も倍増していますので、多分、南端グループは新たに参画した工人を軸として経営がなされたものと考えられます。これは、須恵器生産に見る新しい技術や器の形、東海地域の窯に多い特徴がみられる須恵器が突如出現するなど、南の窯場グループでは新しい工人が生産に加わった形跡が見えることによって、証明できそうです。

何故、窯場を移動させたかという点については、三湖台古墳群の消滅と大きく関わっていると理解されます。この時代は大きな社会変動があった時代であり、三湖台古代集落遺跡群の成立や額田里（郷）と八田里（郷）の経営とも関連しそうです。また、河川や渦を使用した水上交通にも関連しそうで、南端の窯場グループは那谷川から動橋川そして柴山渦へ、北端の窯場グループは日用川から木場渦へというルートであり、南端は額田里、北端は八田里というように、出荷する基点によって、窯場分布が分かれた可能性があるのではないかと考えています。

（2）須恵器の特徴と南加賀窯跡群の概要

南加賀窯跡群の須恵器生産は、これ以降も生産を続け、10世紀中頃まで継続します。500年弱という非常に長い期間にわたり須恵器の生産をおこなっており、確認される窯跡の数は200基を超えてます。実数としては、たぶんその倍以上あるのではないかなど考えておりまして、この数は間違いなく北陸で最大規模と言えるものです。

北陸だけではなく、東日本の中でも突出した規模であり、生産を継続する期間の長さを考えても、北陸の拠点窯の位置付けができるものと見られます。東海には愛知県の尾張猿投窯跡群をはじめ、美濃や湖西にも拠点窯が存在するため、東日本最大規模とは言いませんが、5本の指には入る。東日本の中でも中心的な窯、そのような大規模窯が小松に所在しているというの

が、重要なことなのです。

須恵器は能登の珠洲焼^{すずしやき}みたいな灰色の陶器質の焼物です。自然釉なんかも溶けるような、1200度を越える温度で焼成され、硬質に焼き上げます。図10のようにトンネル式の窯で焼きますが、この技術は朝鮮半島を起源とするものです。

これに対し、縄文時代から続く伝統的な赤い素焼きの焼物は土師器です。須恵器と異なり、窯を作らず、直に焚き火の火がかかるようにして焼成するもので、野焼き焼成と言いますが、700～800度程度で焼成される軟質の焼物です。

土師器が伝統的な技術に根ざす焼物、須恵器が新しい技術、朝鮮半島からの技術者によって誕生した焼物で、両者には根本的な違いがあることを覚えておいてください。



図10 須恵器窯の復元イラスト

(3) 窯跡群成立の背景

北陸各地の須恵器生産は、500年を前後する時期、二ツ梨で須恵器窯がつくられる頃とほぼ同時期に各地で始まったと考えています。まず、日本では最初に大阪の陶邑窯跡群で朝鮮半島からの須恵器生産技術が定着し、その技術を地方に拡散させる形で、各地で須恵器生産が開始されるようです。陶邑窯跡群は日本最大の須恵器生産地であり、ヤマト王権のお抱えの窯場として機能していました。つまり、ヤマト王権が地方へ技術を分配する形で広まったわけでして、そこには陶邑窯跡群の技術者が地方へ出向くか、地方の土器作り職人が陶邑窯跡群へ研修に行って地方へ持ち帰るか、直接的な人の移動に伴って技術拡散したものと理解されています。

この点は、ご専門である菱田さんから後ほど詳しくお話をあると思いますが、特に、北陸各地の須恵器生産の開始に伴っては、北陸の国造が何等かの関係をもって存在しているのではないかと考えています。図11に6世紀の須恵器窯分布をあげましたが、福井の松岡永平寺窯が高志の国造の分布と、金津鍊谷窯は三国の国造と、南加賀窯は江沼の国造と、加宜国造・加我國造は窯が不明ですが、羽咋柳田ウワノ窯が羽咋の国造と、鳥屋深沢窯は能等の国造と、富山園カンデ窯は伊弥頭の国造というように、国造に任命された在地首長領域に初期の須恵器窯が成立しているように見えます。単なる偶然かもしれません、ヤマト王権へ忠誠を誓い、國ノ御奴、国王に仕える官僚的存在として身を置くことへの代償として、ヤマト王権が掌握していた焼物の先進技術を国造本拠地へ分配したのではないかと、想像されるのです。

(4) 南加賀窯跡群の生産規模

南加賀窯跡群の須恵器生産は6世紀を通して継続的に行われますが、越前地域に関しても一定量の須恵器生産を維持します。さらに、埴輪生産を兼業する体制が組まれており、若狭から加賀地域までは同様の様相が見られます。これに対して能登地域や越中の須恵器窯では、6世紀前葉までは須恵器生産を活発に行なうのですが、6世紀中葉には生産を縮小させ、7世紀に入るまではそぞろとして生産を行う程度となります。埴輪生産の兼業体制をとらず、須恵器のみを生産する小規模なものです。

能登や越中の須恵器生産が急速に縮小の様相を見せる6世紀中葉段階になると、南加賀窯跡群の須恵器生産は活発化します。窯場の拡大と須恵

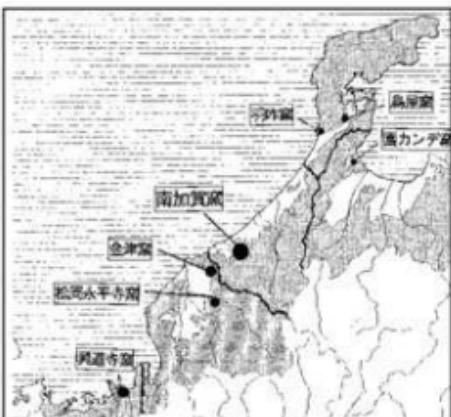


図11 6世紀の須恵器生産地分布図

器生産量の増大を図り、須恵器をなんと舟に載せて、能登半島に運び、そこからさらに越中、越後、遠路はるばる海を北上し、越後北端地域や出羽まで運んでいたようです。最近の越後や出羽の集落遺跡発掘調査資料のなかに、南加賀窯産須恵器らしきものが複数存在するとの情報を受け、私は現地に行って確認したのですが、間違いなく、6世紀中葉から7世紀前半においては一定量の南加賀窯産須恵器が流通していることを確認しております。流通しているのはこの時期だけでありまして、日本海側東北部の広い範囲を流通圏とする須恵器生産地であったわけです。これは全国的に見ても、稀な存在で、この時期にこれだけの広域な須恵器流通を行う窯場は東日本では愛知県の尾張猿投窯跡群に限られます。西日本でも陶邑窯跡群以外、あまり例を知らず、日本海沿岸地域の中では唯一の存在ではなかったでしょうか。

南加賀窯跡群が広域流通する6世紀中葉段階、どうも陶邑窯の技術系統ではない、陶邑とは違うような独自色を持った須恵器が生産されるようになります。尾張とか朝鮮半島の関連性なんかも想定できるような形、器種、技術を導入しているようで、このような新たな技術を導入することによって須恵器生産を拡大、組織を整備し、地元主導による安定した生産の段階に入ったものと理解されます。この生産体制整備は流通網の整備と一体的に行われた可能性は高く、その流通網整備には、江沼地域の在地首長と能登や越中、越後、出羽の在地首長との地域間交流が根底を支えていたものと理解されます。須恵器という東北部においてはまだ高価な焼物をもって、交流の材料としていた可能性が見てきましょう。そこに男大迹王の存在や時のヤマト王権などがどのように絡んでくるのか、その辺は討論において検討材料にあげられたらと考えています。

6. 三湖台古墳群を特徴付ける要素

(1) 小規模前方後円墳としての特質

三湖台古墳群を特徴付ける要素として、小規模ながら、前方後円墳を盛んに築造すること、横穴式木室という特徴的な主体部を導入させること、そして古墳の周溝に埴輪の樹立を伴うことの3点を上げたいと思います。

第1点の前方後円墳建築については、後ほど伊藤さんからお話があると思いますので簡潔に話しますが、この時期に加賀地域で前方後円墳を盛んに建築するのは三湖台古墳群だけでありまして、能美地域古墳群や江沼地域古墳群では5世紀後葉をもって前方後円墳はほぼ建築しなくなります。前方後円墳と言っても、大規模なものはなく、白のぼぞ古墳の全長50mが最大で、30m前後が主体です。このような小規模前方後円墳でも、その周辺には円墳を多数群集させる様相があり、首長墳としての位置付けがなされます。

このような小規模前方後円墳を建築することが当期の特徴であり、規模に関係なく前方後円墳を建築すること、それを可能とさせたことが三湖台古墳群の力の誇示、ヤマト王権との繋がりを示す要素ではなかろうかと考えます。

(2) 横穴式木室の採用

a. 横穴式木室の構造と性格

第2点としてあげました横穴式木室について構造的特徴を整理します。

横穴式系墓室の中では横穴式石室が有名ですが、その横穴式の墓室を作るのに木組み構造によって部屋を作るものです。まず、床に4本か2本の木柱を配し、周縁の溝に板材、柱で桁を組んだ上に屋根を乗せて、垂木を下げるようにして合掌作りの小屋を作り、墓室の骨組みとします。これに壁や天井を粘土で覆って作るものでして、粘土で覆わない木を密に渡して作るものもあります。床には礫が敷かれ、お棺は部屋の奥に安置されたと見受けられます。また、遺存状態の良好であった小松市中海町にあるブッショウジヤマ古墳の事例からは、一部羨道といって墓室に入るトンネル状の入口もみつかっています。

これら横穴式木室は、円墳など、古墳の序列の中では1ランク下の墳墓に採用される埋葬施設でありまして、前方後円墳でも蓑輪塚古墳で確認事例があるのでですが、これは古墳の括れ部に作られていたものであって、後円部には主要な埋葬施設が存在するものと予測されていますので、例外的な存在と考えています。つまり、首長の古墳には採用されなかった埋葬施設と言えそうで、三湖台古墳群の中では8例が確認されますが、円墳で埋葬施設が残っ

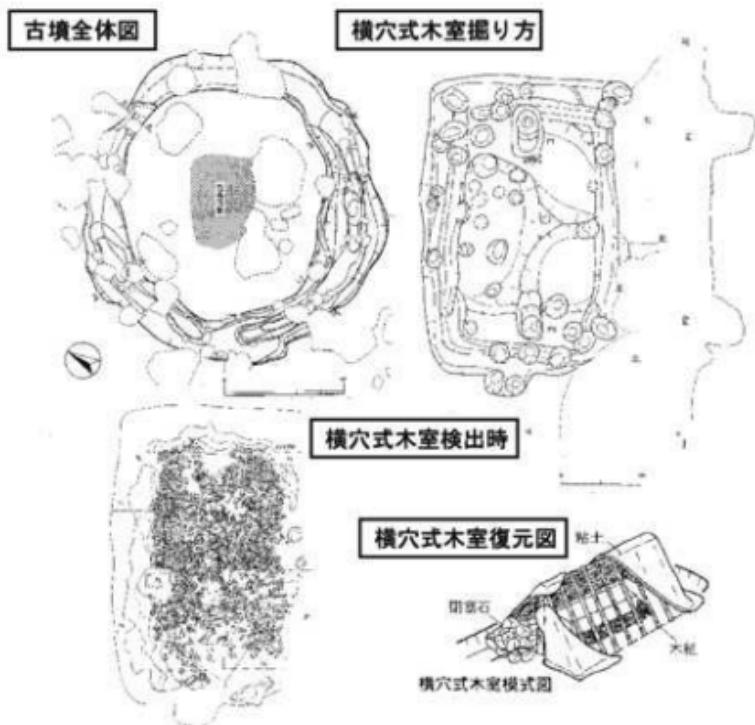


図12 矢田借屋16号墳の横穴式木室(右下模式図は田村隆太郎氏による)

ていたものは全て横穴式木室であり、この古墳群では一般的な埋葬施設であったと考えられます。

この横穴式木室ですが、横穴式墓室特有の追葬事例も確認されています。いくつか事例はあるのですが、念佛林古墳などのように、墓室内に残されていた複数土器には6世紀前葉と6世紀後葉の2時期のものが多く、また、前の埋葬に伴う土器を隅のほうに片付けてから、追葬が行われている事例も見られます。

b. 横穴式木室の系譜

この横穴式木室の呼び名は古くから様々な名称がありまして、その辺は伊

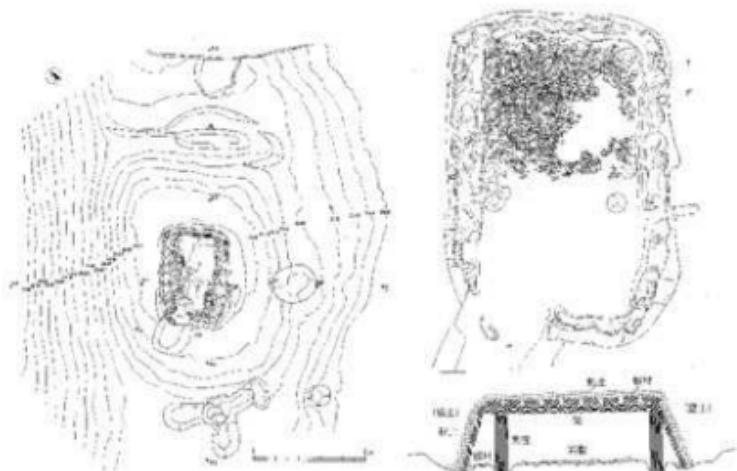


図 13 ブッショウジヤマ 2 号墳の横穴式木室

藤さんの報告で触れていただけたと思いますので、私は省略させていただきますが、今回の報告において、横穴式木室と呼称したのは、北陸以外の類似構造を持つものも合わせて検討するためであります。私は、この墓室構造の特徴として、追葬可能な家族墓的な性格を持つことと木組み構造を基本として横穴系の墓室であることが基本であると理解します。粘土で覆う構造を有していないとも、墓室内を焼成していてもそうでなくとも、同様の墓室構造と位置付けたく思います。

そのように見ていきますと、図 14 に上げましたように、東海の遠江と伊勢、関西の近江、摂津、和泉、播磨、丹波などに分布が確認されます。三湖台古墳群以外にも、江沼地域古墳群で 2 例、能美地域古墳群で 4 例確認でき、三湖台古墳群のみならず、南加賀地域に広く受け入れられた墓室形態であると理解されます。この東海や関西のものと南加賀のものでは、異なる構造を有すものだと従来言われてきたのですが、基本的な構造を見ていく中で、どう見ても一致するものだろうという考えに至りました。

この横穴式木室の出現時期は、三湖台古墳群では 6 世紀前葉の段階です

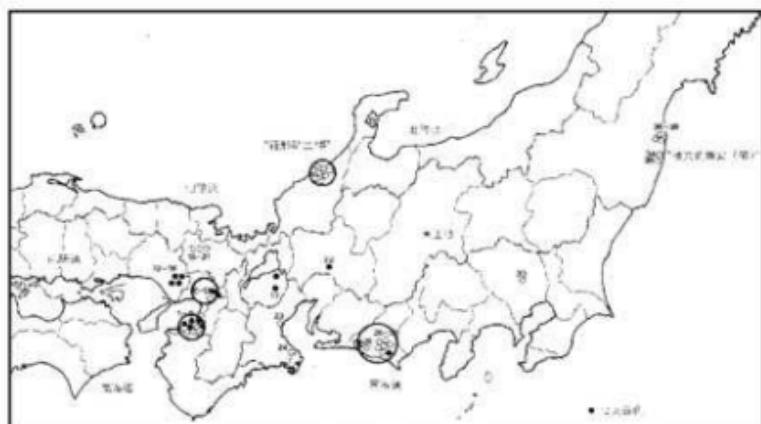


図14 横穴式木室をもつ古墳の分布

が、他地域の特に古いといわれている事例でも6世紀中葉頃のものでして、主体は6世紀後半から7世紀という時代的な違いは明確であります。つまり、三湖台古墳群の横穴式木室は全国でも最古段階に位置付けられるものでありますし、しかも、6世紀中葉までに中心がある点で、国内ではこの南加賀地域が出現地であったと位置づけられるわけであります。ただ、このような特異な墓室形態は、自然に生まれてくるものではなく、おそらく他地域から導入されたものでしょうから、国内で南加賀が最も速いとなれば、大陸、朝鮮半島などをその系譜の候補地に上げられるだろうということになるわけです。

さて、この横穴式木室の分布ですが、6世紀の須恵器窯跡群の位置と重複ないしは近接する事例が多い印象があります。和泉の陶邑窯跡群内にはカマド塚と呼ばれる横穴式木室の墓内焼成タイプが確認されており、摂津や丹波においても須恵器窯跡群と工房、横穴式木室と同じ領域内に存在することが確認されています。東海の遠江と伊勢は、同時期の須恵器窯が同じ領域内に営まれる事例は確認できませんが、もう少し領域を広げれば、該当する須恵器窯跡群は確認される地域であります。

須恵器生産の開始に際しては、先進的技術を保有した職人の確保が必要であり、特にこれだけの生産規模をもつ南加賀窯跡群であれば、多くの須恵器

人が移住してきた可能性は高いと言えましょう。それが陶邑窯跡群などのヤマト王権を介した生産先進地からのものであったとしても、その根幹的技術を保有する朝鮮半島からの技術者が介在していた可能性は十分にある。須恵器生産の開始を契機として、朝鮮半島からの移民が導入され、彼らに伴って当墓室形態も当地にもたらした可能性は十分に考えられると思います。ただ、朝鮮半島での横穴式墓室の検出事例は今のところありません。この点は今後の課題としておきたく思います。

整理すると、横穴式木室は前方後円墳よりも少し下のランクの人たちの墓であり、有力家長層と言っていいかどうか分かりませんが、トップの首長ではないことは確かです。加えて、全国的に見ると、須恵器生産の導入と深く関係がありそうであり、南加賀窯跡群の成立時期との一致などから、須恵器作りの工人、その工人の中でも上の階級の人でしょうが、そのようなランクの人が自分たちの故郷で伝統的に守られてきた埋葬の形態を当地に持ち込んだのではないかと考えます。その系譜を日本で追えないといえば、やはり朝鮮半島に求めざるを得ず、それが若干タイプを違えて、出現時期を過ぎて、横穴式木室が各須恵器窯場に出現する要因なのだろうと考えます。その導入地域からさらに周辺波及していくことも、特異な墓室形態であったことを裏付けるでしょう。

7. 三湖台古墳群の埴輪と埴輪生産

(1) 墓輪樹立の特徴

三湖台古墳群のもう一つの特徴として、埴輪の樹立があります。埴輪は古墳の墳丘の周縁を巡るようにして人物や円筒の埴輪が立つのですが、その様子を矢田野エジリ古墳の埴輪をもとに解説していきます。まず、矢田野エジリ古墳埴輪出土の分布図ですが、図 14 のように細かな点を落としてあるのは円筒埴輪や人物埴輪の出土地点です。人物埴輪は図に示した破線内に集中する傾向があり、かなりばらばらの小破片で出土したのですが、それをもとに復元すると、このような古墳の墳丘を巡る埴輪のイメージになるかと思います。

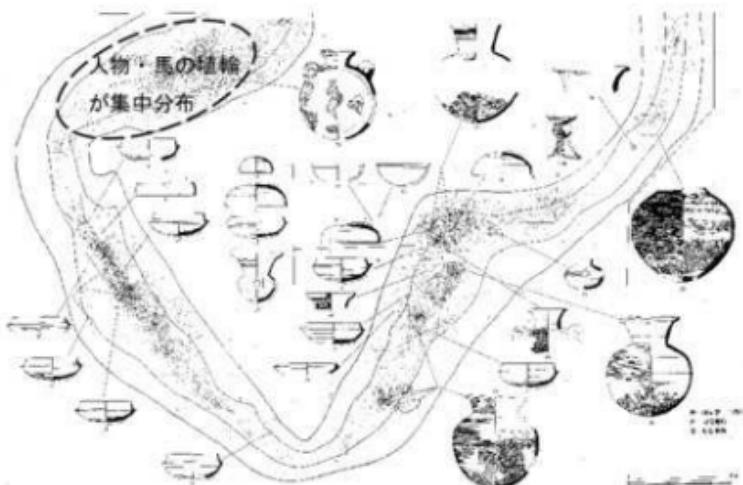


図15 矢田野エジリ古墳の埴輪分布と人物埴輪分布

石室か祭壇の近くに人物の埴輪が巡ることが多いよう、その他の周縁は円筒埴輪、この土管状のものですが、それが巡るというイメージを思ってください。

埴輪の樹立は、三湖台古墳群では出現期古墳とされる御幸塚古墳において確認されますが、江沼地域古墳群ではそれを遡る5世紀後葉の二子塚孤山古墳において人物埴輪を含んだ埴輪樹立が確認されます。二子塚孤山古墳は江沼地域の統一首長とされる前方後円墳でありまして、ほぼ同時期とされる巨大円墳の富塚丸山古墳においても、埴輪樹立を伴っていたとされています。

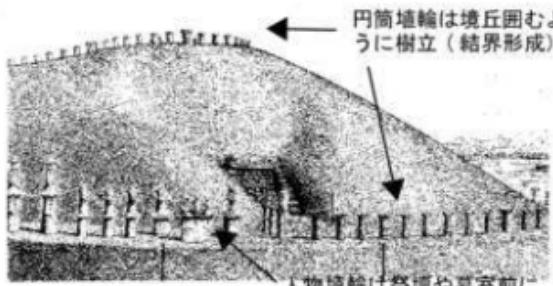


図16 円筒埴輪と人物埴輪の樹立イメージ

このことは江沼地域の盟主墳たる証として埴輪樹立を伴っていた可能性があり、注目してよい点だと思います。これに対し能美地域古墳群においては、時代を問わず、埴輪樹立を伴う古墳は確認されていません（後日、秋常山2号墳出土を確認。5世紀前半）。このことは三湖台古墳群の首長墳が、江沼地域古墳群からの首長墳移動であったと言われる一つの要因でもあります。

埴輪の樹立はどのような古墳にでもあるというわけではなく、主に前方後円墳に確認されます。矢田借屋古墳群事例では小円墳からも出土が確認されますが、近隣に前方後円墳が存在しており、そこから紛れ込んだ可能性があります。仮に、円墳に伴っていたものであったとしても、木室の入口付近に数個体置く程度の墳丘を全周して樹立というものではなかったのでしょうか。つまり、首長クラスにのみ埴輪祭祀が許されていた可能性が高いだろうと思っています。

（2）南加賀窯跡群の埴輪生産

埴輪の生産は、古墳祭祀に伴う特殊な土製品製作であり、伝統的に守られる約束事に基づいて製作された特殊な焼物です。もともとは土師器焼成と同様の野焼き焼成によって生産されていたのですが、日本に須恵器窯という窯窓構造が朝鮮半島から導入されるや、窯窓による大量生産が行われるようになります。江沼地域で出土する埴輪は、出現期である二子塚孤山古墳の段階から、窯窓で焼かれておりまして、その窓の構築方法や焼成技術を導入するにあたっては、成形技法と同様に専門的な技術をもつ専門の工人が生産に参加し



写真1 二子塚古墳出土円筒埴輪

た、他地域から招いた可能性が高かろうと考えています。

規模の大きな古墳の外周に埴輪を巡らすとすれば、相当数の埴輪を短期間に用意する必要があったわけです。二子塚古墳は5世紀後葉に位置づけられ、南加賀窯跡群の成立以前でありますし、それ以降の御幸塚古墳など、三湖台古墳群の埴輪とは異なる粘土、作り方の特徴、例えば外側を赤く塗るなどの特徴の違い、焼き具合なども少し違う様相が見られます。三湖台古墳群の埴輪は、南加賀窯跡群で生産したものであることがほぼ確認されていますが、これら特徴の違いから見て、二子塚古墳の埴輪生産は古墳の近隣地域、地元での生産の可能性が高いのではないかと考えています。

三湖台古墳群の埴輪は、5世紀終末の御幸塚古墳が最初で、この埴輪は南加賀窯跡群内で生産されていたことが、使用する粘土の化学分析からわかっています。埴輪の成形技法も、二子塚古墳のものに比べて精巧な作りをしておりまして、二子塚古墳の埴輪とは異なる新たな埴輪作りの技術者との接触によって、南加賀窯で生産が開始されたと見ていています。

南加賀窯跡群における埴輪生産は、二ツ梨般様池窯や二ツ梨豆岡向山窯での同じ窯内における須恵器と埴輪の兼業体制から、5世紀終末段階から須恵器と同じ窯窓を使用して焼成された可能性が高いと考えられています。ただし、須恵器が明らかに1000度を超えるような高火度還元焰焼成が行われ、陶器質の灰色の焼物であるのに対し、埴輪は1000度未満の低火度酸化焰焼成品で十分なわけで、伝統的な赤い埴輪色を強く意識した、別の焼物として生産されていると考えています。このような温度も焼き色も全く異なる焼物を一つの窯で同時焼成することは不可能であり、別々に焼いている。しかも、異なる人が焼いている可能性が高いと考えています。焼物を作る粘土の調合の仕方も違いまし、作り方も違う。須恵器と埴輪とは基本的には別の職人たちの組織によって、製作されたものだろうと考えるわけです。

須恵器は恒常的に一定期間、1年間に必要なだけの量を生産していくといった生産をおこなっていくようなものであり、継続的な季節労働として毎年行われるような性格のものであったとすると、埴輪生産というのは、いつ古墳がつくられる状態になるのか分からぬ。首長が死没し、さあ古墳を築

造するという時に臨時に編成される可能性が高く、不定期労働であったと言えます。しかも、古墳の墳丘を巡らすだけの必要個数を確保する必要があつたわけで、臨時に編成されるが、その規模は須恵器生産よりも大きく、緊急性を要したものだったのでしょう。そこには須恵器工人や土師器工人も臨時に動員された可能性が高く、伝統的な埴輪作り職人を軸に生産組織を組むものであったと考えられます。

矢田野エジリ古墳を事例に円筒埴輪の必要個数を復元すれば、だいたい1mに1個の割合で埴輪が樹立していたと想定した場合、30m規模の前方後円墳だと、だいたい90個ぐらいの円筒埴輪が必要かなとイメージされます。通常の窯窓でしたら、だいたい最低2回は焼かなければいけない。エジリの埴輪は10人職人がいたと想定されていますし、それぐらいの生産の体制をつくって生産に臨んだと考えています。

(3) 三湖台古墳群の埴輪変遷

a. 出現期の埴輪

三湖台古墳群の出現期の円筒埴輪は、御幸塚古墳、500年前後のものなのですが、桶のタガに似た突帯を3段に巡らすものです。写真2の左には2段の突帯しか見えませんが、突帯間に開けられる円形の透かしが上の欠けた部分にも見られますので、3段の突帯が巡るタイプ、これを4段構成の円筒埴輪と呼びます。二子塚古墳の円筒埴輪も4段構成で作られておりまして、共通する技法と言えます。いずれも低い温度の酸化焰焼成で赤く発色をします。

底部には内側への出っ張りがあり、これは粘土が乾燥しないうちに粘土紐を積み上げ成形するために、粘土の重さによって底がゆがんでしまったものですが、このような底に出っ張りのゆがみをもつのが、この円筒埴輪の特徴なのです。「L字形内屈底部」と呼んでいるものなのですが、4段構成埴輪の特徴とともに三湖台古墳群において、伝統的に見られる特徴なのです。

また、この段階の円筒埴輪にはB種ヨコハケと呼ばれる、近畿方面の埴輪に見られる特徴的な調整が見られます。写真2の右上に見られるように、切れ目が入りながらハケ目がつながっていくもので、だらだらと伸びているも

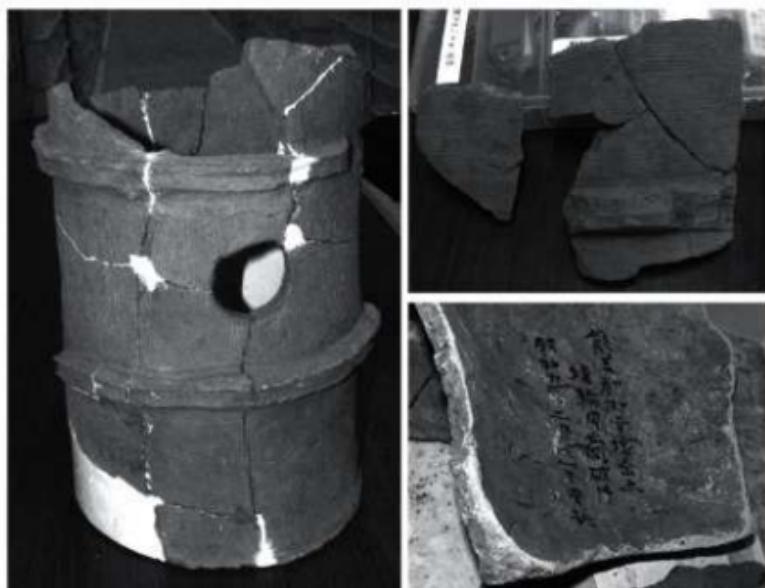


写真2 御幸塚古墳出土円筒埴輪（右上：B種ヨコハケ、右下：L字形内屈底部）

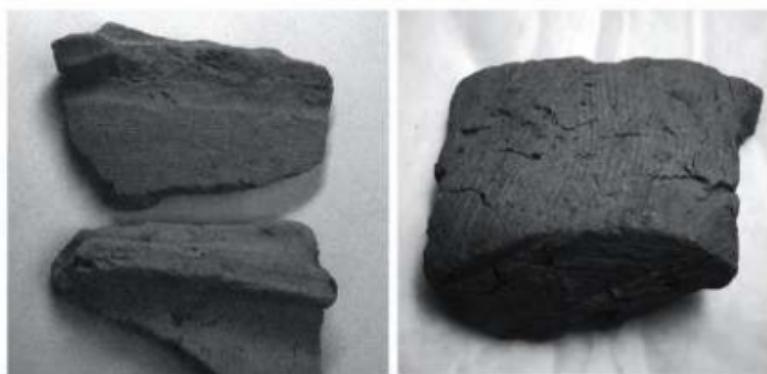


写真3 矢田借屋8号古墳出土円筒埴輪（左上：B種ヨコハケ、右：L字形内屈底部）

のもありますが、そのようなあまり丁寧でない技法は二子塚古墳でも見られるものです。もともと近畿圏の埴輪技法ですので、職人がこっちに来たまたは作り方を近畿地域の職人に教わった可能性がある。二子塚の円筒埴輪から御幸塚の円筒埴輪へ、焼成方法や表面の発色の仕方が違ってきているので、南加賀窯跡群で生産するようになって、若干埴輪製作の方法が変わった可能性はありますが、基本的に同様の円筒埴輪を作ろうとしている。または一部技術を受け継ぎながら、南加賀窯で埴輪生産を行うようになったのではないかと考えます。

このような円筒埴輪の特徴は、B種ヨコハケというようなものとか、突帯の形とか4段構成、L字形内屈底部の特徴は、6世紀前葉の矢田借屋8号墳の資料や、二ツ梨豆岡向山窯跡の資料でも確認されるものであり、この段階までは二子塚以来の伝統的な埴輪生産を行う段階と言えそうです。

b. 6世紀中葉前半の埴輪

これまでお話してきました円筒埴輪は、下から粘土紐を順に上へ僅かに上が広がるように積み上げて、外側に縦方向のハケ目調整を行いながら突帯を巡らし、4段まで積み上げてから、円形のスカシ窓を開けるもので、このような通常の下から順に作っていく円筒埴輪成形を正立技法と言います。これ

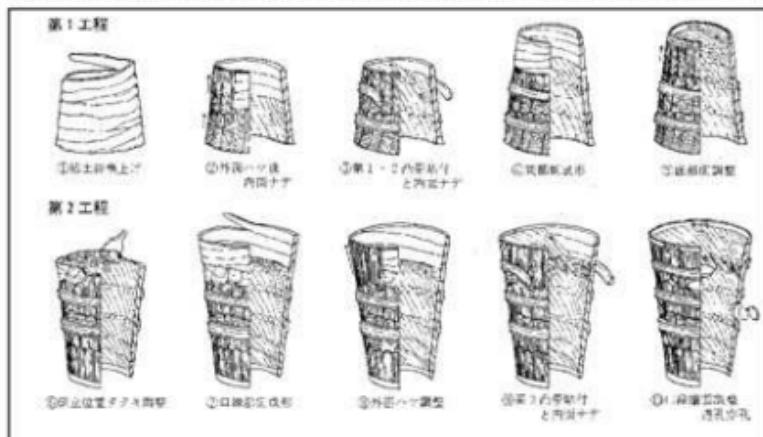


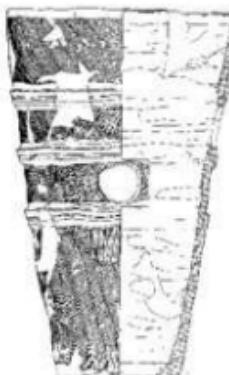
図17 矢田野エジリ古墳出土の円筒埴輪に見る倒立技法製作工程復元図

に対し、矢田野エジリ古墳の埴輪では倒立技法という方法によって作られた埴輪が大半を占める状況が見られます。

倒立技法とは、図17に示すように、下から粘土紐を僅かに狭まるように積み上げていって、縱方向のハケ目調整を行なながら突帯を巡らし3段目まで来た時に、上端にあたる部分をケズリやナデできれい仕上げ、上下をひっくり返す技法です。倒立後、それまで下部であった箇所に須恵器の張作りにおいて使われる叩き板を使用した整形を行った後、さらに1段粘土紐を積み上げて、ハケ目調整、突帯貼付、上端の仕上げ調整、スカシ窓を開けて完了するという、特徴的な円筒埴輪を作り出します。

4段構成は伝統的な正立技法と同じですが、倒立技法は全体的な粘土の厚みが違い、特に底の部分は薄く作られる手間隙かけた、こだわりの円筒埴輪と言えます。この倒立技法によって作り出される円筒埴輪は、ほとんどが表面チョコレート色で、須恵器と同じような灰色のものも二ツ梨殿様池窯跡から出土しています。御幸塚古墳のものとは、焼きの質が全く異なつおり、本当に須恵器と同じような硬質の質感を持ち

伝統的正立技法の円筒埴輪



淡輪系正立技法の円筒埴輪



尾張型倒立技法の円筒埴輪

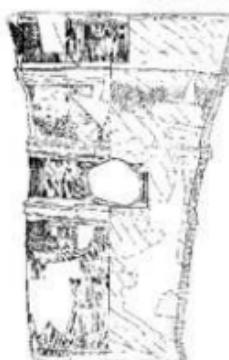


図18 矢田野エジリ古墳出土の円筒埴輪

ます。表面チョコレート色のものも、割れた面は須恵器と同じ灰色で、かなりの高温で焼成されていることがわかります。ただ、先ほども話しましたが、須恵器にはこのようなチョコレート色の発色を意識的に行ったものではなく、その点が須恵器と埴輪を同時に窯で焼成していない理由でもあります。

これら倒立技法による円筒埴輪は、東海尾張の古墳群が発祥で、尾張型埴輪とも呼ばれているものです。須恵器窯跡で焼かれる埴輪であることも共通しており、尾張から伊勢、近江地域に確認されています。

矢田野エジリ古墳出土の円筒埴輪は、8割か9割が倒立技法なのですが、それにまじって正立技法の円筒埴輪が確認されます。図18に上げるように、先ほどから話した伝統的な作り方の円筒埴輪と、もう一つは作り方に特徴のある円筒埴輪で、淡輪技法と呼ばれるものです。淡輪技法の円筒埴輪は、正立技法の中ではあまり上へと開かない形のもので、底に埴輪の基底の形が崩れてゆがまないように輪台をはめた跡があります。図の下のほうの矢印で示した外側に段の付いた部分がその痕跡で、もともとは大阪南部地域の円筒埴輪作りの技法であったものが、エジリ古墳の埴輪製作段階に当地へ導入されたものと見られます。これら正立技法の埴輪は、もともとの伝統的な埴輪が黄色っぽい焼き色、淡輪技法の埴輪が赤っぽい焼き色で、倒立技法のチョコレート色とは明瞭に異なっています。つまり、同じ窯で焼成したものではなく、他の窯から持ち込まれたものと見られます。それは南加賀窯跡群ではない可能性がありますが、粘土分析では違いはなく、同じ窯跡群内で窯を越えて生産されたものと見るのが妥当でしょう。

このように、それぞれ異なる技法で作られていますので、作り手、異なる埴輪職人、職人集団が作り、窯も違えていた、寄せ集めの埴輪群であることがわかるのですが、ところが、形や大きさは同じなのです。あの特徴的な、3つの突帯を巡らす4段構成の円筒埴輪であり、江沼地域の古墳群の伝統として守られてきた4段構成の円筒埴輪の形を踏襲しているのです。発注元がそのような形と大きさに注文を出したが、作り方は各職人集団に任せたといった感じでしょうか。矢田野エジリ古墳の埴輪は、円筒埴輪以外に、人物と馬を伴います。いずれもチョコレート色の硬質の埴輪で、倒立技法の円筒

埴輪と全く同じ焼き具合です。同一の窯で焼かれたものと言え、つまりは、倒立技法の円筒埴輪を作る集団がこれら人物や馬の埴輪を作ったことになるわけです。

人物埴輪についても、実は尾張の影響があるとされています。具体的に示しますと、人物埴輪の下の円筒部分、これは基台部と言いますが、それと衣の裾の部分とのつなぎ方に共通点があるとのことで、その点からしても東海尾張の繋がりがある。つまりは、人物も馬も、円筒埴輪もチョコレート色をなす埴輪は東海尾張を基点とするような他から招き入れられた特別な埴輪職人であったということになります。わざわざ、円筒埴輪を作るために招かれたわけではなく、おそらくは人物や馬の埴輪を作るために呼ばれたのであって、円筒埴輪の製作はおまけ程度であったのかもしれません。ただ、そこから東海尾張との繋がりが明瞭となったわけでありまして、実に有意義な資料であると言えます。



写真4 矢田野エジリ古墳出土の人物埴輪群

このような倒立技法による須恵器質の円筒埴輪は、実は繼体天皇の出身地、越前の三国に程近い、金津の横山古墳群でも確認されており、近隣の丘陵部にはその埴輪を焼成したと思われる鎌谷窯跡という須恵器窯跡も確認されています。この尾張系の須恵器の埴輪作りという項目をもとに、地域をつなげて行くと、

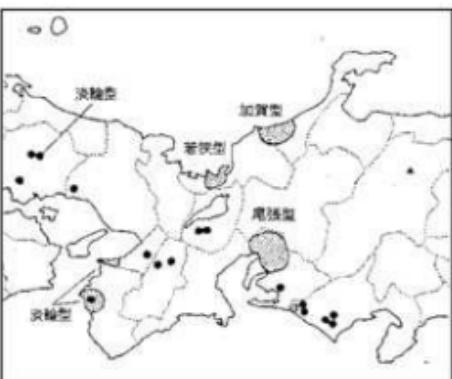


図19 須恵器埴輪の各類型分布図

尾張、近江、越の三国そして江沼という地域が浮かび上がるわけでありまして、図19の須恵器埴輪生産の地域分布図に示すように、先ほど男大迹王を大王へ擁立するための後ろ盾となる勢力としてあげた地域に全く合致する。畿内の東への付け根である近江を扇の要として、南東の尾張と北東の越前とが三角形を形成する。そのように感じられるわけであります。

c. 終焉期（6世紀中葉後半）の埴輪

このような埴輪も、前方後円墳の衰退とともに終わりを告げていくのですが、その最終段階、今述べた矢田野エジリ古墳より少し後の時代の埴輪についてお話しします。

まず、須恵器に焼けた倒立技法の円筒埴輪は、この時期も確認されます。矢田野エジリ古墳のチョコレート色ではなく、灰色の須恵器と同じ色をする埴輪である点から、須恵器窯で須恵器と一緒に焼かれた可能性があります。出土例も、矢田借屋9号墳の事例から見て、古墳の周溝を一周する様子ではなく、一部に並べ置かれる程度のものであった可能性があります。この時代の主流は、もともとの埴輪色というか、オレンジ色に近い酸化焰焼成された円筒埴輪で、正立技法で、底部が内側に曲がる「L字形内屈底部」の特徴を持つものです。いずれも4段構成で二子塚古墳以来の江沼地域の伝統的な埴輪形態を継承しています。ただ、図の左と中央の埴輪のよう

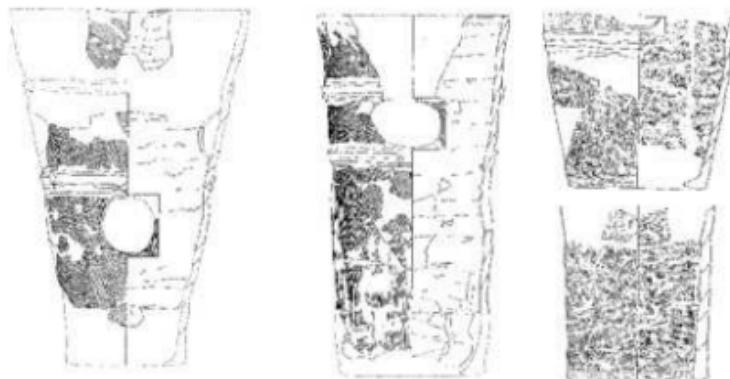


図20 矢田借屋12号墳出土の終焉期の円筒埴輪

に、一番下のスカシの上に突帯が巡らされておらず、突帯を省略するなど手を抜いたというか、退化したような形態のものが過半数を占めるようになり、全体的に小型化していきます。突帯は幅広で低くなり、底部のケズリは施されるのですが、全体的に手抜きの見られる円筒埴輪です。この埴輪は矢田借屋12号墳で出土するのですが、この古墳では先ほどのものと異なり、まばらでも円筒埴輪が墳丘を一周するだけの数が出土しています。おそらく三湖台古墳群の最終時期に位置付けられる前方後円墳でありまして、その点が先ほどの倒立技法の埴輪とは異なる点かなと思っております。

d. 墓輪の生産体制について

このように見てきますと、南加賀窯跡群の埴輪作りは、最初に御幸塚古墳で組織編成がなされて以降、矢田借屋12号墳の前方後円墳の最終段階まで、伝統的な技術を受け継いでいたことになります。須恵器生産の叩き技法やロクロを使用した技法、灰色に焼き上げる技法などとは交じり合わない独自の職人集団であり、彼ら職人は、埴輪の生産を行う際は、緊急で集められ、4段構成で正立技法、L字形内屈底部の形態をもつ、江沼地域の伝統的な埴輪作りを基本的には行ったものと考えられます。酸化焰といってオレンジ色に発色する焼き方にもこだわり、代々受け継がれてきた伝統的な円筒埴輪を樹立させたのでしょう。矢田野エジリ古墳の円筒埴輪は、倒立技法による尾張

系の埴輪作りが主体ですが、もともとの伝統的な埴輪も少数派として存続していますし、一定の技術的な約束事に基づいて生産活動を継続したように思われます。須恵器の製作集団とは融合しない存在であり、埴輪作り職人の強い職人気質のようなを感じさせます。

(4) 矢田野エジリ古墳の埴輪が意味するもの

このように見えてくると、矢田野エジリ古墳の埴輪を作った時だけ、異なる埴輪作りが導入されたことになります。外部、尾張か近江か分かりませんけれども、そういう外系埴輪職人を招いて、生産に従事させたといったところでしょうか。ただ、円筒埴輪の形は伝統的な形とサイズにこだわり、小型の4段構成のタイプにあわせており、その点は地元のこだわりがあったのでしょう。彼ら埴輪作り職人は、わざわざ円筒埴輪を作るために呼ばれたのではなく、人物や馬の埴輪を作るために招かれた特別な埴輪職人であり、そのついでに円筒埴輪を作っただけであると思われるのです。

人物や馬の埴輪を樹立させる古墳は、今のところ矢田野エジリ古墳だけで、それ以降、このような古墳が続かないことを考えると、外部から招かれた埴輪職人は、エジリ古墳の埴輪作りが終わるのと同時に帰った可能性が高く、その後、人物や馬の埴輪が作られたとしても、レベル的に落ちた地元の埴輪職人が真似て作ったものだったろうと思います。その証拠に、それ以降も倒立技法の円筒埴輪が少量ながら作られるのですが、焼き方や作り方が以前とは異なっており、須恵器職人が見よう見まねで作った感じを受けます。

矢田野エジリ古墳の埴輪作りの系統から見る、尾張、近江、越前との関連性は、繼体天皇との繋がりを想像させるのですが、実は、繼体天皇の陵墓とされる大阪府高槻市の今城塚古墳の出土須恵器と、矢田野エジリ古墳出土の須恵器とは、ほぼ同じ時期の須恵器の形をしています。大阪の陶邑窯跡群の標準となる年代基準型式では、MT15型式からTK10型式の間頃、6世紀2/4期頃とされる時期で、矢田野エジリ古墳の須恵器は南加賀窯産で年代的には若干下り、TK10型式頃、つまり6世紀中頃に比定されますが、繼体天皇の没年の531年との関係から見れば、その直後頃に矢田野エジリ古墳

の被葬者は死没し、古墳が作られ葬られたことになります。年代的な近さと江沼地域首長が繼体天皇の母方の親戚にあたり、かつ繼体天皇自体が勢力を強大化した、地域的背景に江沼地域勢力が関連していたとすれば、矢田野エジリ古墳の被葬者は男大達王の大王擁立に一役買った人間である可能性は否定できないでしょう。繼体天皇に縁の深い江沼地域首長であったことが、特別な埴輪祭祀、尾張または近江からの特別な埴輪職人の招致を生んだのではないかでしょうか。そのように考えると、矢田野エジリ古墳の被葬者の位置付けは大変おもしろく、余奴臣かどうかはわかりませんが、それに匹敵するかもしれない、または国造になる契機を作った首長ではないかと感じます。

8. さいごに

三湖台古墳群の位置付けについてまとめ、終わりとします。

まず、三湖台古墳群の造営勢力は誰なのかという点ですが、三湖台の台地内にはやはり勢力基盤となる集落が見えないこと、その近隣渾縁にも集落は確認されず、地理的に当台地が江沼盆地の北東の外縁に当たることから考えると、やはり、江沼盆地の集落群が造営勢力の基盤集落であったと考えざるを得ない。

さらに、江沼地域古墳群と三湖台古墳群との共通的な要素として、埴輪祭祀を伴い、円筒埴輪の形態や作り方も二子塚から御幸塚、矢田借屋と伝統的に継承されていること、二子塚孤山古墳とは朝鮮半島的な交流をおわせる点で、三湖台古墳群との繋がりが感じられ、4段構成の円筒埴輪の導入という観点からも、二子塚との共通性、二子塚のグループが三湖台をつくった可能性が高いなと感じます。

この二子塚古墳群のグループは、もともと江沼盆地に伝統的に集落を構える勢力であったのか、あとで伊藤さんが報告をなされるとは思いますが、他からの新規勢力という考え方もある一方では成り立ちます。ただ、江沼盆地を基盤とした余奴臣の勢力というのが本当にいたとすれば、そういう勢力が造営した古墳群であろうと思いますし、余奴臣の姓はその後、正倉院文書に残る江沼郡山背郷天平12年計帳に「江沼臣族」という名で、当地の一般的な

報告篇

農民として登場してきますので、伝統的にこの地で生活を営む人々が「江沼」の名を名乗るのが一般的と感じます。もともと伝統的に江沼盆地で集落を営んできた人々の勢力から、余奴臣が生まれてきたものと見ておきたいのです。

ただ、余奴臣が江沼地域、江沼盆地のもともとの勢力だとしても、新たに先進的な技術を保有する人間たち、例えば須恵器や埴輪の職人、または水上交通に関わるような技術者など、地域首長にとって重要な役割を担った人々は新規に参入してきた可能性は高く、そのような人々に支えられて、地域勢力を拡大し、安定した経済活動を繰り広げた可能性はあろうかと思います。また、矢田野エジリ古墳において尾張系や淡輪系の埴輪、人物や馬の埴輪を作る技術者が単発的に関わってくること、または横穴式木室という新規墓室の導入からは、朝鮮半島からの人の関わりも考えられ、それが地域勢力の拡大に繋がっているものと考えられます。単なる縦体天皇の親戚である利点が勢力増加に繋がっているのではないと考えるわけです。

では、なぜ江沼盆地周辺で伝統的に作って来た古墳を三湖台に移動させたのかというところが大変謎でもあります。4世紀、5世紀に古墳の造営が母体集落の後背地の里山にあるというのは、最初にお話した通りですが、この古墳立地は基本的に地域の民に対する権力誇示であり、里から見える山というのが原点です。それを里からは見えない、伝統的な集落域から離れた地に古墳群のみを造営していく背景には、従来の考え方とは全く別の意図、三湖台という土地にこだわりを見せた時代であったことが要因ではないか。6世紀という時代は、ヤマト王権が中央集権国家形成へ向けた、地方支配政策に手をつけ始めた時代で、部民制、国造制、屯倉制など後の地方政治機構の原型を作ろうとした時代であります。そのような中、ヤマト王権は能美と江沼の一体的な支配を画策したのではないかと私は考えています。

昨年度のフォーラムにおいて、八日市地方遺跡の歴史的位置付けについて討論した際、八日市地方遺跡が弥生中期に栄えた理由として、安宅湊と加賀三湖の港湾機能が重要な役割を担っていると考えました。弥生中期の西から東への先進的な弥生文化の急速な伝播、波及には、多くの人の移動があり、

報告1 古墳時代後期の江沼を考える

そこには交通の要衝地が重視されました。八日市地方遺跡はまさに西から東への弥生文化の中継基地という位置づけがなされており、巨大なバザーのような機能を有する弥生都市であったと考えています。私は古墳時代後期という時代も、政治的に大きく変動した時代、それはヤマト王権による中央集権化の道の中で地方支配政策の基礎作りを行った時代という意味で、弥生時代中期と歴史的に符合する点があったためではないかと考えています。

梯川の河口である安宅湊を港湾施設として機能させるためには、加賀三湖の船の停泊機能を一体的に活用する必要があり、安宅湊から加賀三湖までを統一的に支配管理することに迫られる時代ではなかったかと感じるわけです。

余奴臣はヨヌノクニの統一首長として、安宅湊と加賀三湖の支配管理権をヤマト王権から承認された可能性があり、その位置付けを能美の地域首長に明示するために、江沼盆地から北へ遷移し、能美と江沼の中間点である三湖台に古墳群を造営する必要があったのではないかでしょうか。三湖台古墳群最初の前方後円墳である御幸塚古墳は、この三湖台の最も北側の高所に立地する首長墳であり、まさしく加賀三湖を見渡し、安宅湊も望める地であったわけで、能美地域首長を牽制し、加賀三湖を支配する統一首長としての意識を江沼、能美の地域民に示し、隣国の地域首長にも明示したのではないか。そのような政治的な意図で、この地に古墳群を造営したのではないかと考えました。御幸塚古墳の立地は、その意図を如実に示すものであったと理解します。

【報告2】

「古墳時代の窯業生産と南加賀窯跡群」

菱田 哲郎

1. はじめに

皆さんこんにちは。菱田と申します。私の方からは、日本列島の全体を見渡しながら、この地域の歴史を考えてみようということで、話を用意してきました。

最初の望月さんのお話にもありましたように、今年は繼体天皇即位1500年ということで、あちこちで繼体天皇記念のシンポジウムやフォーラムがおこなわれております。私の住んでおります関西の方でも、宮や墓があります関係で、いろいろなイベントがおこなわれています。こちらは繼体天皇からすれば母方の先祖の地ですが、私自身は、物事の動きを見ていくには真ん中ではわからなくて、その周辺に行くとよくわかるというように考えておりますので、繼体天皇の時代についても、都よりも小松の地の方がよくわかるのではないかと期待しております。

この繼体天皇とその子供たち、とくに欽明天皇の時代は、いろいろな研究者が国家ができる上で一つの起点になった時代として評価されています。日本という国がどのように国づくりを進めてきたのかということを考えるときに、繼体天皇から欽明天皇の時代のことをしっかりと調べることがたいへん重要な意味を持っていると言えます。ここで扱います窯業生産については望月さんの「日本海地域の古代土器生産」が最も新しい研究で、これにもと



づいて、この地域を眺めていくことが近道になっています。それから、私自身のもので恐縮ですが、京都大学学術出版会から出した『古代日本 国家形成の考古学』で国家形成を扱ったおりに、南加賀の事例についても触れさせていただきました。この辺を参考文献として紹介させていただきます。

さて、本題に戻りますと、考古学という学問は、文献から歴史を明らかにしていく立場とは別に、豊富な出土資料を扱って、ものから歴史へ研究を進めていくことが大きな特徴となっております。それで、なぜ窯業生産なのかということになりますと、歴史の中での焼物というのはたいした意味がないかもしれません、考古学にとっては、普遍的にどこにでもある資料で、そして地域の動向を明確に映し出してくれる資料であり、たいへん重要な研究材料となっています。そして、100年前のお茶碗を使っている人はほとんどいないように、時代とともに更新され、少しづつ変化を遂げています。繩

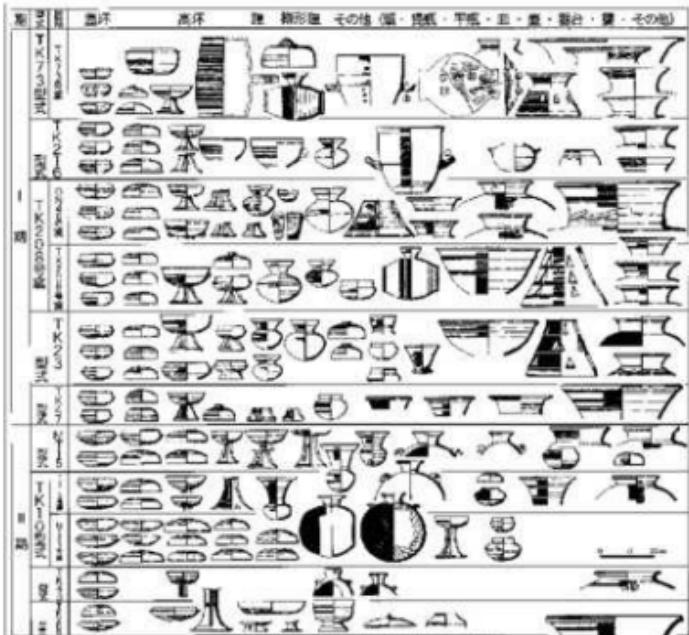


図1 陶邑窯跡群の須恵器編年

文土器や弥生土器などすべての土器に共通することですが、このような時代を測る物差しになる点が、焼物の大きな特徴であり、その生産を扱ううえでも有利な点となっています。

2. 須恵器生産のはじまり

今日取りあげています縦体天皇の時代ですが、この時期も土器、とくに須恵器を年代の物差しとして使うことが可能です。須恵器の編年は大阪府陶邑^{すえから}窯跡群の資料を中心に組まれていますが、眞の縦体天皇陵である今城塚古墳^{いましろづかこふん}の埴輪を生産した新池窯跡では、その埴輪とともに陶邑のMT15窯からTK10窯の製品に近い須恵器が出土しており、縦体天皇の没年の頃に流行った須恵器がこのようなものであるということが明らかになります。したがって、同じ型式の須恵器が出土すれば、だいたい6世紀前半なのだなというように判断できるわけです。各地の資料を扱って、6世紀前半とか後半とか言っている場合、このような土器を物差しとする年代の基準が用いられていることをまず最初にお断りしておきます。

さて、ここからは須恵器がどのように日本列島で作られるようになったかということを少し概説的にお話ししておきます。初期すなわち5世紀前半

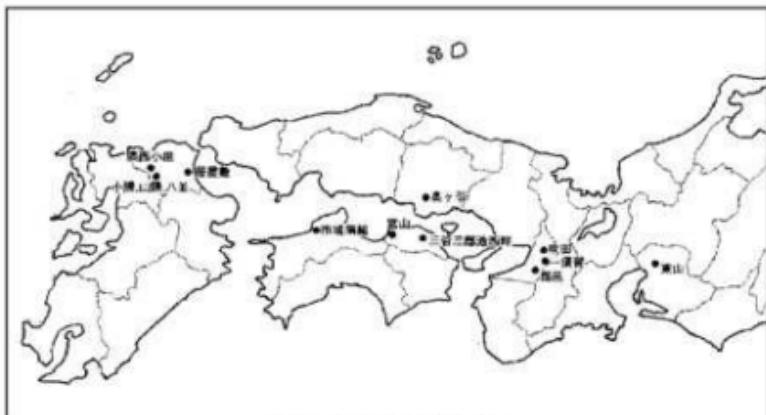


図2 初期須恵器窯の分布

の窯跡は、図2のよう
に北部九州から瀬戸内、
近畿へと分布している
ことが明らかになって
います。私は、窯跡は
ゴキブリと同じで、1
基あるとそのあたりに
10基くらいはあるので
はないかとよく言いま
すが、窯跡、とくに小
規模なものはすでに壊
されたものや未発見の



図3 吉備中枢部の生産遺跡と古墳

ものが多数あるのだと思います。ただ、見つかっている窯で見ていきますと、初期の窯跡は海上交通の便のよいところに立地しており、朝鮮半島からの技術者が渡って来やすい場所にあると言えるかと思います。その中の吉備地域について詳しく見てみると、造山古墳、作山古墳という全長200mを超す大規模な前方後円墳が築かれる時代に、その平野の一角で奥ヶ谷窯跡の生産が開始することになります。また鍛冶をおこなった窪木薬師遺跡もあり、当時の最新技術が地域の有力者の対外交渉に伴って扶植された状況を見て取ることができます。

初期の須恵器
窯跡の中で、頭
抜けた存在であ
るのが陶邑窯跡
群です。5世紀
前半の窯跡が三
つの丘陵にまた
がってあり、燃

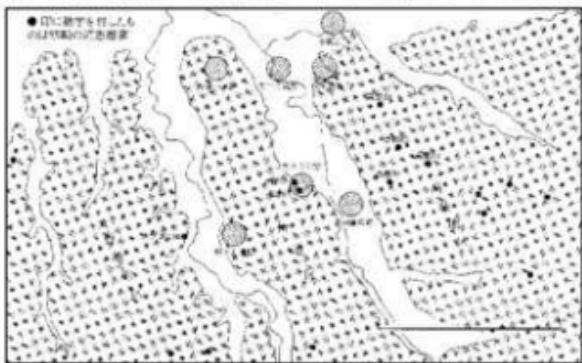


図4 陶邑窯跡群の分布と関連遺跡

料としての森林資源を必要とすることを考えると、その薪の山を後背地に持つように計画的に配置されたと見ることができます。最古の窯の一つ、大庭寺遺跡のTG232窯では、端から端まで 14 m ほどの灰原があり、多量の失敗品が捨てられていることから、かなり大規模な生産をおこなっていたと想像することができます。各地に同時多発的にできてきた生産地の中でも、陶邑窯の場合は、その配置の計画性や規模の大きさから、王権を支える産業の基盤として成立したのではないかと考えることができます。こうして成立した陶邑窯は、その後の日本列島の窯業生産の中では、ある意味中心的な存在になってまいります。5世紀後半からは、この陶邑窯の製品を手本とした製品を作る窯場が各地に成立しています。

このことをよく示しているのが、高杯の脚部の形状です。5世紀後半では陶邑窯の形態が各地に広がっておりますが、例外と言えるのが尾張の東山11号窯のもので、ずいぶんすぼまった脚部を持っております。この尾張では5世紀前半に須恵器生産が開始したと考えられますので、後半には陶邑と異なった展開を遂げていると言えます。そして、その周辺の地域を見てまいりますと、伊勢や三河、遠江などでは、5世紀後半に陶邑的な高杯が見られ、尾張的なものは波及しておりません、つまり、地理的に近いはずの尾張の窯場があまり須恵器の普及に際しては活躍していないことがわかります。陶邑の最新の技術が、生産技術の伝播の中心になっていると言えます。模式的にまとめますと、5世紀前半では朝鮮半島に行けるところには、それぞれ思い思いに技術が入り須恵器生産ができていきましたが、5世紀後半になると、新たに技術を導入する際には陶邑を起点とす

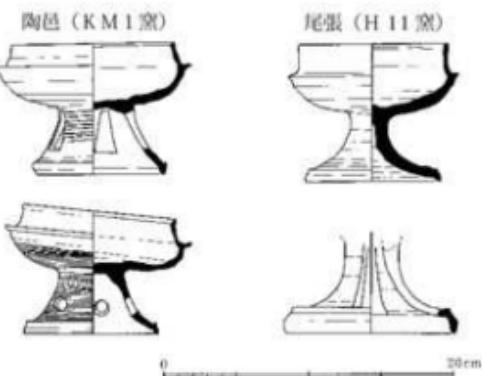


図5 須恵器高杯の比較

る技術を入手しようということになっています。5世紀後葉から6世紀初めには須恵器の生産が一気に拡散しますが、その背景には、王権との関係が中心になり、つまり王権がこの時期になってようやく求心力を持ち始めたと言え換えることができそうです。

3. 須恵器生産の展開

では、この時期に成立した生産地がどうなったかと言いますと、必ずしもそれぞれが順調な展開を遂げているわけではありません。むしろ、断絶する、あるいは断続的な操業が見られる場合が多いのです。私が以前に調査しました兵庫県鬼神谷窯跡は、日本海側の但馬に位置する5世紀後葉に成立の須恵器窯ですが、1号窯の生産が一世代ぐらいで途絶えてしまい、次の2号窯はおよそ100年後の生産で、6世紀の間は生産が途絶えています。同様の展開をたどる生産地は各地にあり、のちに生産が継続している窯跡群でも、6世紀の生産が希薄な場合が多いことが指摘できます。その意味では、5世紀前半に成立する窯場とあまり変わらないと言えます。つまり、新たに導入した生産技術を定着させていくことが、早い段階においてはなかなか難しかったと言えると思います。

南加賀では、先ほど望月さんのお話にありましたように、二ツ梨地区において6世紀を通して一貫して生産が続いていたことがわかります。最初の東山4号窯が6世紀初で、1号窯、5号窯という三つの窯で、ほぼ6世紀の100年間をカバーしていると考えられます。一つの場所で長期にわたって生産を継続するという特徴が見られます。6世紀は、各地において陶

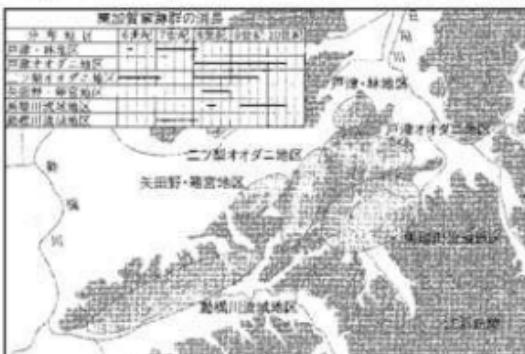


図6 南加賀窯跡群の分布と消長

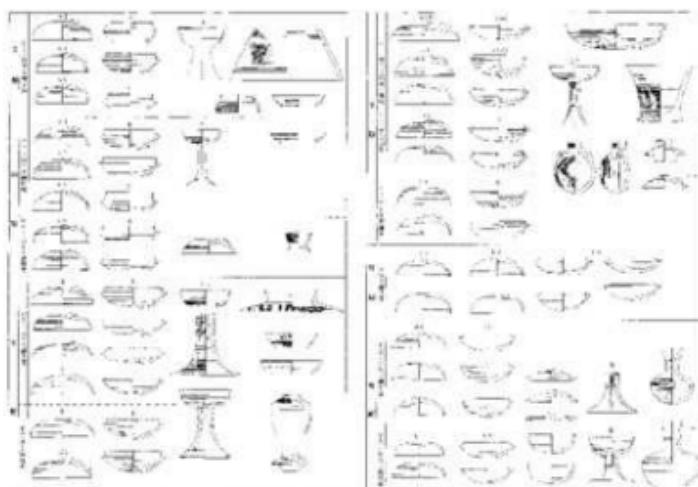


図7 ニツ梨東山4号窯、1号窯、5号窯の須恵器

邑産の須恵器が見られなくなる時期で、在地における生産の進展がうかがえます。先に触れた断続的な操業の生産地と、南加賀の場合のような継続的な生産地との関係など、さらに検討が必要ですが、南加賀の製品が加賀地域の広い範囲の需要をまかなっていたと考えられているように、須恵器の普及にとって継続的な生産地の役割が高かったと推測することができます。各地における6世紀の須恵器生産については、不明な点が多いのですが、南加賀で見られたような少数の窯が長い期間にわたって生産をおこない、需要をまかなくうというのが、一般化できるのではないかと思っております。

かん の おひばりとう
兵庫県加古川市神野大林窯という窯は、比較的最近に発見された窯跡です。発掘調査の結果、小さな谷に面して3基の窯跡が見つかり、1号窯と3号窯が6世紀前半、2号窯では6世紀後半から7世紀初めにかけて生産がおこなわれていました。大きな灰原が形成され、窯も改造を受けておりますので、それぞれの窯が長期間にわたって使われ、数基の窯で6世紀を通した生産をカバーしていったということがわかつてきました。これは南加賀の事例とたいへんよく似ていると考えます。このように、各地の窯場について見て

みますと、陶邑や尾張を除くと、5世紀はかなり不安定な存続状況でしたが、6世紀になると安定した生産地が生まれていると評価することができそうです。このような安定した生産を可能にしたのが何であるのか、その背景を考えてくことが重要なポイントになると思います。

ここで、7世紀にはどうなっているのかという点について、少しお話しておきます。南加賀窯跡群では7世紀になると須恵器生産の場所が変わってきます。具体的には、戸津・林という北の地区と動橋川の南地区という二つの場所で、それぞれ継続的な生産がおこなわれるようになります。とくに8世紀、9世紀には窯場を少しずつ移して、継続的に生産をおこなっている状況が見られます。このような事例は、全国各地で見られ、7世紀から8、9世紀にかけて安定した須恵器生産がみられる生産地がかなり多く存在しています。一例として、丹波の例ですが、兵庫県氷上郡鴨庄窯跡群を取りあげますと、7世紀前半に谷の入口部に窯場が設けられ、以後7世紀後半に次の岩戸谷へ、8世紀前半には岩戸谷の奥、8世紀後半には一つ奥の谷である上牧谷へ、そして9世紀になると一番奥の北奥へと窯場を移動しております。このような、窯場を奥へ奥へと移動しながら生産を続けていくのが須恵器生産のモデルケースになると思っております。このような展開パターンが7世紀に始まっており、6世紀にみられる一ヵ所での継続的な生産活動とは大きく異なっているように思います。

7世紀の窯跡群の分布を見てみると、律令期の郡に対して、それぞれ1カ



図8 鴨庄窯跡群の分布

所程度の生産地が成立していることがわかります。もちろん、分布には濃淡があるのですが、北陸地方や近畿地方の周辺部、瀬戸内地方などでは、各郡ごとに一つの生産地が維持される傾向が見られます。そして、そのパターンができるのはいずれも7世紀に入る頃ということになります。郡との関係で象徴的なのは、郡やその前身の評の文字を記した須恵器が窯場から出土するようになることで、これも7世紀の特徴に挙げられます。ここ南加賀では、^{なべこんばくら やまとひ もののこおり}南地区の那谷金比羅山窯で「与野評」と刻まれた須恵器が出土しています(望月報告5頁参照)。

以上見てきましたように、6世紀の須恵器生産の特徴として、5世紀のような不安定な生産とは異なり、ある程度継続的な生産がみられますが、7世紀の郡ごとに展開する生産とも異なり、一ヵ所で長期にわたって小規模な生産を続けているということが浮かび上がってきました。

4. 須恵器生産と埴輪生産

次に須恵器生産と埴輪生産の関係について、窯場からみるとどうなるかという点について見てみたいと思います。表1の項目に示しましたが、各地で発見されている古墳時代の須恵器窯の中で、埴輪を生産している窯について○印を付けて示しております。それを地図上に落としてみると、東日本に埴輪も焼く窯が多くて、西日本は須恵器だけの窯が多いことに気がつきます。このような東西差に加えて、須恵器窯で生産された埴輪の形状や技法を



図9 拡散期の須恵器窯の分布

報告2 古墳時代の窯業生産と南加賀窯跡群

表1 拡散期の須恵器窯一覧表

窯名	所在地	窯体	高杯透し孔	埴輪	備考
星川窯	静岡県掛川市			○	
街門板窯	静岡県袋井市		長方・円	○	
安久路窯	静岡県磐田市			○	
有玉窯	静岡県浜松市			○	
明通り窯	静岡県湖西市			○	湖西窯跡群
一ノ宮峰塙第1地点窯	静岡県湖西市			○	湖西窯跡群
水神3号窯	愛知県豊橋市	擴張型	長方・円	○	
前山窯	愛知県常滑市			○	
東山11号窯	愛知県名古屋市千種区		長方(4方)・無		猿投窯跡群
小杉大谷窯	三重県四日市市	擴張型	長方	○	
徳尾1号窯	三重県鈴鹿市			○	
鷹生1・2号窯	三重県鈴鹿市	直線	長方	○	
内多窯	三重県津町			○	
藤谷窯	三重県津市			○	
久居2・4窯	三重県津市		長方・円	○	
松ノ山窯	長野県長野市				
圓カンテ窯	富山県永見市				
深沢1号窯	石川県能登島郡中能登町		長方		鳥居窯跡群
桜田ウワノ1号窯	石川県羽咋市				羽咋窯跡群
二ツ型東山4号窯	石川県小松市	擴張型	長方・円		南加賀窯跡群
鎌谷窯	福井県あわら市			○	金津窯跡群
興造寺窯	福井県三方郡美浜町		円	○	
魚窯	滋賀県甲賀市				
大向1・2号窯	京都府南丹市		長方・方		圓部窯跡群
桜井谷2-18号窯	大阪府豐中市	やや擴張型	長方・円		千里窯跡群
桜井谷2-16号窯	大阪府豐中市				千里窯跡群
吹田55号窯	大阪府吹田市		長方		千里窯跡群
中佐備窯	大阪府富田林市		長方・円・無		
砂羅谷5号窯	和歌山県和歌山市			○	
鬼神谷1号窯	兵庫県豊岡市	擴張型	長方		
鍋谷窯	兵庫県福山市		長方・円		
郡塙1号窯	兵庫県三田市		円		三田東窯跡群
赤根川金ヶ崎窯	兵庫県明石市	擴張型	長方・方		魚住窯跡群
福波野丸山3号窯	兵庫県相生市		長方		相生窯跡群
七谷窯	鳥取県鳥取市				
埴見窯	鳥取県東伯郡湯梨浜町				
門生山根1号窯	鳥取県安来市	擴張型	長方		門生窯跡群
門生高畠窯	鳥取県安来市		長方		門生窯跡群
鍋谷窯	鳥取県松江市				大井窯跡群
深谷窯	鳥取県出雲市				
日置1号窯	鳥取県浜田市	擴張型	長方		
稻元日後原1号窯	福岡県宗像市				
重衝窯	福岡県福岡市早良区	擴張型	長方(4方)		
新聞窯	福岡県福岡市西区		長方		
神籠池窯	佐賀県佐賀市		長方		

検討することから、須恵器生産と埴輪生産の関係についてさらに踏み込むことが可能になります。

矢田野エジリの埴輪では、倒立させて製作する技法のものがあり、尾張の技術によると考えられています。この尾張の埴輪は、須恵器と同様の焼かれ方をするだけではなく、製作に用いられる道具も共通していて、まさに須恵器生産者が作った埴輪であるとみられています。これは、ある意味、合理的で、須恵器作りと埴輪作りの二つの技術者を抱え込むよりは、須恵器生産者が埴輪の生産もできれば、それに越したことはないということになります。また、矢田野エジリでは、伊勢や遠江の技術とよく共通する埴輪で、起源地である大阪の淡輪の名を取って「淡輪技法」と呼ばれる技法で作られたものが出土しています。底部に輪っかを当てることが特徴で、そのくぼみが矢田野エジリの例でも見ることができます。こちらの方は、一応埴輪らしい赤っぽい発色をしており、尾張ほどは須恵器の影響は見られませんが、須恵器の窯で出土することの多い埴輪になっていて、東日本の須恵器窯で埴輪がよく出土する場合に、この埴輪が主体になっています。したがって、矢田野エジリでみられる埴輪は二種類とも須恵器との関係が濃いものと言えそうです。

須恵器と埴輪は、畿内中心部、とくに大王陵が造られている古市古墳群や百舌鳥古墳群などでは、一部の例外を除くと別々に作られるのが原則です。先ほど触れました今城塚古墳の埴輪を生産した新池の埴輪工房も、埴輪だけを生産する窯として成立しています。いわば、畿内地域では、須恵器は須恵器職人、埴輪は埴輪職人という分業がはっきりしているわけですが、それが、その外側の地域では、共同したり、さらに完全に一方が他方に取り込まれるという現象が起こっているということになります。古墳時代の手工業生産の



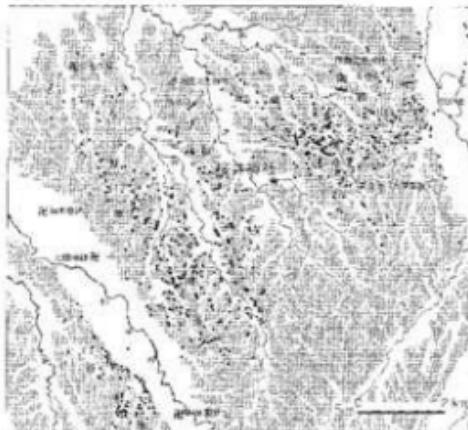
写真1 矢田野エジリ古墳出土の円筒埴輪

実態を考える上で、たいへんおもしろい現象だと言えます。

南加賀がどうかと言いますと、先ほど説明しましたように、二ツ梨地区の
殿様池窯で埴輪が須恵器とともに生産されています。6世紀に継続して須恵器を生産した東山の方では埴輪を生産していません。つまり、埴輪を焼いてよい窯とそうでない窯の二者が存在しているのです。須恵器生産とは別に埴輪を焼く窯を設けていることが特徴で、両者の生産が一体となった地域とは、やや様相が異なっていると言えましょう。このような埴輪生産を加えて、6世紀における南加賀窯跡群の特徴を改めてみてみますと、安定した須恵器生産をおこなっていることがやはり重要であり、そこには埴輪が入らないことが、陶邑窯で埴輪生産をおこなわないことと同様に、意味があることであると思います。

5. 屯倉と部民制

このような生産の背景について、また三湖台の古墳群との関係について、さらに見ていきたいと思います。東山で6世紀に安定した須恵器生産をおこなっていた時期は、三湖台に古墳が造られた時期とぴったり一致しております。しかも、その位置関係は、お互いに見えるような位置にあり、密接な関係を想定することができます。このことを前提に、この地域に須恵器の生産地が設けられた背景について考えてみましょう。



	大和郡	光明郡	磐	高麗	美濃山
3世紀	2	11	22	55	31
6世紀	2	25	38	38	38
7世紀	2	23	36	27	12
8世紀	2	44	22	29	15
9世紀	0	1	0	3	11

図10 陶色窯跡群の分布と地区別基数

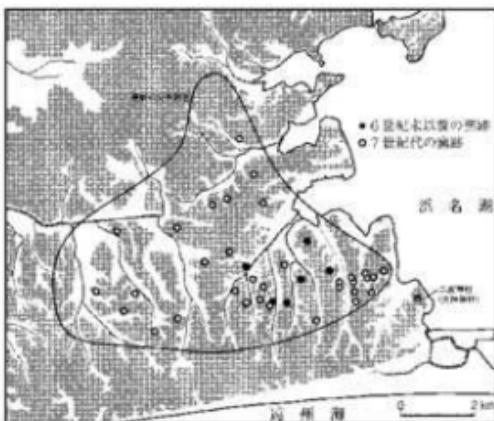
6世紀の制度として重要なのは、屯倉と部民制で、また各地の豪族に対する国造制も重要な役割を果たしていました。須恵器の生産をはじめとする手工業生産も、このような制度の枠の中で展開していったと考えております。その代表例として、須恵器生産の中心地である陶邑の場合を取りあげておきます。陶邑は大きく分けると5ないし6つの地区に分けられますが、それについて窯の基数をカウントしてみると、最も多いのが高藏（寺）地区で、とくに5世紀の窯数が多いのですが、6世紀になると各地区的窯数が拮抗してまいります。その中で梅地区が勢いを増してきて、7世紀には陶邑の中心になっていると考えられます。もちろん、最古の窯の一つである大庭寺遺跡TG232窯も、この梅地区に含まれるのですが、実際のところ、6世紀後半から7世紀にかけてピークがあり、8世紀から9世紀にかけて振るわなくなることが明らかになっています。

この梅地区の中ほどに桜井神社というのがあるのですが、私はこれが安閑天皇の時代に置かれた屯倉の一つである桜井屯倉の場所を示しているのではないかと考えております。桜井の地名は各地にあるので、屯倉の候補地も多いのですが、日本書紀の記述では、桜井屯倉に茅渟山屯倉を加えるという記載があり、この茅渟山屯倉に比較的近いところに桜井屯倉があると想定できます。その茅渟山ですが、和泉地域にあることが動かないですから、その近くでの桜井の地名としてこの梅地区の桜井神社が重要な候補になると考えております。屯倉は農業生産の管理をおこなったことが知られていますが、桜井屯倉の場合、その立地とともに、梅地区の生産の動向と合わせて考えると、屯倉が須恵器生産の管理もおこなっていたと見えることができると思います。

また、梅地区を流れる石津川の流域は上神谷と呼ばれていますが、古代には上神郷であったことを示しています。この地域にいた氏族については『新撰姓氏録』で探すと、神直というのがあります。直という姓は、各地の有力者が持つており、神直は上神郷の有力者であり、かつ神部という部民を率いる立場がありました。三輪山の神である大物主を祀る大田田根古が陶邑で見出されたという神話に代表されるように、神部と陶邑は密接な関係にありました。須恵器の生産は神部の職能になっていると考えることができます

が、ひいては陶邑の須恵器生産が部民制の枠の中にはいったことが示されているのだと思います。

この神部が窯業生産とかかわることが示される事例として静岡県湖西窯跡群をあげることができます。浜名湖の西に窯跡が分布していて、300基くらいの窯跡があると想定されています。その中でも6世紀から7世紀にかけての窯跡は、窯跡群の東南の方にあり、その近くには大神神社が存在しています。この地域についても、古代の人名録とも言うべき史料が残されていて、『天平十二年遠江国浜名郡輪租帳』という帳面で、台風被害に遭った人を書き上げ、それぞれの租税の減免を記した文書です。残念ながら被害に遭わなかった人の名前は出てきませんが、湖西窯が属する新居郷については、7割から8割の戸主の名前が判明します。その75戸について見ていきますと、部がウジナに付く人々が非常に多いことにまず気づきます。そして、人數的には敢石部という人々が最も多いですが、これは海辺の魚や貝を捕る人たちで、須恵器生産とは関係が薄そうです。その次に神部や神人が多く、また有力者として神直も存在しています。大神神社の祀りも彼らが執り行つたと考えられますが、その本来の職掌が須恵器生産であった可能性がきわめて高いと考えます。



郷	戸	郷	戸
神直	3	神直	1
神人	1	神人	1
神人部	3	神人部	2
相田神人	2	相田神人部	1
敢石部	18	敢石部	14
諸部	5	諸部	5
爪工部	2	爪工部	1
二使部	1	二使部	1
宗宜部	4	宗宜部	2
麻績部	3	麻績部	1
津麻績部	1	津麻績部	1
伊振部	1	伊振部	1
計	44	計	31

図11 湖西窯跡群と大神神社

れていて、『天平十二年遠江国浜名郡輪租帳』という帳面で、台風被害に遭った人を書き上げ、それぞれの租税の減免を記した文書です。残念ながら被害に遭わなかった人の名前は出てきませんが、湖西窯が属する新居郷については、7割から8割の戸主の名前が判明します。その75戸について見ていきますと、部がウジナに付く人々が非常に多いことにまず気づきます。そして、人數的には敢石部という人々が最も多いですが、これは海辺の魚や貝を捕る人たちで、須恵器生産とは関係が薄そうです。その次に神部や神人が多く、また有力者として神直も存在しています。大神神社の祀りも彼らが執り行つたと考えられますが、その本来の職掌が須恵器生産であった可能性がきわめて高いと考えます。



写真2 牛頭窯跡群ハセムシ支群のヘラ書須恵器

神部が出てくるもう一つの例は、九州の牛頭窯跡群で、6世紀後半から安定した操業をおこなっており、大宰府の須恵器をまかなった九州屈指の生産地になっていきます。そこでは、「大神君」「大神部」といったウジナが須恵器に直接刻まれた例が7世紀後半から8世紀初めにあり、生産者の名前を記していると考えられています。

残念ながら南加賀の須恵器生産者たちが何というウジナであったかはわかりません。断片的な史料の中には江沼郡にも神部が存在したことが知られる例もあり、神部による須恵器生産の可能性もあるかもしれないと思っております。いずれにしても継続的な須恵器生産を可能にしていくものとしては、屯倉や部民が設けられることが、一つの前提になるのではないかと思っております。

6. 手工業生産と地域支配の仕組み

ところで、屯倉や部民といつても、それらが直接王権によって管理されていたかどうかはわかりません。とくに6世紀の屯倉については、地方の族長である国造などの管理を想定する意見が有力視されています。この点では、手工業生産と首長墳の関係が重要な意味を持ってきます。この点についてわかりやすい事例となるのが吉備地域で、ここでは文献に児島屯倉、白猪屯倉が登場し、6世紀の中頃に屯倉が設置され、中央からもしばしば人が派遣されたことが明らかになっています。この時期には、吉備地域でいろいろな変

化が地域の手工業生産にうかがわれ、須恵器生産の復活、6世紀末の製鉄の開始、そして、5世紀に下火になっていた製塙が6世紀半ばから活発になることも知られています。吉備地域では国造も定められていきましたが、先ほどの図3に示しますように、古墳を見ますと、5世紀後半から6世紀前半の空白を経て、6世紀後半に前方後円墳のコウモリ塚古墳が出現しています。このように、屯倉や国造の設置といった地域に対する支配の仕組みができるいく様子をうかがうことができます。

6世紀の生産を支えていったいろいろな仕組みは、この時期の一定の政策に則った形で成立したと考えています。その中心が屯倉であるといえますが、地名や文献から明らかになる屯倉はそれほど多くはなく、全国で百数十カ所程度です。しかし、知られていない屯倉が数多くあったと見ています。今から数えきれないくらいというのは、大化元年のことですが、蘇我本宗家が滅亡したあとで中大兄皇子が自分の持っている屯倉を献上した際、それが181カ所に及んだことがわかります。また、6世紀の段階には国造の就任に合わせて屯倉を献上する記事もいくつかあり、国造の数よりも多くの屯倉が存在したと想像されます。そして、7世紀半ばに成立する評、つまり郡の前身は、屯倉の機能を引き継いだ面があったと考えられており、屯倉の機能が強化する形で7世紀の地方支配ができあがっていくと言えそうです。少しおおざっぱに言うと、6世紀段階では国造と中央をつなぐ連絡所のような役割、7世紀になると郡の機能に近い地方支配の拠点といったような変化を考えることができます。

そして、屯倉を介して渡来系の技術者が再編成された事例が明らかにされています。手工業の技術者の養成とか、技術の交流という点では、たいへん重要な役割を持っていたのではないか考えられます。吉備においても、屯倉とかかわる地域では渡来系の氏族の名前が多く確認されています。

7. 地域間の技術・情報の交流

7世紀には須恵器生産における地域間の交流が密になっていることがうかがえます。望月さんのご研究によって明らかになったことですが、窯戸の部

報告體

分に溝が付く窯が、北部九州を起点に全国に広がる現象がわかっています。南加賀などの日本海側ではあたりまえのように存在していますが、陶邑では希薄で、この技術の展開については陶邑がほとんど関わっていないことが明らかです。屯倉と屯倉を繋ぐような形で、技術の受け渡しがされたのではないかと想像しています。

墓においても交流を示す事実があります。その一つが横穴式木室で、三湖台古墳群を特徴づける一つの形式です。先ほどお話ししましたように、三湖台古墳群が南加賀窯跡群と密接な関係があるとすると、この墓の形式が須恵

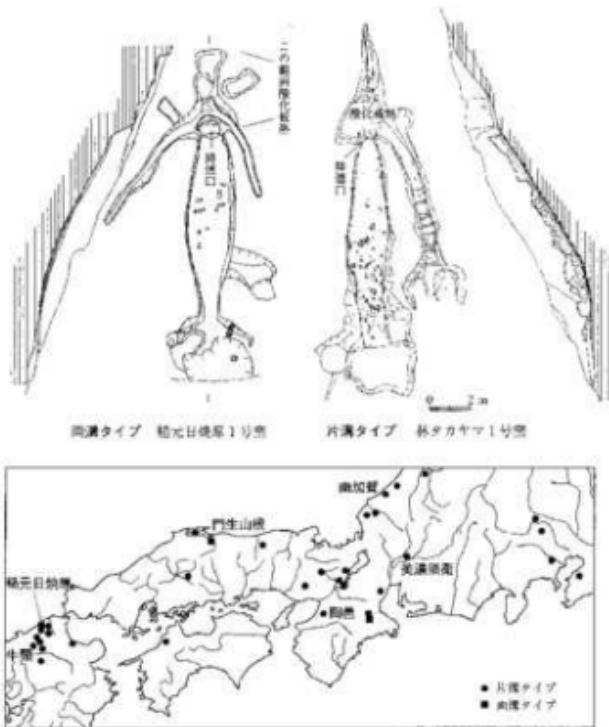


図 12 溝付き窓の構造と分布

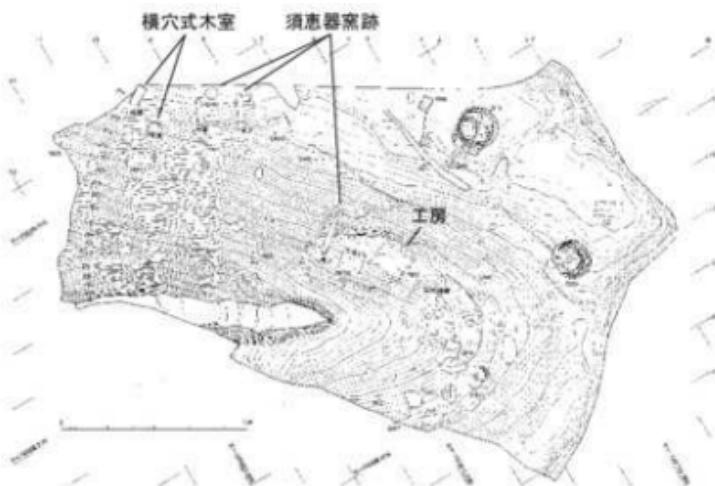


図13 平方古墳群と平方窯跡群

器生産者と関係があることが導けそうです。そのことを示す事例として、兵庫県三田市平方2号墳を挙げることができます。この古墳は、須恵器窯である平方1号～3号窯のある場所のすぐ脇にあり、横穴式木室を持っております。須恵器窯の方は6世紀末頃、横穴式木室の方は7世紀初め頃で、須恵器を焼いていた人たちが、亡くなつてから葬られた墓として、たいへんふさわしい位置関係と年代の関係を示しています。この近くでは工房跡も発見されています。

横穴式木室は、当初はカマド塚と呼ばれ、火を受けた例も知られ、陶邑の近くに多いことから、須恵器生産者の墓と見なされていました。その後、各地の例が知られ、焼かれていらない事例も多く、また須恵器窯が近くにないという立地のものもあり、必ずしも須恵器生産者とのみ被葬者が限られるわけではないことが明らかになっています。しかし、南加賀や三田の事例からは、やはり須恵器の生産とは深い関係があることは否定できないでしょう。今のところ、横穴式木室の最古の事例はこの加賀地域ですので、この地において須恵器生産者の墓制の一つとして成立し、陶邑やその周辺の窯業生産地に取



図 14 陶棺出土窯跡の分布

り入れられていった墓制と考えることができます。

もう一つ須恵器を生産した人の墓制として考えられるのは、焼物の棺桶、とうかん陶棺を用いた埋葬です。陶棺には、土師器の発色のものと須恵器の発色のものとがあり、後者は須恵器の窯跡で出土することから須恵器窯で焼成されたことが確実視できます。最初は土師器生産者の墓として5世紀末頃に土師質の陶棺が用いられましたが、6世紀後半に須恵質のものが現れ、陶邑や千里といった畿内の須恵器生産地で作られていました。この畿内地域と吉備地域とにおもに波及するのですが、それ以外でも点々と陶棺の出土があり、須恵器の大規模生産地やその周辺に偏る傾向があります。牛頭窯や美濃須衛窯などがその事例になります。南加賀でもやはり陶棺が出土しており、那谷金比羅山11号窯で生産されています。また、本日司会の西田さんが報告書を担当された矢田町の刀何理遺跡でも発見されており、量は少ないですけれども、畿内由来の墓制が及んでいることがわかります。

6世紀から7世紀の動きを見てきましたが、窯業生産地の成立、そして定着の過程で、技術や情報の交流が活発におこなわれているらしいということが明らかになってまいりました。溝が付く窯体のように他の地域で現れたものが南加賀に入る場合もありますし、陶棺のように畿内に起源をもつものも含まれています。その一方で、横穴式本室のように加賀から他地域に広がったものも存在しています。ある種の連絡網の中に、この地域がきちんと組み込まれているというようにいうことができると思います。

そういう連絡網を支えたのが、おそらく屯倉の機能だろうと思います。その連絡網としての機能を考えると、交通の要衝に立地することが必要になります。当時の交通ですと、当然水上交通が中心でありますから、瀬戸内海に面した津（港）が重要なポイントになっていたと考えられます。

最後に、繼体天皇の話に戻りますが、繼体朝から欽明朝にかけては、屯倉や部民、そして国造が置かれ、地方を支配する仕組みが整った時代と言えます。そのことから、古代国家が形成されていく上で重要な画期になった時代だと考えられております。その過程で、たとえば北部九州の一大勢力であった筑紫君磐井が打倒されたように、武力でこのような仕組みができた地域も少なからずあったことがわかります。しかし、こちらの江沼の地はそのような痕跡はみとめられていません。むしろ、繼体天皇の姻戚につながるということで、この時期の王権にとってのモデル地域となって、技術や情報のやりとりの拠点がスムーズに形成されたと考えてみてはどうかと思っております。南加賀の安定した窯業生産も、そのような背景をもって実現したのではないかでしょうか。

ご静聴、ありがとうございました。

【報告3】

「能美、江沼の古墳動向と三湖台古墳群」

伊藤 雅文

1. はじめに

財団法人石川県埋蔵文化財センターに勤めております伊藤と申します。よろしくお願ひいたします。

私は、能登の古墳をよく発掘したり、見学したりしていまして、そちらの方はピンとくるのですけれども、いかんせん、加賀の古墳というのは、やはり私の足が短いものでなかなか来る機会がなくて、これを機会に勉強させていただきました。

まだ論文にはなっていないのですが、古墳時代の前期、中期を通して加賀の地域、越前の地域とか、そういった地域の首長について考えたことがあります。これは近々論文になる予定になっているのですけれども、それをベースにして、江沼地域で古墳が出現してきた背景を考えていきたいと思っております。

望月さん、それから菱田先生、お二方のお話によりまして三湖台の地域、南加賀の窯跡群の重要性というものをしっかりと分かったのではないかなど思います。特に菱田先生のお話のなかで、南加賀の窯跡群の動向が日本の政治動向と非常に密接にかかわっているという指摘がありました。そういう観点で当時の古墳の動向が、どのような畿内王権の政治動向を反映しているの



報告3 楠美、江沼の古墳動向と三湖台古墳群

表1 加賀地域の主要古墳一覧

No.	古墳名	規模	墓石	埴輪	内部主体	副葬品	特記事項	所在地
加賀 (前方後円墳)								
太文字は三湖台の古墳								
1 黒瀬御塲山C9号	19						全長推定	加賀市黒瀬町
2 二子塚10号	22	IV						加賀市二子塚町
3 鶴幸塚	25	IV						小松市今江町
4 矢田野4号	25							小松市矢田野町
5 神谷内C12号	28		木棺直葬		鏡、管玉、差、刀子			金沢市神谷内
6 矢田野エジリ	29	V						小松市矢田野
7 河田山20号	29							小松市河田山
8 借屋12号	30	V					全長推定	小松市月津町
9 借屋8号	31	V			耳飾		横穴式木室か	小松市月津町
10 分校カン山西	32							加賀市分校町
11 借屋7号	34	V			劍、刀、鏡		横穴式木室か	小松市月津町
12 二子塚13号	35							加賀市二子塚
13 分校カン山西	35							加賀市分校町
14 分校高山	36				鏡、勾玉、管玉、切小玉			加賀市分校町
15 分校カン山1号	37		木棺直葬		鏡、管玉、ヤリ、斧、型		轍向型	加賀市分校町
16 薫輪冢	40	IV			管玉、鏡、斧		横穴式木室か	小松市島町
17 河田山60号	45		木棺直葬		管玉、鏡			小松市河田山
18 長坂二子塚	50		III		勾玉、管玉、鏡			金沢市长坂
19 白のぼせ	52							小松市鶴見町
20 風山	56	○	IV	箱形石棺	冠、ガラス、管玉、甲冑、銀製舟金具、刀、劍、ヤリ、鉤、鏡			加賀市二子塚町
21 和田山5号	54			粘土塚	鏡、管玉、甲冑、鏡、刀、劍、三輪玉、ヤリ、斧、型			能美郡寺井町和田
22 墓坂D13号	67							加賀市墓坂町
23 吉原殿王塚	70				横穴式石室			金沢市吉原町
24 秋葉川1号	120	○						能美郡寺井町秋葉
(前方後方墳)								
1 戸戸水C1号	8							金沢市戸戸水
2 一塚3号	15						S303	能美郡一塚
3 一塚7号	16						S307	能美郡一塚
4 小菅原4号	17		木棺直葬					加賀市小菅原
5 一塚4号	16						S304	能美郡一塚
6 墓塚1号	19		木棺直葬					河北郡宇ノ氣町宇氣
7 河田山3号	20							小松市河田山
8 鶴姫塚シンドン14号	21						ST14	石川郡野々市町鶴姫塚
9 戸戸水C16号	21							金沢市戸戸水
10 戸戸水C11号	24							金沢市戸戸水
11 和田山1号	25							小松市河田山
12 鶴姫塚シンドン1号	28						ST01	石川郡野々市町鶴姫塚
13 天寺山2号	31							能美郡寺井町天寺
14 天寺山5号	31							能美郡寺井町天寺
15 天寺山6号	37							能美郡寺井町天寺
16 墓坂A3号	61							加賀市墓坂
(大型円墳)								
1 墓坂口1号	25		粘土塚		刀、鏡、竹筒			加賀市黒瀬
2 分校チャカ山10号	25							加賀市分校
3 旗山1号	25							加賀市旗山
4 和田山1号	25		粘土塚		鏡、管玉、刀子			能美郡寺井町和田
5 和田山6号	25			横穴式石室	勾玉	切石積		能美郡寺井町和田
6 八幡6号	26				横穴式石室?	切石積		小松市八幡
7 和田山8号	34							能美郡寺井町和田
8 和田山3号	36							能美郡寺井町和田
9 野田山三角丘	50							金沢市野田
10 富塚丸山	65	○	石棺?					加賀市富塚町

か、今回の報告に反映させていきたいと思っております。

三湖台地域の古墳を表1で見てみます。これは加賀地域の前方後円墳や前方後方墳、それから円墳の大きいものを一覧表にしたものです。太字で示してありますのが三湖台地域の古墳です。例えば御幸塚、矢田野4号、矢田野エジリ、矢田借屋12号墳ということで、かなりたくさんの方後円墳があるということが分かると思います。それから前方後方墳がまったくないこともあります。

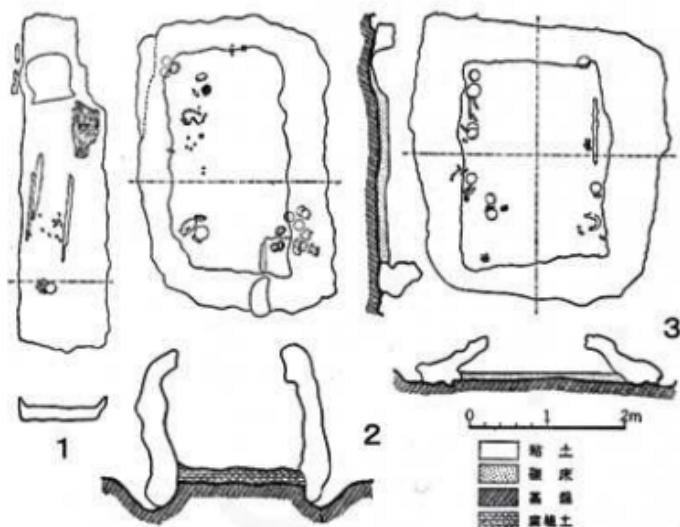
もう一ついえますのが、比較的大きな円墳が非常に少ないことです。こういうことから三湖台地域の古墳の特徴として、やはり前方後円墳が非常に多い地域だということです。それから大型の円墳が少ないかわりに、小さい円墳がたくさんある地域だということもいえるかとおもいます。

2. 三湖台古墳群のこれまでの研究動向

そういう点で三湖台地域の古墳が、古くから研究がされております。そして三湖台の地域に、なぜこんなにたくさんの古墳があるのだという問題意識をもったのが戦後になってからではないかと思います。この三湖台の古墳をめぐりまして簡単に年代順別に、いったいどのような研究がなされていたかを見ていきたいと思います。

まず、第一に上げなければならないのは、上野与一先生のご研究であります。上野先生は第二次世界大戦の敗戦後に、つぶれていく古墳を手弁当で、わずか数日という時間ではありますけれども発掘調査記録を残していました。その記録というのは、いまの調査水準からすれば、なかなか高い水準であったとはいえないのですけれども、しかし非常に多くの情報量を持った記録を残していただいております。昭和25年の念佛林古墳の発掘調査とか、粘土をたくさん使った古墳を特徴的に取り上げておられます。

上野先生は「石川県に於ける古代文化圈への仮説」というご論考のなかで、南加賀地方における箱形粘土棺といいましょうか、当時『箱形粘土棺』と命名されていたのですけれども、粘土を用いる特殊な埋葬施設について、南加賀を特徴付ける埋葬施設なのだということをご提言されました。具体的に言



1：能美市茶臼山2号墳 2：小松市借屋4号墳 3：念佛林古墳

図1 二種の箱形粘土棺

しますと、図1に示した1番が能美市の下開発茶臼山2号墳のものですけれども、この埋葬施設に粘土を敷いております。今まで言いますところの粘土棺にあたるのではないかと思うのですけれども、このタイプをB類として。それから念佛林古墳や矢田借屋4号墳のように四角く粘土を盛って箱形になるもの。先生はこういう箱形になるものを上に蓋が付くものと理解しておりますとして、A類の箱形粘土棺となります。

つまり、床に粘土を敷くもの、粘土に蓋のないタイプというふうに区別されております。先生は、この箱形粘土棺の床に粘土を置くタイプから箱形の四角いタイプになると考えておられました。これは当時の発掘調査の、時間も予算も限られたなかでの調査ですので、どうしても分からぬところが出てきます。特にこちら蓋のあるタイプは出入り口がないから、これは棺なのだという認識で考えておられました。したがって蓋のないタイプから蓋のあるタイプという発展形態を考えておられましたが、今は否定されています。

私は1のようなタイプは、いまにいう粘土櫛という木棺に粘土を包んで保護する埋葬施設ではないかと考えておりますし、蓋のあるタイプについては、出入口が最近の調査で確認できてきました。それから出入口があるということは、そこから人が出入りして、何回も人間を葬った痕跡も確認できます。したがって、これは横穴式石室に類するものでないかと考えるようになります。しかし上野先生の立てられた仮説は非常に強い影響を持っておりまして、現在でも先生の考え方を支持していらっしゃる研究者もおります。

それから1977年に中司照世さんという、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの先の所長さんのご研究が次に上げられます。この方は「加賀における古墳時代の展開」という、ご論考を発表されました。どちらかというと、次に紹介いたしますけれども、石川考古学研究会が江沼地域の古墳の分布調査をおこない、一緒に活動することで、加賀地域における古墳群の動態というものをまとめられております。図2に示すように、古墳を小地域のブロックに分けて、ブロックのなかで首長古墳の動態、大きい古墳が出てきたり、消滅したりという流れを整理して、古代豪族の動きを読み取ろうというのが中司さんのご研究であります。

その仮説として三湖台古墳群の造営主体、

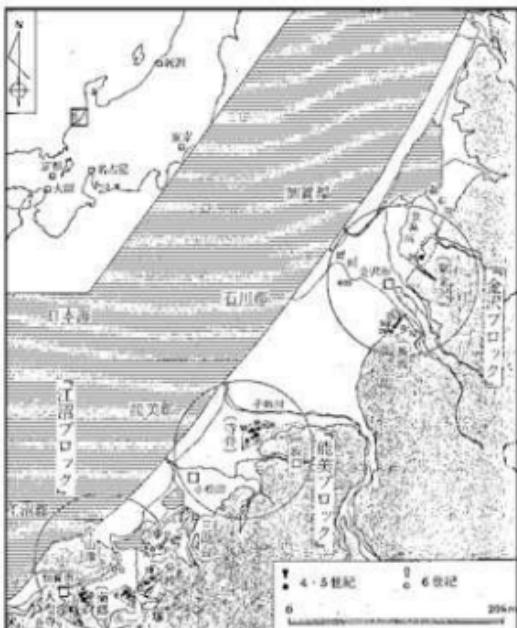


図2 加賀地域の古墳ブロック

すなわち、古墳群をつくった人は江沼の地域の人々なのか、能美の地域なのか、はたまた金沢地域なのか、それぞれのブロックがいかに母体となったかということを論証しております。結論的には、図3のように、三湖台の古墳が二子塚古墳群から、矢田野古墳群へと続いていくところで、江沼地域の首長のかかわりを非常に重視されております。あとで触れますけれども、狐山古墳の存在が非常に大きなものであることを述べておられます。

なぜ江沼地域から三湖台の古墳が出てきたかということを考えた背景として、狐山古墳に埴輪を持っていることと、三湖台地域の古墳も埴輪を持っていることの共通性があります。また狐山古墳に石棺があって、矢田新丸山古墳にも石棺を持っていると。少なくとも能美地域にはない埴輪と石棺を持っているという共通項から、江沼地域の首長が三湖台の古墳群をつくったのではないかと結論付けられております。

すなわち、三湖台地域の古墳をつくっていく背景には、狐山古墳の存在というものが非常に大きいと考えておられまして、狐山古墳が作られなかったら、おそらく三湖台の古墳がなかっただろうと。そういう言い方はしていないのですけれども、それぐらいの大きな画期に考えておいでです。この狐山古墳は、台地の上につくられた全長56メートルの前方後円墳で、非常に内容の優れた副葬品等を出土しております。

また中司さんは、この狐山古墳が朝鮮半島系の銀製の帶金具を持っていることなどから、朝鮮半島とのいろいろな軍事的なかかわりのなかで力を持ってきた人間だと、画期を評価しております。この狐山古墳の被葬者が、三湖台の地域を開拓し、また能美地域における首長墳の流れから、和田山5号墳

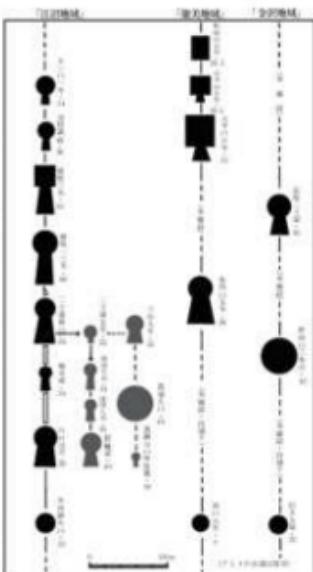


図3 加賀地域首長墳系列(中司案)

以降よく分かっていなかった古墳の空白期の解釈として、江沼の三湖台の地域と能美の地域が統合されて、加賀の地域をまとめるような制権を確立してたと論じておられます。

中司さんと二人三脚のようにして研究をおこなっておりました石川考古学研究会も、分布調査の報告書を出してあります。そのなかでやはり中司さんと同じ方法で、旧江沼郡のなかの古墳をブロックに分けて、それからいってどんな時期に古墳が置かれたか、古墳の編年を組みまして、そこからいくつかの画期、地域の古墳の流れの大きな変革点を探っております。特に三湖台古墳群とかかわるところでいいますと、孤山古墳の存在をここでも大きな画期としてとらえております。

特に孤山古墳の東側に多くの小さい古墳が圃場整備の調査で見つかっております。図4のように、30基ほど見つかっているのですけれども、そのなかで二子塚東田10号墳という前方後円墳の存在と、古墳に埴輪を持っていること。しかし非常に小さい古墳で群集墳という、とても首長墳ではないこと。それよりも下の有力な家族層の人間の墓が近辺にある点が非常に重要です。

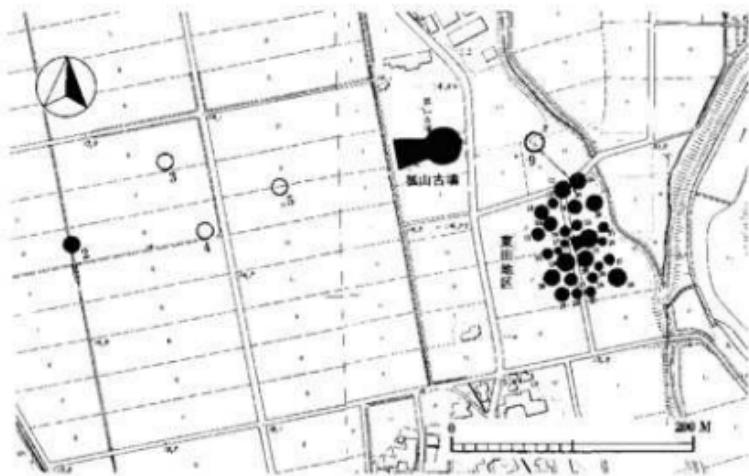


図4 孤山古墳を中心とした古墳分布

報告3 楠美、江沼の古墳動向と三湖台古墳群

狐山古墳がつくられたときに、こういう有力な家族がもう一度地域的に編成されて、三湖台古墳の出現があるのではないかととらえております。いずれにしても、この江沼の古墳のなかの狐山古墳の存在というものが、非常に大きいといえると思います。

それから1999年には、小松市教育委員会の樺田誠さんのご研究が、当時の到達点としてあるのではないかと思っております。これは研究集会の「北陸における古墳時代中・後期の様相」というご発表のレジュメですけれども、そのなかで三湖台古墳群の特徴をいくつか挙げております。

一つは、私が冒頭に前方後円墳がたくさんあるのだということを申し上げましたけれども、前方後円墳を核にして面的に台地に点々とつくられている状況にあることです。それからあとで紹介いたしますけれども、横穴式木室、



私たちがたびたび報告していますが、そういう特殊な埋葬施設が三湖台の地域に特徴的に見て取れることもあります。

また望月さんのご報告でもありました。小さな円墳にまで埴輪を持っておりことがあります。普通、埴輪というのは、前方後円墳を中心として首長墳や大型古墳に樹立されますが、それが借屋古墳群の小古墳にまで樹立されているという特徴があることです。樺田さんは前方後円墳と円墳との築造の期間が同じで前方後円墳の消滅が古墳群の消滅にもなっていると述べておりますし、消滅後の古墳は孤山古墳の少し南にある法皇山横穴墓群に主体が移っていくと述べております。

このような三湖台の古墳群の特徴を挙げていって、これは一体どういうことなのかということを、樺田さんは江沼の勢力による新たな墓域の獲得ということで、三湖台古墳群を評価しております。墓域として評価していくときに、ちょうど能美と江沼の中間の地にある三湖台というものが、二つの地域を統合していく一つの記念碑的な存在ではないかと考えております。二つの地域を統合していく背景というものに、在地の人間の活動ではなくて、畿内王権のいろいろな思惑があり、港の管



図6 加賀地域古墳群分布

報告3 能美、江沼の古墳動向と三湖台古墳群

理、国造の掌握などです。これについては先ほど菱田先生のほうからお話をあったとおりであります。

このような王権からのいろいろな働きかけによって、江沼の勢力が能美の勢力を統合していくという姿をご研究で明らかにしております。今まで見てきた研究というのは、三湖台地域と江沼の地域を近い関係でとらえている研究ではないかなと思います。

2005年に、三浦俊明さんという方が加賀における古墳の編年をもう一度見直そうというご研究をされました。加賀地域の古墳の変遷を、古墳研究の定石なのですけれども、図6のように小地域ブロックに分けて、そのなかの古墳の消長、動きというものを整理してきました。そこで五つの段階を設定して、4段階目に三湖台古墳群をつくることができたという点で、大きな画期を認めております。

それはどういうことかと
いうと、先ほど望月さんあ
るいは菱田先生の報告にあ
りましたけれども、須恵器
質埴輪の出現があります。
須恵器質埴輪というのは尾
張のほうの技術だろうとい
われておりますけれども、
この須恵器質埴輪が三湖台
から出るばかりではなく、
図7の分布図に示すよう
に、加賀と能登の境を流れ
る大河川河口近くの古墳か
らも出ています。

それから、かほく市（旧
宇ノ氣町）指江B遺跡から
も南加賀で作られた須恵器

凡例
●出土品
■未発見

- 1 北川尻
- 2 二ツ原
- 3 指江B遺跡
- 4 御幸塚古墳
- 5 上古古墳
- 6 尾田野エジリ古墳
- 7 尾田野4・9・12号墳
- 8 二子塚孤丘古墳
- 9 子塚7号墳
- 10 ニツ梨殿塚空塚跡

0 2km

図7 須恵器質埴輪の分布

質埴輪が出ております。そういう点から、尾張形の須恵器質埴輪というのは、特定の窯場から特定の古墳群に動くというシステムではなくて、より広域に動くシステムが特徴なのだとということを述べております。そして三浦さんは、そのシステムが南加賀に導入されたのだと述べています。そういう観点からすれば、三湖台の古墳群を江沼と能美とそれぞれ違った勢力、第三の勢力の古墳群ではないかと、問題提起をされております。

以上三湖台の古墳をめぐりまして、大勢の方がいっぱい研究をされているのですけれども、やはりこのなかでいえるのは孤山古墳の存在が非常に大きいということです。われわれ古墳の勉強をしているものにとって、大切にしていることは、古墳の在り方というものをまず分布・編年・それから古墳に表される集団関係を読み取るという方法論があります。

3. 北陸中期古墳の集団関係

(1) 古墳から見た畿内王権の構造

まず古墳からどういうものが見えるかということを述べさせていただきます。前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳いろいろな形がありますけれども、前方後円墳なり前方後方墳なり、それぞれの墳形に意味があると考えられています。また大きさにも意味

があると考えております。

このなかで都出比呂志さんという方が、「前方後円墳体制論」という論説を提起しております。前方後円墳を頂点にして、それから前方後方墳、円墳、方墳と階層になっている社会があると述べています。図8の概念図に示しましたが、つまり前方後円墳を頂点とするような古墳の階層構造を持つ

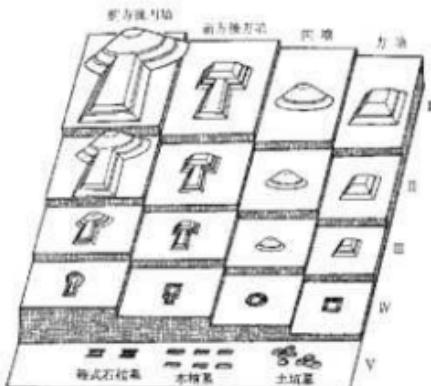


図8 都出による古墳の階層構造

た社会です。そして、これが国家の初源的な姿なのだと述べております。ちなみに前方後円墳、前方後方墳の違いというものを、私どもどういうように表現すれば良いかということをよく考えるのですけれども、都出先生は近世の幕藩体制における外様大名のような存在ではないかと例えております。おそらく言い得て妙な表現ではないかと思うのですけれども、そういう墳形の違いというものが非常に大きな意味を持っていた時代だと、ご理解していただきたいと思います。

それから都出先生は、こういう古墳の消長、古墳の動きを京都府乙訓地域で検討して、古墳が続いたり、断絶したり、また別なところで古墳が出てくるという古墳のいろいろな系譜。その流れを整理して4世紀の後葉、5世紀の前葉、5世紀の後葉、6世紀の前葉と4つの画期を設定しております。5世紀の後葉については、雄略天皇の画期というものを非常に意識しておりまし、6世紀前葉の画期については、たびたび話に出ております繼体天皇の画期というのに相当すると述べております。

畿内王権の構造がどういうものかということを、和田晴吾さんという方がご研究をされております。和田さんは古墳時代を5つの段階、6つの画期に整理しています。注意しなければいけないのは、和田晴吾さんの後期の始まりというのが、われわれがここのフォーラムで使っている編年と少し違いまして、だいたい中期の後半ぐらいをイメージすればいいと思います。

和田先生も都出先生と同じように、周辺部を含めた畿内の主要な古墳群の動向を整理して、画期を設定しております。このなかで一番大きな画期を、

表2 和田による古墳時代の画期

時代	時期	小期	段階	画期	主 妥 な 古 墳 の 動 向
古 墳 時 代	前 期	1、2	第1	第1	前方後円（方）墳の出現
		3・4	第2	第2	前方後円（方）墳の急増
	中 期	5～8	第3	第3	前方後円墳の豪華規制開始・前方後方墳の衰退
		9・10	第4	第4	大型古墳群の衰退・中小前方後円墳の増加・古式群集墳の出現
	後 期	11	第5	第5	前方後円墳の段階的消滅開始・新式群集墳の登場
				第6	前方後円墳の消滅・新式群集墳の衰退・終末式群集墳の出現

第4の画期としております（表2）。これはだいたい5世紀後葉ぐらいをイメージしているのですけれども、古式群集墳と言いますか、先ほど見ましたような孤山古墳の横にある小さい古墳の集合体で古墳が出現してくる時期になります。

畿内でつくられた石室モデルが、どんどん日本各地に広がっていきます。そういうところからも第4の画期を非常に重視しております。この画期は、おそらく大王家の内紛あるいは大王の系譜の断絶など、いろいろな要因があるのではないかと考えております。さらに古墳時代を二分するような、非常に大きな画期だとおっしゃっています。

先ほどの話をまとめますと、古墳時代前期、中期には大王墳が抜きんでた存在で、その下にそれより規模の小さい前方後円墳、帆立貝形古墳、円墳などがつながっていく形態になります。

それぞれの地域においても、大きな前方後円墳、帆立貝形古墳、円墳などが一つの集合体をつくりています。概念図で示しますと、図9になりますが、それぞれの地域で大きな前方後円墳を中心とするような地域社会がつくられていっています。特に畿内の周辺では、畿内首長連合と表現されていますけれども、特に乙訓の地域、淡輪たんのわの地域、播磨の地域とか、畿内の有力な豪族を中心とする連合体を想定しております。従って中期という社会は、どちらかというと大王と連合する各地域の首長の存在、そういう集合体が古墳時代の前期、中期と理解されております。

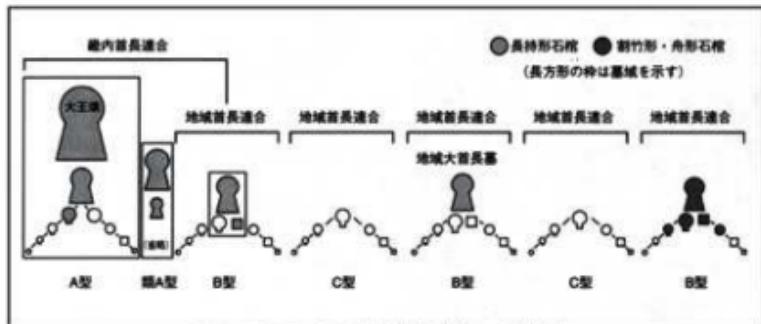


図9 和田による中期古墳時代の政権構造

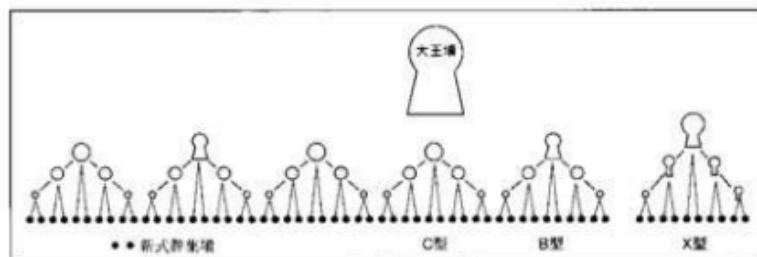


図10 和田による後期古墳時代の政権構造

それが古墳時代後期、だいたい6世紀になるとどのように変わるかというと、より個別的な支配を畿内王権が目指していくことになります。図10に示すように、大王塚がそびえて、それぞれの地域のなかで個別に大きな前方後円墳もあれば円墳もあると。それが個々に、いままでは地域のなかで大きな前方後円墳の下にきていたものが、より直接的に王権と結びついていく社会になっていき、それが群集墳というかたちで明確に現れると述べております。

どちらかというと地域社会をより王権が掌握していく過程、より中央集権化していく過程といえるのではないかなと思います。こういう畿内王権のとらえ方、古墳のとらえ方から地域社会を見ていくという研究方法と、もう一方に、地域の古墳の流れを整理して、そのなかで何が見えるかという研究もあります。

これは最近あまり主流となっている研究ではないのですけれども、岩崎卓也さんあるいは近藤義郎さんが代表的です。首長の輪番制りんぱんせいということで、よくいわれております。例えば、長野県の善光寺平の例ですけれども、前期から姫塚古墳、森将軍塚古墳、川柳将軍塚古墳、有明山将軍塚古墳、倉科将軍塚古墳、中郷古墳、土口将軍塚古墳というように、千曲川の右岸と左岸を交互に行ったり来たり首長塚が変わっております。これはそれぞれの首長系譜ではなくて、善光寺平の一円の支配権力というものが、千曲川左岸と右岸の勢力に行ったり来たりしているのであり、それが輪番のような状態なのだと述べております。

したがって古墳から地域社会の動向をどう読み取るかというのは、非常に

難しい側面を持っております。

(2) 北陸首長墳分析の方法

それで今回のフォーラムに合わせまして、北陸の首長墳がどのようなものだということを考えてまいります。まず大型古墳の動向がどうか見てまいります。図 11-1 は北陸の古墳の墳丘規模から割り出したグラフです。大型の区別を古墳の数のピークで合わせていきまると、前方後円墳だとだいたい 60 m より大きければ大型かな、前方後方墳だと少し小さくて 50 m 以上かなと考えられます。円墳や方墳だと、1・2 のようなグラフはつくれなかったものですから、前方後円墳あるいは前方後方墳、大型のものをつくったときの後円部相当あるいは後方部相当の大きさのものが、大型古墳として認識できるかなと思つております。

例えば、越前の福井平野を例に見ますと、図 12 に示すように、超大型の古墳が松岡、足羽山、酒生地域に点々とあります。よく見ますと、おおむね約 10km ぐらいずつの間隔で分布しています。しかも石棺の分布を見ますと、松岡の地域のほうは大型古墳に入っており、足羽山地域の石棺は小型の古墳に入っている。そういうところからこの二つの地域は、石棺を共

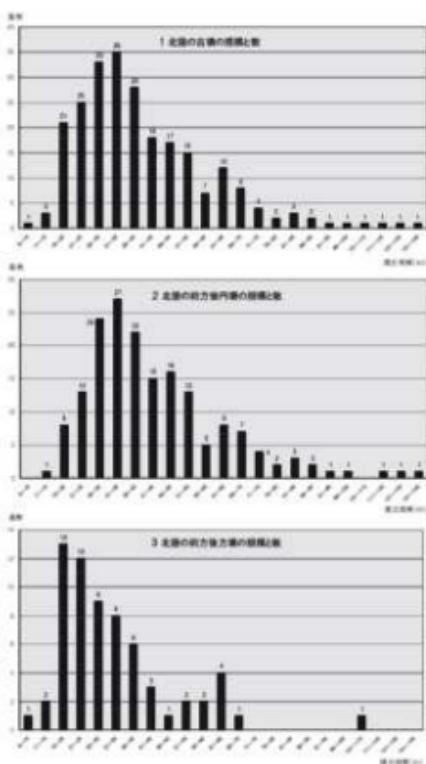


図 11 北陸の前方後円墳・前方後方墳墳丘規模

有する意味で非常に親縁であるといえます。しかも大型の古墳を持っている松岡の地域が、階層的に上だらうと思われます。

それから古墳時代前期には、玉つくりの遺跡群がございます。ここで作られたと思われる非常に変わった石製品なども免鳥5号墳に入っています。そういうことからすると、超大型の古墳の活動エリアが10kmのエリアを越えて複数のエリアに行っている可能性をこれで見て取ることができます。しかし、おおむね大型古墳のエリアは10kmを単位として見ていきたいと思っております。

4. 江沼の古墳群と能美の古墳群

(1) 能美の古墳動向

これまで述べた方法で、それを江沼と能美地域の古墳群で見ると、どうなるか。

まず、能美古墳群で見てきりますと、図13に示すように、秋常山1号墳、和田山5号墳とあり、そこから約10kmのところでは、だいたい梯川河口あたりに来ます。同じく吸坂古墳群からだいたい10kmだと三湖



図12 越前における領域設定



図13 南加賀における領域設定

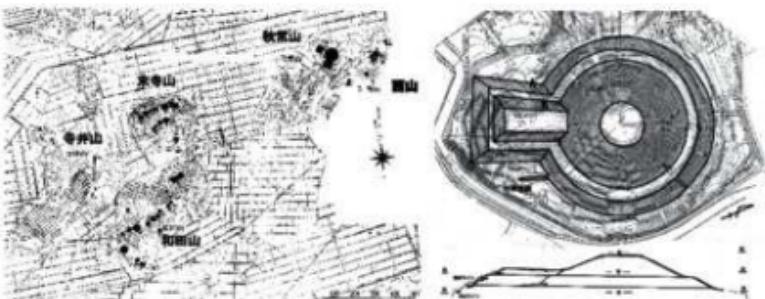


図 14 能美古墳群と秋常山 1 号墳

台の手前に来ます。そういうことで三湖台の地域は、前期と中期の古墳の空白地帯にあたります。つまり能美の地域と江沼の地域のそれぞれの地域の範囲の外にあると考えられます。それぞれの地域のなかで大型古墳が継続していることからすれば、それぞれの地域が一つの完結した地域であると見て取れます。

能美地域について見ていきますと、最大規模の古墳が秋常山 1 号墳という古墳です。図 14 に示しましたが、全長 120 メートルの 2 段築成の古墳で、能美古墳群のなかの中核的な位置を占めています。しかし 100 メートルを越す墳丘を持つけれども、越前国の 100 メートルを越す超大型の古墳とは少し異質だなと思っております。

能美地域の古墳から出土した副葬品の代表的なものを見てまいりますと、図 15 の和田山 5 号墳にありますように甲冑類が非常に多いということがあげられます。それ



図 15 和田山 5 号墳の埋葬状況と副葬品

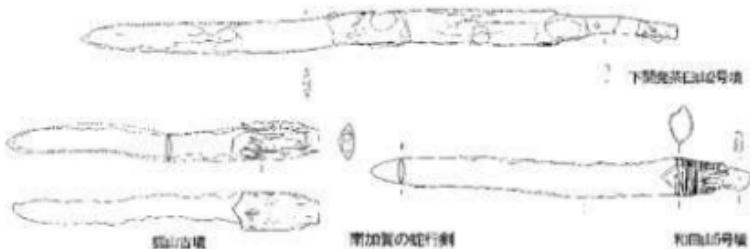


図 16 南加賀の蛇行劍

から、図 16 には蛇行剣をあげました。左下は孤山古墳の蛇行剣。右下は和田山5号墳の蛇行剣。このように剣の形が蛇が動くようにくねくねと曲がっている状態の剣のことを言います。こういう剣は全国でも類例が 70 本ぐらいしかありません。南九州に半分近くあるわけですけれども、そういうなかで北陸、特に能美の地域に集中しているのです。甲冑については、加賀の国のはほとんど 90 パーセント以上が能美の地域に入っている状態です。

そういう武器、武具類を非常にたくさん持っている状態が能美の地域であります。ひとつ注意しなければならないのは、甲冑類、蛇行剣が能美の地域とともに孤山古墳にも入っているということで、剣とよく似た副葬品を持っている点に注意すべきだと思っております。

(2) 江沼の古墳動向

江沼地域の古墳について見ていきますと、分校、それから吸坂あたりに集中し、それぞれの古墳群が集落の後背に分布している状況にあります。そういったなかで吸坂の古墳というものが非常に大規模な古墳が集中

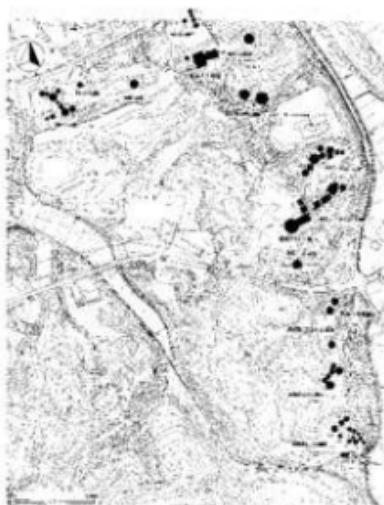


図 17 吸坂古墳群分布

しております。図17に示しましたが、吸坂A3号墳、吸坂D13号墳。これらをよく見ていきますと、こういう大きな古墳はそれぞれで墓域を形成しているのに対して、南郷の古墳とか黒瀬とか小さな古墳それぞれで墓域を形成している。

こういう分布の在り方は能美の古墳とは若干違って、それぞれ独立していると見て取ることができます。

(3) 古墳に見る中期社会

そういう観点で能美の古墳群の墳丘規模から古墳構造を見ていったのが図18です。大型古墳としての系譜、すなわち首長墓系列が和田山5号墳までは続きそうです。それから20mか30mクラス、20m強のクラスの比較的大きな古墳があり、さらにその下にも古墳がある状況です。能美古墳群という狭いエリアのなかで、首長墳系列とそれに準ずるような系列、さらに小さい系列と、そういう古墳が重層している状態を見て取ることができます。

甲冑を持っている和田山5号墳、和田山2号墳とともに、それに準じるようなクラスの古墳にも甲冑を持っています。それから地域は変わりますけれ

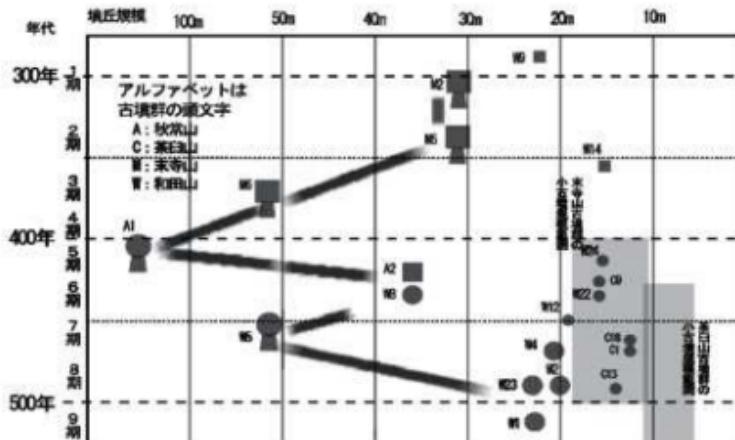


図18 能美古墳群の群構成

ども、東に位置する下開発茶臼山古墳群の茶臼山9号墳という割と大きめの古墳のなかに甲冑が入っています。それぞれの首長層、そしてそれに準ずるような階層、さらにその下の階層というように、古墳の墳丘規模から見た階層区分からすれば、いくつも重層した状態が認められます。それが能美古墳群では小さい古墳のなかの上のほうのクラスといいますか、割と大きなほうのクラスに甲冑が入っているというところからも、非常に武装化された被葬者の姿を見て取れると思います。

5. 狐山古墳の特異性

次に狐山古墳について、今まで検討した江沼の古墳とどこが違うのかという話を少しさせていただきます。図19に示したものは狐山古墳の墳丘ですけれども、この周りに盾形周濠という盾の形をした周濠を持っております。この盾形周濠というのは近畿地方の大型中期古墳によく見られるつくり方で、古市・百舌鳥という二つの大王陵の古墳群があるのでそれども、その古墳群の築造の規範を受けていると思われます。

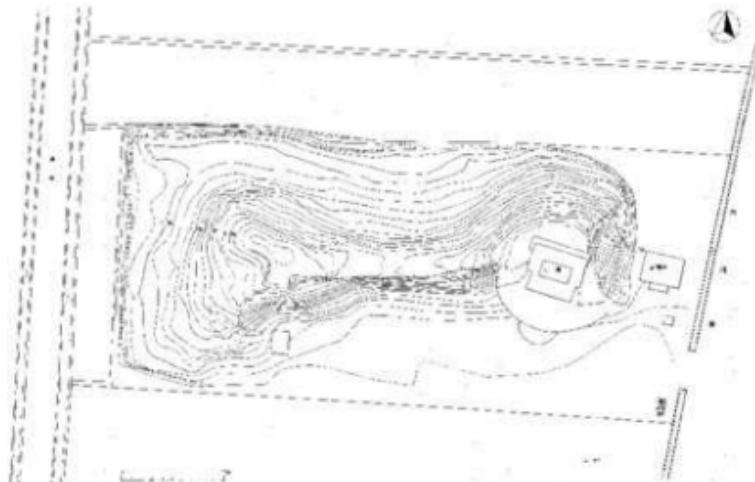


図19 狐山古墳墳丘

それから葺石です。全面に石を葺いています。埴輪を持っています。その埴輪も人物埴輪を持っています。そういうところからも、

従来の江沼にはない非常に特徴的な古墳であるといえます。

さらに鏡があります。これは画文帶神獸鏡という鏡ですけれども、これと非常によく似た鏡が名古屋の大須二子塚古墳から出ております。そういうことからも東海地方との関わりも考えねばならないかと思います。また、図20の銀製の帶金具ですが、この遺物からも伽耶地域と同じような物品を出す国際性豊かな古墳であるとも考えられます。

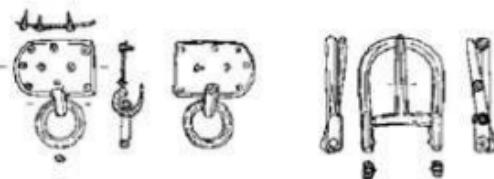


図20 狐山古墳出土帶金具

6. 後期古墳と南加賀

(1) 特徴的な埋葬施設

このような古墳の流れのなかで、後期南加賀の古墳にある特徴的な埋葬施設を見てみたいと思います。写真1に示しましたのは、これを横穴式木室と私は考へていますけれども、従来は箱形粘土棺といわれていたり、木芯粘土室、それから近年では木造粘土被覆室という言葉で、粘土を使うことに特徴的な埋葬施設として考へられてきました。私はこれを横穴式木室であると積

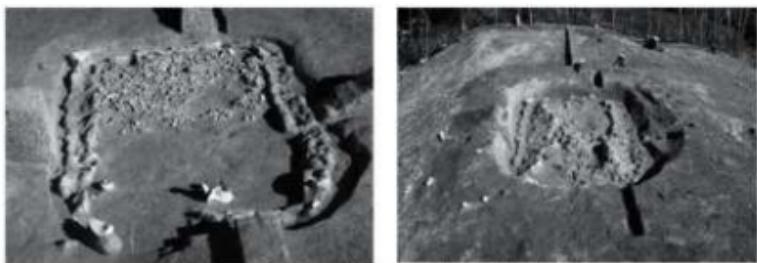


写真1 ブッショウジヤマ1号墳の横穴式木室

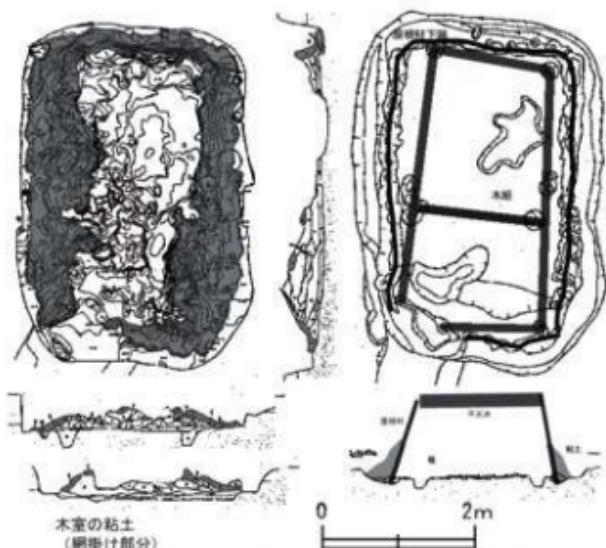


図 21 ブッショウジヤマ 1号墳の横穴式木室構造

極的に評価したいと2年ほど前に学会で発表したのですけれども、それ以来賛否両論があります。

その木室構造について私なりの簡単な見解を示します。図21には検出した状態で、色の付いているところが粘土になります。この粘土の切れているところが入り口になって、羨道という出入口にあたります。この中が玄室という墓室空間になります。これはブッショウジヤマ古墳群の事例ですけれども、柱が7本あります。ここに浅い溝があって、閉塞の仕切りの板が入るのかなど。ここに線を入れていますのは屋根材の下端に当たるところで、粘土がそれにくっつく状態と。復原しますと、右下のような平天井の屋根形の構造体になると思われます。この上までは粘土が薄い

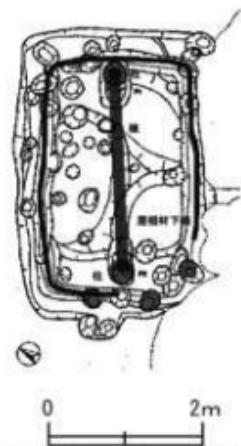


図 22 矢田堀屋 16号墳の横穴式木室構造

状態で、一見たくさん粘土があるよう見えますが、これは倒れ込んだことによって面的に広がったと考えておりますので、実際は屋根押さえのために粘土を置いたのではないかと考えられます。

こういう構造とともに、図 22 に示すような矢田借屋 16 号墳のように二本柱で組む合掌形のタイプもあります。これと同じ構造が埴田の後山明神 3 号墳にもあり、複数の墓室構造の系統があるようです。

例えば図 23 のように、遠江においても、たくさんの横穴式木室が出ているのですけ

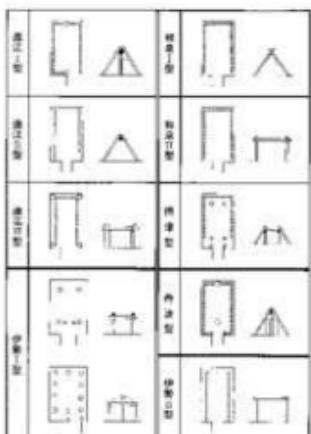


図 23 横穴式木室の構造一覧

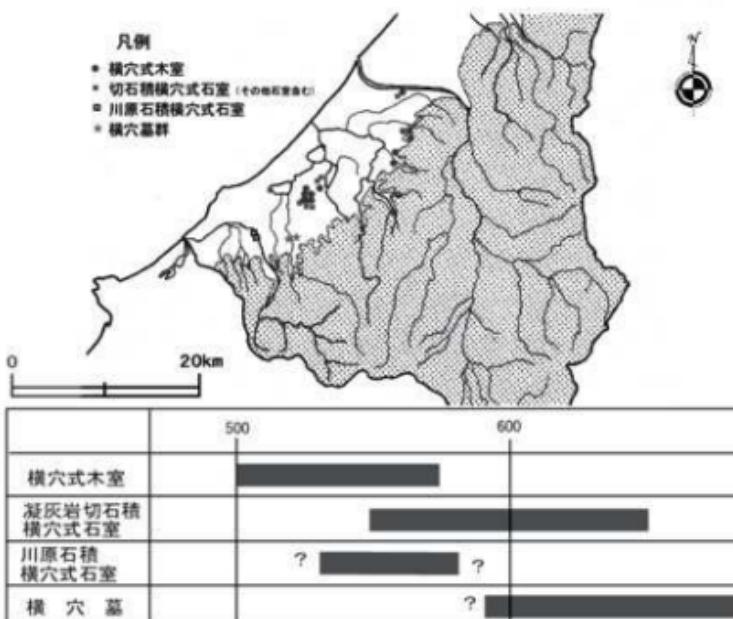


図 24 南加賀の後期埋葬施設の時期と分布

れども、向こうでも3タイプ、摂津、和泉のほうでも2タイプ確認されております。いろいろなタイプがあるというのは、よく分かると思います。したがって、この横穴式木室は全国にたくさん見つかっているのですが、それを系統だって構造変遷が追えないという特徴があります。

やはり同じようなことが、この南加賀でもいえます。ただし分布の状態を見てみると、横穴式木室が三湖台の地域に集中するとともに、能美的地域にもある程度分布します。ただ分校のところにもあるといわれておりますけれども、私はよく分かりませんので今回はこの分布図からは外しました。

この横穴式木室というのは、だいたい6世紀全期間にわたってはつくりません。6世紀の後半になるとほとんどつくられなくなるようです。6世紀でも中ごろぐらいから、木室墳が衰退してくると同時に代わりに横穴式の石室が出てくるという流れになってまいります。つまり、この二つの墓の形が、切石積横穴式石室と、横穴式木室が同じような分布を示しているということは、ある意味、墓制の変換が起こったといえると思います。

(2) 横穴式石室の出現

代表的な横穴式石室では符津石山古墳が挙げられます。^{ふづいしやまこふん}凝灰岩の切石積みです。凝灰岩を四角く豆腐のように切り、横にくる石材を図25のように、こういう鍵手をつけて組み合わせていくつくり方をしております。このつくり方は、ほぼ同時期に越前の地域で神奈備山古墳^{かなびやまこふん}という古墳にも、こういう切石積みで、こういう鍵手を持つ、組み手を持つ石室をつくっていることから、越前との関連を認めなくてはいけないと思ってい

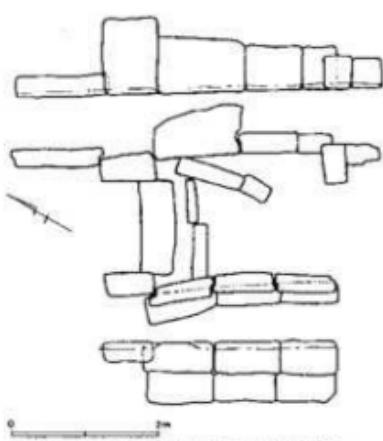


図25 符津石山古墳の横穴式石室

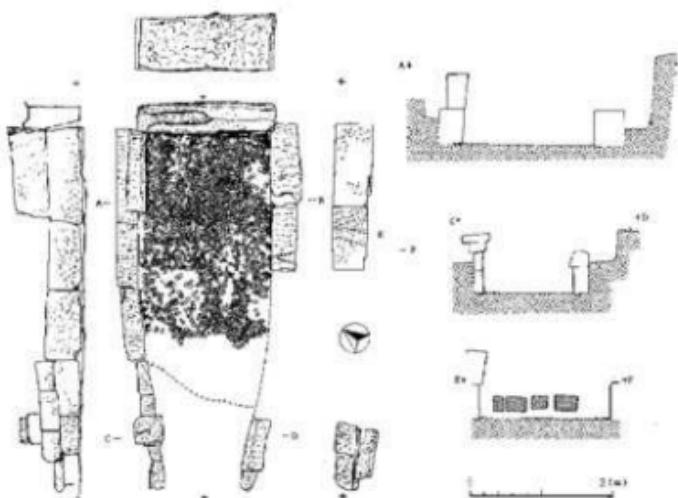


図26 西山8号墳の横穴式石室

ます。

この石室が、例えば能美の地域ですと、西山8号墳の図26のように、徳利のような形をした石室ですし、これは少し時代が新しくなるのですけれども河田山12号墳のように四角くて、途中に立石をもって部屋を2分しているような構造のものもあります（写真2）。この切石積横穴式石室は、南加賀形というべき一つのモデルみたいのがあって、それが受け継がれていくわけではなく、いくつかのパターン、モデルというか石室の形がありそうだということが分かってきました。

（3）三湖台古墳群の被葬者

以上をまとめますと、三湖台古墳の被葬者というのは、いったいどういう人々であったのか、予想されるかを見てまいります。

私は孤山古墳の存在・出現というのが非常に大きな画期だと思っております。しかもこの孤山古墳のなかで銀製帶金具を持つとか、甲冑を持つ、蛇行剣を持つ、そういう点で能美の地域に非常に近い遺物を持っているというこ



写真2 河田山12号墳の横穴式石室

とに注意しなければならないと思います。つまりこの孤山古墳と従来の江沼の地域を結びつける素材は少ないのでないかと。これはまた、孤山古墳の被葬者自身が江沼地域の外から入ってきた人間ということを、ある程度考えなくてはいけないのでないかということです。

以上より、この三湖台の地域も含めて外来の集団を受け入れる素地を持っている地域の墳墓であると考えてはどうかと思っております。

まとめとして、後期に三湖台の古墳をつくっていくことに非常に大きな画期があるということと、その前提として孤山古墳の存在があると。そしてそれを受け入れたこの地域というのは、伝統的に外来の集団を受け入れる素地があるのでないかということを問題提起として、終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

座談会篇

「古墳時代後期の江沼の実像と三湖台古墳群の謎」

進行役：望月精司 パネラー：菱田哲郎・伊藤雅文



矢田野エジリ古墳出土人物埴輪群（国重要文化財）

【座談会】

「古墳時代後期の江沼の実像と三湖台古墳群の謎」

1. はじめに

望月精司：司会進行をさせていただきます、望月です。

私も報告をさせていただいた一人ですので、私から菱田さん、伊藤さんのお二人に意見を聞くというよりも、3人で座談会を行う形で、進めさせていただきたいと思います。そのため、司会進行とパネラーという座席配置ではなく、3人でディスカッションするという形にするため、今回は扇形配置にしてみました。

さて、今回のフォーラム座談会は「古墳時代後期の江沼の実像と三湖台古墳群の謎」というテーマで討論をおこなうのですけれども、項目を大きく3つ上げさせていただきました。

一つ目の項目は、南加賀窯跡群の成立と技術導入の在り方についてです。南加賀窯跡群の成立に際し、どのような形で技術導入がなされたのか、また



は成立期には須恵器と埴輪の兼業体制を作りますが、その際の工人編成はどうのように行われたのか、いくつかの問題点を検討したく思っています。

2つめの項目は三湖台古墳群の特徴の整理です。三湖台古墳群にはその立地の特異性、母体集落の問題、または三湖台古墳群の特徴である小規模前方後円墳と横穴式木室、埴輪樹立の問題があります。討論ではそこから見える三湖台古墳群の位置付けと造営勢力について検討したく思います。

3つめの項目は、それらを総括する形で古墳時代の江沼と三湖台古墳群の被葬者像に迫りたく思います。余奴臣とは？江沼国造とは？現在の江沼盆地の地域勢力から生まれた首長なのか？繼体天皇との関わりなどについても検討したく思います。

以上3点について、討論していきますが、検討項目が多いため、全てを取り上げることができないかもしれません。順番も少し変える可能性もありますが、話の流れに沿って、いけるところまで行ってみたいと思っています。

2. 会場からの質問

望月：会場に質問箱を設置し、質問を受けましたところ、実にたくさんの方から質問が寄せられました。質問の内容が、これから取り上げる討論項目に含まれているものが多くあります。例えば、矢田野エジリの被葬者像について、埴輪から見る尾張との関係や繼体天皇との関係はどうか？または南加賀窯跡群の6世紀における広域流通を達成できた要因はどこにあるのか？横穴式木室に関し、横穴式石室への変遷は追えないのか？または構造的に須恵器工人の墓というイメージが成り立つか？などなど、これらの内容に関しては、座談会討論において触れさせていただくことで、質問への回答に代えさせていただきたく思います。それ以外の質問に関しては、少し整理させていただいて、今からお答えしていきます。

質問1～滋賀県高島市田中古墳群36号墳の横穴式石室発見報道について～

望月：まず最初に、伊藤さんへの質問ですが、9月14日の各新聞に報道された滋賀県高島市の田中古墳群36号墳発見の横穴式石室についてであります

す。新聞では玄室の奥に類例のない遺体安置空間を設けたものであるとされており、それが北陸と関係があると報道されていますが、この点について、どのような意味があるのかということを、質問されています。

伊藤雅文：その石室については、私も新聞報道だけなので何ともいえないのですけれども、あした現地説明会があると新聞では載っておりました。写真や記事の内容を見ますと、奥壁にどうも仕切りがあって、仕切りと奥壁とのあいだが赤く朱で塗られていたというところから、コメントされていた花園大学の高橋克壽先生がこういう構造は日本海側にもある、北部九州にもあるというコメントを出されております。

おそらくそういうことを受けてのご質問ではないかと解釈しまして、お答えいたします。高橋さんのイメージされているのは石屋形という構造ではないかと思います。それはどういうものかといいますと、奥壁に一つ小さい部屋をつくって、そこに人間を安置するという葬り方です。これと同じような構造が福井県の横山古墳群榎賀山古墳の石室にあります。この石室が6世紀前半ぐらいの石室で、奥壁に沿って足羽山で取れた凝灰岩で囲みをつくって、その中に納めていたようです。そういう構造は北陸にもあるのです。

それが近江との関係というか、それがどうなのかということは、まだ新聞報道以上のことは分かりません。こういう構造が南加賀の地域であるかというと、ありません。北部九州のなかでも石屋形を持つタイプは非常に限定されており、北部九州のつくり方の石室というのもいろいろな変容パターンがあります。だから、ここにある北部九州とのかかわりで、こういうものがあるから北部九州の影響を受けている地域でも同じものがあるかというと、必ずしもそうとはならないという事例ではないかなと思います。

ひとついえますのは石屋形というのは、その中に棺桶を入れるわけではなくて、死んだ人間をおそらく置いていただろうと考えられます。石室自身が棺桶であると言えます。それが北部九州系の石室の考え方です。おそらくそういう考え方で、北陸にも北部九州系の石室の考え方に入っている。その一つのあらわれが横山古墳群にある榎賀山5号墳の石屋形ではないかと考えることができます。これでよろしいでしょうか。

望月：ありがとうございました。

質問2～古代土器生産における渡来系要素と繼体天皇との関係～

望月：続きまして、菱田さんへの質問です。土師器と須恵器がともに渡來人による技術伝搬によって生まれたのかということと、地域の焼物生産に繼体天皇の出身地ということでの保護、掩護というものがあったのかどうかという質問です。菱田さんコメントをお願いします。

菱田哲郎：まず一般論的なところで申し上げますと、須恵器の生産が渡來人によって始まったというのがどうして分かるかという点からいきますと、日本で出てくる5世紀前半代、古い須恵器の器形とか特徴が、朝鮮半島南部の伽耶地域のものとよく似ているからです。とりわけ注目されるのは、大甕を作るときの底部の作り方です。底部を一番最後に絞ってつくっています。最初は空洞になっていて、最後に底部を絞って塞ぐので、絞り目が付くということになります。

その絞り目の付き方がそっくりのものが、韓国の窯と日本のもっとも古い時期の窯でありまして、これはまねしようとしてできるものではないのです。まさに作り手が渡って来て、前にやった作り方で同じように作ったという、人間に属する技術と言う事がいえます。道具も同じで、一緒に出てくる道具も朝鮮半島のものとそっくりです。そういうことで、初期の須恵器生産が伽耶地域の工人たちの渡来によることは、これは疑いようのない事実であります。

それから土師器は、従来土師器は日本の焼物でというふうにいわれるのですが、実をいうと事態は複雑で、たくさん渡ってくる人たちが向こうの赤い焼物も持ち込みます。これは日本の在来の土器とはかなり違うものなので、こちらでは韓式系軟質土器とちょっとややこしい言い方をしています。これは非常に不思議な変化を遂げまして、日本の在来の土器と融合するようななかたちで、そのあいのこのようなものが、その後の主流になっていきます。

土師器も広くいえば、そういう渡来してきた人たちが持ち込んだ軟質土器、柔らかい土器の影響を受けて変化したといえます。須恵器の場合は生産

そのものが渡来してきた人たちの技術、土師器の場合はその影響を受けて変化をした。このぐらいが5世紀前半で言えることです。

あと5世紀の後半とか6世紀になっても、朝鮮半島にどうやら由来するらしい器が、少しではありますが出でまいります。現在よく言われているのは、5世紀の終わりごろに百濟の土器の影響が結構入っているということです。これは平底の壺ふつぢやくみたいなものが代表になりますけれども、そういうふうに渡来の技術というのも最初の1回限りでなくて、その後もいくつかの波があるのではないかと言われております。

あのの継体天皇うんぬんかんぬんは、おそらく今日の討論のほうで触れていく内容になると思いますので、どこまでそれがいえるのかということも含めてですが、このあのの議論で迫れたらいいなと思っています。

質問3～須恵器生産導入における技術者と在地定着のあり方～

望月：次の質問は、須恵器生産技術が入って来た段階、それを主導する技術者は、他地域から参入しただらうことは予測できるが、その時に在地の人たちは使役されたのか。地元労働力として駆り立てられる事例、そしてその際に地域の人間たちが須恵器技術を獲得していったということはありえるのか、そのような記録が残っているのかという質問です。この質問は私へ向けられたものですが、私よりも菱田さんの方がお詳しいと思いますので、質問を振って申し訳ありませんが、菱田さんよろしく回答のほどお願ひいたします。

菱田：技術者の実態をどうやって明らかにするかは、これは考古学的手法をもってしてもなかなか難しいのです。私は半分笑い話で言うのですが、陶邑からたくさん人が出かけて行ったら、陶邑が空っぽになるのではないかという話をしています。技術が移動してくるなかには、逆に地元出身で出かけて行って、技術の先進地で修行して帰ってくるというパターンがわりと一般化できるのではないかと考えております。

これは文献でいうと奈良時代ぐらいになれば、そういう労働の仕方はずいぶん出てまいります。各地の人たちが、上番と言いますけれども、都へ出か

けて行き、仕事を終えて帰っていくというのが出てまいります。それをどのぐらいさかのぼらせられるのかというのは、7世紀は大丈夫だと思いますが、6世紀、5世紀と、どこまでいけるかという問題はあります。しかし技術伝播の一つの一般的な在り方として想定しておくということは、一方的な中央から地方への伝播ではなしに、出向いて行って持つて帰ってくるというのが普遍化できるのではないかなと思っております。

望月：ありがとうございました。この質問の後半の部分で、他地域から来た焼物の技術者集団が新たな集落をつくって、定住した可能性はないのかという部分がありましたが、このような事例は小松市額見町遺跡ぬかみまちいせきで確認されています。時代は7世紀と、少し後の話になるのですが、集落内部に須恵器窯跡で働いているような職人がいたような痕跡があります。集落内部からは、南加賀窯跡群の須恵器窯で使用された窯道具が出土したり、須恵器窯の中で廃棄されるような窯壁のかけらなど、そのような通常の集落遺跡からは出土しないものが一定量出土しています。

私は、これらの窯に関係する出土品は製品として出荷する際の選別などに伴うものだろうと考えています。つまり、南加賀窯跡群で生産された須恵器や土師器を各地の集落へ供給するための出荷作業を行った集落であると。私の報告の図6に示すように、南加賀窯跡群と額見町遺跡は距離として4kmほどありますが、加賀三湖と河川を利用した水上交通を使えば、さほどの距離ではありません。額見町遺跡は南加賀窯跡群の出荷センターを兼ねた集落であり、おそらく須恵器職人の居住する集落であったろうと考えています。このような集落は三湖台地に広く展開していくと、台地全体がそのような技術者のムラになっている。そこでは須恵器のみならず、鉄作り、鉄器作りを行う職人や製糸業なども行っていた可能性がある。丘陵部の生産遺跡と連携したものであり、後に額田郷や八田郷になる部民のムラを大規模に作っていたと考えています。

質問4～埴輪と須恵器を同じ窯で焼く方法について～

望月：次に、窯に関する質問が2点ほどきてます。窯に関しては私が専門

にしている分野ですので、私のほうで答えさせていただきます。

一つ目の質問は、埴輪と須恵器の大きさが違うのに、同じ窯では焼けないのではないかという質問です。

埴輪には人物や馬、そして円筒埴輪がありますので、それによって並べ方が変わろうかと思いますが、円筒埴輪の場合、ちょうど高さ50cm程度ですので、縦に立てながら一個ずつ並べて置いて行けば、高さ的に均一で問題なく並べられると思います。ただ、これに人物や馬などが入ると変わりますので、少しややこしくなりますが、大体において特殊で大型のものを軸に配置し、その隙間を埋めるように円筒埴輪という規格品的なものを置くのかと思います。

これに対して、須恵器は大きさが様々で、甕などは大甕で高さ70cm以上、幅も同じくらいあります。1mを超えるものもあり、食器などが大きさ15cm程度、高さ5cm程度ですから、だいぶ開きがあります。古墳時代後期の須恵器は大甕が生産の中心であり、甕と食器の値段の格差は、奈良時代の文献によりますが、小型食器1～2文に対し、甕は120～150文と100倍くらいの差があるわけです。製作労力や材料費から考えれば当然の格差なのですが、そのため、大甕とか甕類は窯の中央の火が一番回るいい場所に並べ、その隙間の空間を埋めるように、中型品や小型の食器などを窯詰めする。そのような方法がとられていたと思われます。

埴輪はだいたい同じような大きさ、規格品を窯に並べ置くだけでよいのですが、須恵器は大きいもの、小さいものをうまく並べながら、火の回り具合などを考えて、焼物を窯詰めし、焼いている。

埴輪、須恵器とも、基本的には同じ構造の窯で焼成可能なのですが、ただ焼物の焼き上がりの色が全然違いますので、同時には焼成していないと考えられます。また、埴輪専用の窯が全国には多く発見されていますが、埴輪専業の窯も、須恵器専業の窯も構造的にはまったく同じです。ただ、焼成された後の窯内部は焼物の色に一致しており、埴輪を焼く窯は内部が赤く、須恵器を焼く窯は内部が青か灰色になっている。そのような違いはあります。

質問5～焼物生産における粘土、環境、温度、湿度の影響～

望月：二つ目の質問は、焼物を作つて行く時、素材である粘土や自然環境、温度、湿度などが、焼物にどのような影響を与えるのかという質問です。

この質問にありますように、使用される素材粘土によって焼物の色は変わります。青い須恵器を焼こうと思えば、当然温度管理とか、空気、酸素の遮断具合、窯内に一酸化炭素をどのように発生させるか、窯焚きにおいていろいろ工夫が必要です。ただ、それだけでは青い須恵器は焼けない。そこには粘土の調合が重要な要素として存在すると言われています。

私は菱田さんと一緒に窯跡研究会という古代窯跡に関する研究会を作り、活動しているのですが、そこでは実際に須恵器を復元して、焼成したりしています。そうすると、白い粘土を素材として焼成すると白っぽい焼物か灰色の須恵器にしかならない。これに対して、鉄分を多く含んだ赤土をわざわざ白い粘土に練り込んだ粘土を使用すると、青い須恵器が焼きあがります。ただ、充分に窯内部の酸素遮断ができないと、赤い須恵器になるのですが、そこでうまく化学変化を起こさせ、粘土内に含まれる酸素分を奪っていくと、最初赤く発色していた須恵器も途中で青く変色していきます。

須恵器の窯自体は1200度とかまで温度を上げる段階で、薪をくべると窯内の酸素が奪われて窯内部は酸欠状態、つまりは不完全燃焼の状態ですが、それが徐々に酸素供給され、薪が燃え、温度上昇して行く段階で、次の新たな薪をくべていく、このようなやや酸欠気味でどんどん薪を入れながら、窯の温度を上昇させていく焼成を還元焼成と言います。そして、窯の温度が十分に上がり、製品が焼成された段階で、最後に大量の薪を窯にくべて、強烈な不完全燃焼を窯内におこさせて、そのまま酸欠状態で窯を完全密閉し、冷却していく。そうすれば、灰色の焼物ができることがあります。そこに先ほど言った粘土調合を加えて、青く発色する須恵器ができる。自然環境や温度とも関連性はありますが、大きくは窯焚き方法と粘土によっていると理解しています。

以上、質問にお答えしてきましたが、だいぶ時間をとってしまいました。これから先は討論項目に沿つて、座談会を行わせていただきます。

3. 6世紀の前方後円墳の評価と国造制との関係について

望月：さて、これから本題に入ります。まずは、三湖台古墳群の評価についてです。三湖台古墳群の特徴として重要なのは、各地で前方後円墳が衰退消滅する6世紀という時代に、前方後円墳の形態を持つ首長墳がたくさん築造されることだと思うのです。前方後円墳は通常4世紀、5世紀の段階では地域を代表する首長墳、規模が大きければ当然ヤマト王権と肩を並べるような力を持つ、例えば吉備の作山古墳、造山古墳とか、そのような巨大な前方後円墳をつくることは、地域民に対する、周辺隣国などに対する権力誇示を目的とした象徴的なものだと言えますが、それが例えば6世紀のどの段階かで国造制というものができ、ヤマト王権から国造に任官される時、そういう地域首長たちは前方後円墳を採用するのかどうかということです。また、地域の前方後円墳が6世紀中葉にはなくなり、円墳や方墳へと変化していく。それがひょっとしたら国造の任官と時代的に一致するような気もしてくる。このような地域で前方後円墳を築造してきた地域首長たちが国造になる時に、前方後円墳という墳形を捨てていった可能性もあるのかもしれません。

その辺のところを伊藤さんに、三湖台古墳群の前方後円墳とヨヌノクニの国造について、どのように考えているのか、お話をいただきたいと思います。伊藤：江沼の国造について、私は正直、今まであまり考えたことはなかったもので、このフォーラムでイメージをつくらなければいけないなと思っておりました。北陸で古墳の変遷を見ていきますと、やはり6世紀中葉ぐらいに概ね、前方後円墳は作られなくなっていくのです。若狭もそうです。だいたい6世紀の中葉になると、それまで100m近くの前方後円墳が直径50mぐらいの円墳に変わっていきます。越前では、全長65mの神奈備山という雄体天皇伝承にある古墳ですけれども、これがどうも一番最後の前方後円墳だと考えております。

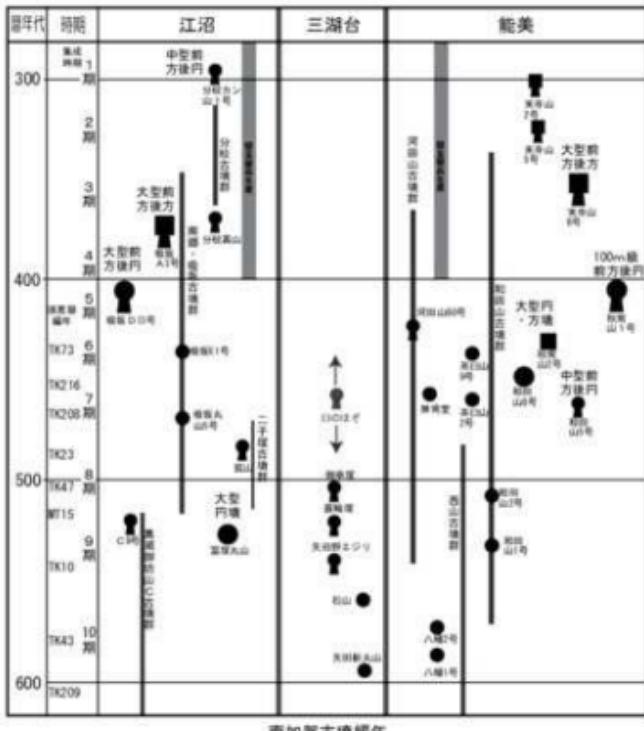
それから能登では、6世紀の前半から中頃ぐらい、越中でもだいたい6世紀の中頃、越後の上越でもだいたい6世紀の中頃ぐらいで最後の前方後円墳になりそうです。これは日本的な流れというよりも、地域的な特質が非常に

古墳時代後期の江沼の実像と三湖台古墳群の謎

強いのかなと思っています。例えば関東地方では、7世紀前後ぐらいまで盛んに前方後円墳を作っていることからもわかります。

しかし、北陸では近畿と同じように、6世紀中頃を境に前方後円墳を作っていくのをやめるようです。もちろん大王墳というのは、欽明天皇の墓かといわれております見瀬丸山古墳など、6世紀後葉までずっと前方後円墳を作っていくわけですけれども、地域社会においては、どうも王権にかなり近いところというのは、やはり前方後円墳を作らないようになります。そういう目で見ていくと、この前方後円墳を持つ意味が非常に大きいことがわかります。

例えば、ここに示す南加賀の古墳編年図で説明しますと、能美の前方後円墳、江沼の前方後円墳は、5世紀の段階でだいたい終わってしまいます。代



座談会篇

わりに6世紀になって三湖台古墳群で前方後円墳が特徴的に出てきて、代わりに能美、江沼の古墳群は円墳に変わっていきます。それらを国造の墓と言えるかどうかは、また別の問題としてあるのですけれども、主要な古墳が前方後円墳を捨てていき、代わりに円墳を作るようになって、その中に横穴式石室を作ることを一つ指標にして、馬具を副葬することが重要になってきます。馬具は馬に乗るための実用的なものでなく、儀式の時に使う馬の装具です。きらびやかな馬具を副葬するのです。そういったものが、地域社会のなかの階層の上位を占めるような人たちに採用されてきます。

そういう点からしていくと、円墳というだけでなく、円墳プラス横穴式石室、そして馬具が地域社会の支配構造の一番トップに立つような墓制を構成するようになっていると思っております。それが江沼の国造を象徴するかどうかというの、私はなかなか難しいなという立場です。

望月：ありがとうございました。

確かに、伊藤さんの言われることはわかるのですが、ただ、矢田野エジリ古墳の次の段階に、矢田借屋12号墳のような小型の前方後円墳が存在しますし、また黒瀬御坊山C9号墳とか、こういった小さい前方後円墳が存在することに関して、どのように位置付け、考えていいけばよいのでしょうか。

伊藤：前方後円墳でもいくつかの種類があると思うのです。私の資料ではなく、望月さんの報告の中で図7に三湖台の分布図が、図8に矢田借屋古墳群の分布図が載っていますけれども、上の三湖台古墳群の分布図で前方後円墳が一番北端にあります御幸塚古墳、それから白のほぞ古墳、途中にあります矢田野エジリ古墳と点々としているわけです。

ところがその下の矢田借屋古墳群の分布図を見



てみますと、下のほうに8号墳と7号墳がちょうど後円部同士を向けるようになります。それから少し西側のほうに12号墳が円墳の中にいくつかあります。もう少し東のほうに行くと、矢田野の4号墳という小さい前方後円墳もあります。

こういうように小さな古墳の群集するなかにある前方後円墳と、点々と独立的につくられる前方後円墳とでは意味が違うと思うのです。あくまでも首長墳として存立する以上、この群集墳というか小さい古墳のなかで、群のなかに紛れ込んでいる前方後円墳というのは、あくまでもそこに属している集団のなかで前方後円墳である意義があると思います。

そうではなくて、御幸塚古墳とか白のぼぞ古墳のように単独墳である前方後円墳が、その地域のなかで前方後円墳である意義があるので、それぞれ持っている前方後円墳の示す位相というか、階層というか、そういうものが違うのだと考えています。

望月：矢田野エジリ古墳についても伊藤さんの評価をいただきたいのですけれども、私の報告のなかで埴輪から雑体天皇との関連とか尾張との関連とか話をしましたが、そのような視点で他の前方後円墳と比較すると特別に感じるわけです。主体部が削平されていて、どのような構造で、どのような副葬品があったのかわからず、判断が難しいというのは確かにそうなのですが、埴輪から見た場合のこの古墳の特殊性について、評価いただけないでしょうか。

伊藤：そうですね。矢田野エジリ古墳は確か30数m、そんなには大きくなっています。けれども人物埴輪を持っており、しかも人物埴輪は埋葬の葬列儀式をちゃんと再現し、人物埴輪の規範にのっとったつくり方をしています。そういう点で、それは規模が小さいから首長墳でないとか、そういうようにはならない。

むしろ、古墳時代でも後期になっていきますと、それまで大型古墳60m以上と言っていましたけれども、横穴式石室が後円部につくられていく段階でだんだん規模を縮小してきます。同じ50mの前方後円墳と言っても中期の古墳と、それから後期の50mとでは、持っている意味が全然違うのです。そういう意味で、この20mクラスの前方後円墳の示すものと、30mクラ

座談会篇

スの後期の前方後円墳の示すもの、これは外見上ではなかなか区別し難いものです。むしろ群集墳というか、小さい古墳のなかに紛れ込んであるのか、それとは違って、その中身で違うものがあるのか、それが一番大きな要因ではないかなと思います。

望月：前方後円墳の評価について解説いただき、ありがとうございます。この評価に関しては、なかなか難しい問題ですが、座談会の最後に国造の評価も含め、総括していただきたいと思います。

4. 矢田野エジリ古墳の埴輪から見た尾張系埴輪工人の参入

望月：さて、今の討論のところで、矢田野エジリ古墳の埴輪に関し、尾張との関連性とか、近江も含めて関連性があるかもしれません、そのような地域間交流のなかで埴輪生産工人が古墳築造に際して他地域から招き入れて生産活動を行うような生産の在り方があったかと思います。専門の工人が他地域から参入するというイメージというか、たぶん須恵器の工人と埴輪の工人というのは、まったく違うような在り方で存在し、それぞれ生産組織を作っていくと思うのですが、こういう埴輪工人が来て、用務が済めば、またどこか他の生産地へ行くというのは、菱田さん、全国的に見てよくあることなのでしょうか。

菱田：そうですね。尾張はなかなか不思議な連中なのです。私の話で出てきた5世紀段階の尾張の窯というのは、あまり外へ工人が動かない。閉鎖的というか、そこの中に閉じこもっているのですが、6世紀のこの時期ぐらいを中心に半ば近くに、埴輪づくりのほうは尾張はかなり積極的に出ていくのです。ところが面白い



ことに、この時期6世紀の尾張の須恵器というのは、ほかとはまったく違っているといいくらい形が変わっているのですが、出た先では埴輪はあっても、尾張系の須恵器というのがないのです。

望月：すみません。南加賀窯跡群では、非常に数は少ないので、尾張系と言えそうな須恵器を生産しています。

菱田：この時期ですか？

望月：はい、この時期です。矢田野エジリ古墳と同じ時期です。

菱田：下ると出てくる場合があるのですか？

望月：いえ、同時期、二ツ梨東山4号窯跡で出てますので、同時期と言ってよいと思います。

菱田：そうすると、そういう埴輪、須恵器も含めてですけれども、今までなかなか動かなかった連中がこの時期に限ってよく動くようになるということに、むしろ何らかの歴史的な脈絡を考えていく必要があるのかなと思います。そういう動く時期、動かない時期というものも、いま割と年代を決めやすくなっていますので、そういうなかで矢田野エジリの時期というの、尾張が活発に動ける時期として評価してもいいのかなと思います。

ただ、ここへ来て尾張の連中は、連中と言ったら怒られるけれど、居座るということがないのですね。来て、モノを作ったら、またさっさといなくなってしまう。そういう点が、この場合ポイントなのかなと思います。

5. 北陸における須恵器生産の開始と国造との関係について

望月：矢田野エジリ古墳の時期というのは、報告でもお話しましたが、南加賀窯跡群で須恵器生産が開始されて、20年か30年ほど経った頃です。須恵器生産が開始された時期は、まったく須恵器製作の職人が江沼にも、北陸にもいなかった時期に、どうして須恵器生産を開始できるのか。その点に関しては、菱田さんが本日のご報告のなかで言われましたが、その地であるのが何か要因がある。北陸各地に見られる国造の本拠地と須恵器生産がはじめて開始される地とが重なる。この初期の須恵器生産は短期で終わってしまう窯もあるのですが、開始時期においては、国造の本拠地と初期の須恵器生産

地とが重なる傾向があるのです。

この5世紀末か6世紀初頭では、国造自体がまだ存在していないと考えられますので、この段階では国造になるような有力な首長たちという方が正しい呼び方ではありますが、そのような各地の有力首長たちがヤマト王権、当時の政治の中核機構と様々な同盟関係や政治的約束事を取り交わす中で、須恵器生産技術の分配を受けたように私は思えるのですが、文献では『国造本紀』に、国造名称がたくさん出てくるなかで、須恵器の生産地と重なるような傾向は、菱田さん、どうですか、ありますでしょうか。

菱田：本日の望月さんの報告の図11に北陸の初期の須恵器窯分布図がありますが、これはおそらく新しい意見だと思うのです。望月さんが北陸の初期の須恵器、初期といつても5世紀の終わりから6世紀の初めごろですけれども、その時期に成立する窯場が『国造本紀』『先代旧事本紀』という書物に出てくる北陸にいたであろうと思われる国造の根拠地と、だいたいかぶるのではないかというご発表があります。これは極めて新しい見解ではないかなと思います。

では、ほかはどうなのかと言うと、これはなかなか難しいと思います。『国造本紀』に出てくる国造の数は135ぐらいあったと思うのですけれども、その数からしても須恵器の窯がまだ足りないということで、国造の数がわりと多い近畿から西のほうでは、まだまだ窯の発見例が少ないなという感じはしております。

対応がどうなるかというのは分からぬのですが、ただ北陸地方の利点というものは遺跡の分布調査が非常に進んでいて、そういう窯、あるいは窯がない場合も消費地の遺跡から窯の存在が推定できるということで、やはりこの時期にどのぐらいの生産地があったかという推測がかなり明確にできている地域なのです。その北陸のなかで国造の配置とこれぐらい合うよということになれば、これはほかの地域も今後そういうことを意識して考えていかないといけないのではないかと思っております。

逆に望月さんにお伺いしたいのですが、一応私の解釈で言うと、5世紀の終わりごろに広がっていくときというのは、王権に結びつくかたちで技術が

広がったというふうに土器の形態などから見ているわけです。当然王権に結びつく人たちというのは、手ぶらで行くわけないというか、そこでなにがしかの王権との関係ができると思うのです。そういう技術のやりとりができるような関係になっていく各地の有力者というのが、その後の国造としての地位を獲得していくような人たちとつながってくるという、そういう一般論的な理解をしておけると思っています。

逆に望月さんはどういうふうに考えておられるか、お伺いしたいと思います。
望月：5世紀終末段階、須恵器生産が北陸各地で開始される段階というのは、本当に畿内中枢窯である陶邑窯跡群の須恵器とよく似た作りや形、大きさそして色の特徴や質感などを有した須恵器を生産しています。それが南加賀窯跡群だけではなく、若狭の窯や能登の羽咋の窯、越中の窯でも見られます。これら初期の須恵器窯の製品を見ていきますと、その中にとても作りの良い陶邑窯の須恵器と本当によく似ているものと、これはだいぶ質が落ちる稚拙な作りのものとが存在します。つまり、そのような高い技術を持つ工人と稚拙な技術を持つというか、まだ技術的に未熟な工人とが一緒に生産活動を行っているというのがこの時期の特徴です。

TK 47型式という、これは陶邑窯の須恵器の型式なのですが、その時期の須恵器を見ていくと、須恵器生産技術が地方に広がっていく時に、いろいろな在り方を示してくるのではないかと思っています。

そのような初期の段階に陶邑窯に非常に似通った須恵器を作っていた工人たちも、6世紀の中頃に近くなってくると、地方独自の様相を須恵器作りの中に出していきます。南加賀窯跡群の須恵器工人が、南加賀の独自色を主張し始める。ただ、その頃になると、能登や越中の須恵器窯は衰退し、生産を縮小して行く、または生産を停止していくようになります。

このように考えると、初期須恵器生産自体が一時期だけの地域もあるし、継続的に生産を行う窯場も早々と地方色を打ち出すなど、国造設置とどれだけ直接的な関連性を問うことができるのか、難しい問題ではあるのですが、ただ、地方にとっては、そういったヤマト王権との結びつきを持っていることが、後の須恵器生産の安定した生産体制構築に繋がっていく、そのような

可能性があるのではないかと思っています。例えば、それが須恵器生産ではなく、違う形で技術が移植され、地域に根付いて行く形でも、私はいいと思います。この時期に、他の手工業生産とか、他の技術について、新たな中央からの導入が何かあるとすれば、それが対象になろうかと思います。

6. 須恵器生産技術の中央から地方への拡散の在り方

望月：それで菱田さんに、もう一点、コメントいただきたいのですが。菱田さんへの冒頭での会場からの質問に対する回答の中で、須恵器生産技術の中央から地方への技術拡散の在り方について、奈良時代の上番労働の例を上げて、地方から中央へ工人が出向いていって、技術を獲得し持って帰ってくるという在り方を普遍化できるのではないかと話されました。先ほど、南加賀窯跡群においては須恵器生産開始期に、技術的に熟練した作り手と稚拙な技術の作り手とが同じ時期に同じ窯で生産を行っているという話を私の方からさせていただきました。その時の熟練職人は陶邑窯からやってきた人たち、未熟な職人は地元の土器作り手という形も成り立つのではないかという気がしているもので、その辺も含めて少しご意見をいただけないでしょうか。

菱田：先ほど、モデルとして上番というのを申し上げたのですが、実際発掘した窯の資料を全部観察をして記録を取っていきます際に、確かに資料を見てますと、できのいいのと悪いのと、はっきりしている場合がよくあります。大量の須恵器が出ている島根県の門生山根1号窯という安来市にあります窯跡では、そこの資料をかなり綿密に検討されているのですが、面白いことに最初のころの製品、灰原の下のほうに捨てられているものなのですが、本当にできのいい陶邑から持ってきたかと思うぐらいいいものがあるのです。しかし、それと並行して、これはサボったかなというような、本来守るべきところが守られなくて、脚が妙な高さになったりとか、間延びしているというようなまねをしたかなというものが同時に存在します。そのあと時期が下るとどうなるかというと、陶邑のそっくりさんが消えていく傾向で、今度はできの悪いほうが主体になっていきます。このことから工房というのは、どのように構成されているかということを推測してみると、本場の技術を知っ

ている人、これは派遣されてきたか、あるいは行って帰ってきたかどちらでもいいのですが、そういう人の存在と、その見習い職人みたいななかたちで技術を受け取る人たちがいるということになります。むしろ、その人たちの子孫があと伝えていくということになると思うのですが、そういうような関係で工房のなかで技術の修得がおこなわれているのではないかなと思います。

これは資料がたくさん出でていないと、この議論はできないのですけれども、たくさん出でているところで検討してみると、こういう在り方が推測できると思っております。

7. 横穴式木室の導入と被葬者像

望月：今の菱田さんのお話は、須恵器工人の話、須恵器生産技術が地方に入っていく時に、その作り手はどのような動きをしたのかという話をしてもらいました。この問題を考えていく上で、三湖台古墳群で発見された横穴式木室という新たな横穴式墓室の導入は、須恵器生産の開始とも関連し、重要視されるものです。

三湖台古墳群と南加賀窯との関係については、古墳群と南加賀窯の成立時期がほぼ一致する点や、私の報告の図9に南加賀窯跡群の成立段階の窯場位置を落としてありますが、三湖台古墳群に向いた主谷の入口付近にまとまっている。そういう点、三湖台古墳群の埴輪が南加賀窯で生産されている点、それらを総合して考えると、この南加賀窯の経営者と三湖台古墳群造営勢力というのが、一致してくる。両者は関連して成立してくるということに関して、否定する方はこの壇上に上がった3人の中にはいないと思っています。



その点を前提として考えた場合、横穴式木室の存在が重要な鍵を握っていると思うのです。この横穴式木室を採用する古墳のレベルというか、この横穴式木室にどのようなクラスの人間が葬られたのか。また、この横穴式木室は追葬可能な墓室として登場してくるわけですが、これが横穴式石室と同じとは言いませんけれども、追葬可能な新たな墓制の風習が導入される点から見て、この墓室に葬られる人、被葬者像というのは、どういう人たちであったのか。伊藤さんの考えをコメントいただきたいと思います。

伊藤：横穴式木室の調査例は最近増えてきたのですけれども、まだまだ謎の多い埋葬施設ではないかなと思います。まず横穴式木室の年代を整理してみますと、古いものはありそうで、6世紀でも頭ぐらいいのものはありそうだということがわかつてきました。では、おしまいのほうはいつまで作られているのだというと、よくわからないというのが実情でないかなと思います。

なぜかというと、先ほど望月さんがおっしゃいましたように墓室空間があつて、そこに入りきれる構造になっています。だから作って、まず人を葬って、さらに何年かたって、また人を葬っていく。葬っていく時に、前にあった葬送の道具を出したり、片付けたりします。片付けたり、出したりしますと、一番最初の古い土器がなかなか見えにくくなってしまいます。そういったなかで、どんどん新しい土器ばかりが残って、作られたのは古いのだけれども新しい土器しか出ない。そういうことで、正確に作られた年代がよく分からるのが実情です。

少なくとも言えることは、あまり新しい6世紀でも後半代に作られたと思われる事例が非常に少ないと。わずかに八幡2号墳でだいたい6世紀後半ぐらいいの土器が出ているのですが、その土器にしても漢道のところに粘土の上に並べてある。そういうことからすると一番最初の埋葬ではなくて、それよりも後だろうということになり、6世紀でも後半には追葬というか、さらに複数の人間を入れている行為と解釈できます。

だいたい6世紀中葉まで、概ね6世紀でも前半代に横穴式木室を作っていたのかなと思います。作られた古墳を見てみると、いま確認できるのは小さな円墳ばかりです。先ほど私が申しましたように6世紀の前半代というの

は、まだ前方後円墳をつくっている段階です。そういう段階なのに円墳を中心横穴式木室が入っている。そういうことからすると、この埋葬者のランクというのは前方後円墳に入るようなランクではないだろうと推測されます。そういった面で副葬品、葬られた時に一緒に入っている遺物を見ますと、鉄鎌であったり、刀であったり、刀子であったり、そんなに上等なものを持っているわけではありません。割と土器が中心だとわかります。

そういうことからすると、前方後円墳に入るような有力な首長あるいは有力な家族というか、そういうものよりも若干ランクが落ちるのかなと感じます。横穴式木室が6世紀中葉ぐらいで、南加賀で終わるとすると、遠江とか近畿地方とかで見られている木室というのは、どうも6世紀でも前半にはなかなか類例が少ないということからすると、非常に南加賀が古いということに大きな意義があるのかなと思います。

望月：伊藤さん、ありがとうございました。

望月：横穴式木室に関し、菱田さんの報告の中で、横穴式木室の分布と須恵

8. 横穴式木室の被葬者と須恵器工人との関係

器窯跡の分布とが重なる点から見て、須恵器作りを行った人たちがこの横穴式木室に葬られた可能性が高いのではないかという話がありました。南加賀の事例についても、須恵器の生産者、そういう製作集団が横穴式木室に埋葬された可能性はないのか。また、須恵器製作たちが階層的にどのようなレベルの人たちであったのか。兵庫県三田市の平方遺跡でよい事例がありますので、それを含めて、菱田さんは被葬者像と須恵器生産との関係をどのようにイメージされているのか、お話をいただけますでしょうか。

菱田：確実に須恵器をつくっていた人のお墓をどうやって探せるのかという問題が、まず証拠のレベルであるのです。窯のある場所の比較的近くにあるというだけでは、なかなか説得力がないので、先ほどお見せした事例、私の報告の図14に示しましたが、平方遺跡というのは、まさに窯のすぐ脇にあって、そばには工人の工房しかなく、そこの窯で焼いていた人がそのまま葬られた以外には被葬者は考えられないという究極の事例でしたが、そのお墓が

横穴式木室であったということなのです。

ですから横穴式木室の被葬者が、どういう人になるかというのはいろいろ多様な、別に須恵器の生産者に限らず、いろいろな可能性はもちろんあるとは思うのですが、そのなかに、そういう須恵器の技術者レベルが採用しているお墓もあるのだということは、三田の事例で説明できるかなと思います。

もう一つは陶邑です。陶邑の陶器山古墳群、それから檜尾塚原古墳群、野々井古墳群などなど。まさに陶邑の工人集落の近辺に点在して出ておりますので、それもやはり須恵器生産との関係は深いと考えられます。ただし、出てくるのは先ほど三田の例は6世紀でも終わりでしたし、陶邑の場合も古くて6世紀の半ばぐらいで、むしろ後半が中心なので、加賀より遅れていることになります。

こちらの場合も、のちのち須恵器の生産者と密接なかかわりがどうもあるらしいということからすると、三湖台のなかでも、横穴式木室の一部には、須恵器の生産者が入っているのではないかという気がしています。それはいかがでしょうか。そう言ってしまっていいのかどうかというのは、少し不安はあるので、逆に伊藤さんにお伺いしたいのですが。

伊藤：私もそう言い切ってしまいたいなという気持ちは、本当はあるのですけれども、ではどういう条件であれば、須恵器の工人たちの墓と木室を結びつける根拠となるのかと思うのです。論理というか、南加賀ではちょっと見えないけれども。例えば、よその地域、遠江とかへ行った時に同じような木室、粘土でつくった部屋があります。その粘土でつくった部屋を燃やして、粘土を硬化させるわけです。そして、堅牢な部屋としてしまいます。従来はカマド塚ということで火葬墓との関わりとか、火葬墓の影響とか、いろいろな思想的な影響があると言われたのですけれども、必ずしもそればかりではないような事例も出てきています。

粘土を燃やせば固くなるという発想をすること自身、須恵器いわゆる焼物との親近性を認めることができますし、南加賀でははっきりしないけれども、例えば大阪の千里古窯社群せんりというところで新芦屋古墳の木室墓があり、南加賀では出ない馬具を持っているところからも、工人ではないけれど

も首長墳だと考えられます。そういうとき首長墳の近くにある窯場というものを考えていくと、やはり必然的にとらえていかなくてはいけないなど。

そういうふうにまわりから考えていくと、工人たちに連なるような、工人そのものかどうか別にして、工人を束ねるようは小集団の長かもしれないし、どちらにしてもそういうものにつながる可能性は非常に高いのではないかなと思います。

望月：三湖台でこの横穴式木室が出てくるのは、須恵器生産が始まる段階ではなく、少し後、10年から20年ぐらい後に出現してくるのです。工人集団の長、技術者の一番上の階層にいる人として、南加賀に招き入れられた人が、そのまま南加賀の地で死んでいったという可能性があるのではないかと考えています。南加賀窯跡群の出現とともに横穴式木室が出現するわけではないというところが、鍵を握っているように思うのです。

9. 須恵器生産集団の階層性

望月：そこで、菱田さんにもう一点確認なのですが、須恵器生産集団は、複数の人間で構成されていると思うのですが、その中には当然いろいろな階層の人がいると思うのです。生産に直接携わる工人、職人の中で一番上の階層というのは、どの程度のランクだったのか、どのようにお考えですか。

菱田：例えば人名が分かっている湖西窯跡群の事例で見ましても（菱田報告図12）、人名のなかでも神人とか神人部と、部が付くというのは部民ですけれども、そのなかに神直みねひきという地方豪族、それぞれの地域の貴族層と言ってもいい、由緒正しき家柄が直の姓を持っていると思います。そういう人がその地域の中にいて、生産に対してどういう役割を果たしているのか、そういう人たちとお墓の関係はどうなのかということが、ポイントになってきます。

浜名郡の事例は奈良時代の事例ですから、それを含めて古墳時代にさかのばらせるかということはあるのですけれども、そのなかで6世紀の社会組織を考えていったときに、地域の中では直姓を持つ、例えば神直が頂点にいて、その下に神部あるいは神人部がいて、その神直は、さらに中央の神君に統括されるというシステムがあったということが、文献史のほうで繰り返し言わ

れているのです。そういう地域の中での上下関係と、生産の場における生産の統括者と実際の工人たちという関係がオーバーラップさせられるのではないかなどと思っております。

もう一つ、これはおそらく須恵器生産だけではなくて、6世紀後半ぐらいになると製塩遺跡の横で製塩の焼塩壺をお墓に入れることが、かなり一般化していきます。あるいは製鉄鍛冶遺跡の横で鉄滓（スラグ）をわざわざ、あんな汚いものと思うのですが、入れるお墓が結構目立ってくるように、自分たちの職能をお墓の中で示すということが、6世紀でも比較的遅い時期に顕在化し、もちろんその中にはもっと優秀な刀を持つような階層も現れています。そういう職能と身分の表示というものの二つがお墓の中にかぶってくるというのが、後期古墳のなかにあるのではないかなと思っています。

ただ、この6世紀前半の段階で、果たしてそういうのがありうるかどうかということは、少し早いかという気がするのですけれども。

望月：ありがとうございました。須恵器工人像というのが、おぼろげながらも見えてきたような気がします。それが横穴式木室の被葬者にあたるのかは、今後の課題でしょうが、そのような階層の墓である可能性は十分にあるということだと思います。

10. 狐山古墳の被葬者像と

三湖台古墳群に所在する前方後円墳の被葬者像

望月：さて、予定された座談会の時間は、残すところ20分を切りましたので、そろそろ討論のまとめに向かって進めていきたいと思います。

そこでは、三湖台古墳群の前方後円墳のなかに祀られている人物像というものが焦点の一つになろうかと思います。伊藤さんの報告では、狐山古墳の出現というものが、江沼地域古墳群においては重要な画期だったと提示がなされました。その狐山古墳の被葬者が外部から入ってきた、外来系人物ではないかというイメージを持たれている。その狐山古墳の被葬者像も視点に入れながら、三湖台古墳群の前方後円墳の被葬者像をどのように位置付けるのか。できれば、余奴臣とのと結びつきとも関連付けて、本討論の三湖台古墳群の

評価における総括を兼ねる形で、コメントをいただきたいと思います。

伊藤：これが分かれば、あの研究はいらないというぐらいの総括をしないといけないので困っております。私の発表のなかで孤山古墳が、江沼の古墳の要素よりも、それとは違う要素が非常に多く認められると指摘しました。従来だと首長墳の系列ということで江沼臣が成長して王權と結びついていたのではないかと理解されていたのですけれども、それを越えるようなものがあるのではないかと考えています。例えば甲冑を見ても、江沼の古墳は、そんなに甲冑を持ちません。持っていても冑だけとか。あれだけ揃っている古墳はありません。^{けいとう}

孤山古墳は挂甲^{けいこう}というものを持っておりますし、上からかぶる両當式というタイプですが、このタイプは朝鮮半島の伽耶地域に多いです。伽耶地域に目立つものとしては、ほかにも帶金具があり、当然、孤山に葬られた人というのは活動の場は江沼だけではなくて、朝鮮半島も含めいろいろなところで活躍された人間だろうということは、容易に推測されるわけです。

そういう人間が江沼のなかで出てくるかというと、その勢力基盤である動橋川周辺のなかで出てくる前提となるような古墳は非常に少ないと考えています。そういう視点で見ていきますと、孤山古墳の被葬者はやはり外から入ってきた人間だなと考えています。そこで注意しなくてはいけないのは、私ども古墳を研究する場合、首長墳の系列を考えるのですけれども、次の古墳というものが片山津にあります富塚丸山古墳という円墳になります。その中身は分からないのですけれども、甲冑を持っているらしい、甲冑が出たという伝承を持っています。

ある意味、この孤山古墳と同じような様相で江沼のなかを首長墓が移動しているとも考えられてきました。そういうことを考えてみると、江沼臣という者、ずっと弥生時代から連續と生きてきた人間が余奴臣と名のった可能性も否定できない。あるいはよそから入って来た人間が地元の人間と一体となつた状態で、余奴臣というものを形成した可能性も考えていいのではないかと思います。余奴臣が形成されていくなかで、三湖台古墳群も同時に作られていき、そういう古墳の要素が能美の古墳に非常に強い。

そういうことからすると、従来から言われているような江沼地域を掌握するような勢力として、それが江沼国造というかたちで見えてくるのかなど疑問に思うのです。残念なことは、三湖台古墳のなかで本当の首長墳というのは発掘例がないということで、私たち古墳を研究している者にとって、一番大きな弱点がそこにあります。

むしろ、そこから下の人間のお墓があそこにたくさんあるということで、可能性としたら江沼国造と非常に近い関係があるなということが、今回のフォーラムではっきりしたのではないかなと思います。

望月：伊藤さんのおっしゃるように、例えば矢田野エジリ古墳の埋葬施設が分かっていたり、御幸塚の埋葬施設が分かっていたりとか、そういうことがあれば、たぶんこの話ももっとすんなりといくのか、また逆転していくのか、その辺が分からぬところが非常にもどかしいところなのです。これは今後の課題として、謎として残して置くことなのだろうと思いまして、今後またそういう発見があるのかもしれない。その辺を期待したいと思います。

菱田：この地域では、蒸し返して申し訳ないのだけれども、私は素人ですから素朴な疑問で、伊藤さんが挙げられたなかで孤山古墳が非常に面白いのですが、これを本当に外來者と考えるかどうかというのは、もう一つ別の見解もありえるかなという気は素人ながらするのです。

例えば桂甲すなわち小札甲は允恭陵陪塚の、長持山古墳の例のように、なんとなく大王の側近のイメージが確かにある武具です。その意味を考えるときに、時代が近い埼玉稲荷山古墳の鉄剣銘文に、若いころに雄略に仕えて百練の太刀をもらって帰ってきて、それをお墓へ入れたということが記されているのがたいへん気になります。

それに似た現像をして江沼出身のものが出ていて、いずれかの王のもとで華々しい活躍をして、さまざまなものを持ち帰って、故郷に錦というわけで大きい古墳を作ったというような結果として、それまでにないものを持つ古墳を築いたというような、そこでいよいよ余奴臣というのが全国区になつていったというストーリーは考えてはいけないのでしょうか。

望月：地元の人間にとっては魅力的な話ですね。

菱田：想像ばかりの話で申し訳ないのですが、その辺の成立の可能性の可否について教えていただきたいと思います。

伊藤：それはもう充分可能性は高いと思います。それは何も僕が言うだけではなくて、先行の研究者の中司さんとか吉岡康暢先生とかも、そういう理解をされていますし、こういうフォーラムですので、こういう考え方もいいのではないか。考え方の選択肢を広げる意味で今回提示していったわけです。

確かに古墳時代でも5世紀末葉から6世紀前半というのは、北陸のなかで半島の製品が結構点々と出てくるようになります。例えば富山県の朝日長山古墳という古墳でも、冠とか出ております。それもやはり在来の系譜から、たぶん出たのでしょうけれども、なかなかそれを活躍する前提となるような古墳とはいっていい何だろうと考えたときに、古墳のつながりのなかで、どうしても途切れてくる部分があるのは事実です。

そうした途切れてくる部分を、その地域の人間の断絶として、王権とのつながりの断絶、あるいは継続、あるいは新たなつながりとしてとらえるか、それとも人間の多様な動きのなかでとらえていくかという考え方ではないかなというふうに思います。

望月：今討論の話題となっている孤山古墳ですが、5世紀中頃から少し下った時期の古墳です。これは私の報告で取り上げた『上宮記』に登場する繼体天皇の母方のおばあさん、阿那尔比弥が繼体天皇とはおよそ50歳離れているとして、繼体天皇の死没が531年ですから、およそ480年ごろ、余奴臣祖と注書された阿那尔比弥が生きていた時代に作られた古墳、それが孤山古墳や富塚丸山古墳になろうかと思います。これら古墳が在地の中から生まれた首長であったとすれば、後に地域一帯の人民の氏族に江沼臣族が多数いるように、何も問題ないと感じますが、これら古墳が朝鮮半島などからの外來者であったとすれば、繼体天皇の母方の血筋が朝鮮半島に系譜を有していた可能性も出てくることになる。それが後に地域一帯の名称となる余奴臣を名乗るのは違和感があるかなと感じます。

この問題はいろいろな意見があつてしかるべきだと思いますし、今後の課題ということにさせていただき、先に進ませていただきます。

11. 三湖台古墳群の立地と加賀三湖の港湾機能

望月：本日の菱田さんのご報告のなかで、須恵器生産地のなかで屯倉や部民の在り方、港湾の機能、水運や水上交通を利用した交通の基点を作ることは重要な要素となるとお話がありました。南加賀窯跡群の場合、加賀三湖の港湾機能は大きなウエートを占めていると評価いただきましたが、小松市で長く古墳研究に携わってきた文化課の樺田誠さんの研究においても、エヌノクニの統一のため、加賀三湖の起点となる梯川の河口、安宅湊を一体的に支配することが重要と位置付け、能美と江沼の仲介役としてヤマト王権が積極的に絡んできたのではないかと述べられています。

能美と江沼の中間点である三湖台地に三湖台古墳群を立地させたことは加賀三湖を掌握する首長として、象徴的に古墳の立地を考えた気がします。北陸のなかで江沼の地域的な役割を評価した時に、加賀三湖と港湾機能を掌握することは重要なことであり、そういう視点で菱田さんから討論の総括をお願いしたいと思います。

菱田：総括というか、感想になるわけですが、これまで加賀市側の江沼の平野部を非常に重視する見方できていたと思うのです。ところが6世紀の歴史をひもといてみると、むしろそうではない。こちらの粟津近辺の三湖台の動きというものが、その時期の江沼、ヨヌと称した地域のなかで中核になっていると思う。これはもう動かない事実なのです。そうすると從来ほんやりとされていた江沼あるいはヨヌというエリアの動きのなかで評価すべき点が、こちらにあることが分かってきたことが大きいと思います。

そうすると從来の農業生産に適した肥沃な土地ではなく、むしろ潟湖に囲まれた水上交通にアクセスできる場所が拠点になったということになります。そういう動きが、おそらく同時代のほかの地域でも、北部九州の那津官家の代表的な事例になります。津などを管理していくということは、この時期に非常に進んできますので、そういう水上交通とのアクセスのなかで拠点が形成されていくと考えてよいと思います。そういう拠点の近くに、先ほど伊藤さんのお話にありましたように、この時期の40、50メートルの

前方後円墳というのは、かなり立派な部類と考えていいと思いますので、こうして6世紀の歴史のなかにおいて見ると、三湖台のエリアというのは、とてもなく重要な場所だという評価はできましょう。おそらく今後の課題としては、そのときの津の機能というか、船着き場でも分かれば一番いいなど、そういう気がしております。

望月：ありがとうございました。

昨年度に実施しました八日市地方遺跡の特別フォーラムは「弥生時代の西と東」というテーマで行いまして、何故、八日市地方遺跡という遺跡が、弥生時代中期に突然出現し、北陸で中核的かつ拠点的な役割を担ったのか。そのような視点で西と東を比較検討する形で議論したのですが、そこで最も重視されたことは、遺跡の立地と加賀三湖の港湾機能がありました。私は同じことが今回の6世紀の江沼の隆盛においても、言えそうな気がしています。この加賀三湖の港湾機能、水上交通を利用した地域活用が、東日本の中で大きな役割を果たした時代、それがまさしくこの古墳時代後期という、日本の古代国家がまさに形成されようとしている、政治史上大きな転換期にあたっているのだと思うのです。

12. 総評～三湖台古墳群の評価と江沼の古墳～

望月：先ほどもご紹介しましたが、小松の古墳調査や研究をなされていた樺田誠さんが会場にこられています。樺田さんは、三湖台古墳群の研究を行う中で、早くから加賀三湖の重要性を指摘されておりましたので、最後に総評という形で、一言コメントをいただけますでしょうか。

樺田：私も埋文の最前線から離れて時間がたっていますし、先ほど伊藤さんにご紹介いただいた私のレポートからもだいぶ時間がたっているわけですが、正直にいって古墳に関してはあれからあまり新しい発掘調査がなされていないので、まだまだ考え方としては生きているかなと自分なりには思いました。ひとつ在地窯の成立については、先ほどのレポートのなかでも国造制とのかかわりで、どういう意味で成立したかというのは述べてあります。

それは意図の一つとしては、繼体天皇の即位を諸手を挙げて喜んでもいら

座談会篇

れないよというのが趣旨でした。繼体天皇が即位したことによって、ここがあたかも非常に意気揚々と、どんどん発展を遂げていったといったような解釈にいく前に、もう少し冷静に考えて、そのことによって在地の人たちはぬか喜びに近いような、一気に国の制度、中央集権に向かうような国家制度のなかに非常に入りやすい、組み込まれやすい地域集団になってしまったのではないかという思いがありました。

そのなかで、先ほどの望月さんが言った国造の認定と須恵器在地窯の成立、そういうものが地方の譜代豪族層を取り込むかたちで与えることによって、逆に中央から地方への支配が円滑に進むと。

そのなかでキーポイントになると思うのが、能美地域の古墳の在り方ではないかなと思います。

今日の演題は「江沼と三湖台古墳群」ということでしたけれども、やはり興味があるのは能美地域で和田山5号墳を築いた譜代豪族が、その後どういう経路をたどっていったのか、三湖台で多数の前方後円墳がつくられているときに、どんな立場だったのかも含めて考えていただくと、おそらく先ほど出た屯倉とか部民、そして江沼国造とこの三者の関係というのが決して江沼を舞台にして三つが絡むのではなくて、私も以前書いているのですけれども、むしろ屯倉とか部民、中央豪族の領有集団というのが、逆に能美地域を中心に関開していく、あるいは組み入れられ、中央のツートップ制の二元体制のなかで江沼は単に譜代豪族として捉えられていったのではないかなどと考えています。

何はともあれ、今日伊藤さんから非常に刺激的な、狐山古墳の被葬者が外から来た人というショッキングな話を聞いて、僕もちょっとうろた



えたのですけれども、最後に菱田先生のほうから言っていただいたので、私のコメントはひかえます。いずれにしても、いろいろな可能性が考えられるような面白い区域であることが、ここであらためて確認できたことと、あと望月さんのやっている須恵器の変遷というものが、古墳時代のあと7世紀代の理解も含めて一本筋にしていただくと、たぶん6世紀のこの変化の様子がよりよく分かるのではないかなと思いました。

すみません。突然だったので。まとまらないで、よろしくお願ひします。
望月：突然予告もなく、コメントを求めて、大変申し訳ありませんでした。ただ、樺田さんにうまくまとめて総評いただきましたので、私のほうからの総括は省略させていただき、最後の閉会の挨拶を兼ねまして、一言述べさせていただきます。

今回のフォーラムに取り上げてまいりました、三湖台古墳群と南加賀窯跡群ですが、実に魅力的な遺跡であることが今回のフォーラムで再確認できたのではないかと思います。これらの遺跡は、実は極めて著しい破壊を受けた状態でありまして、早期に開発が行われ地域であったのも加えて、多くの遺跡が既に消失してしまっているという、悲惨な現状にあります。南加賀窯跡群で矢田野エジリ古墳の埴輪を焼いた二ツ梨殿様池窯は一部現地に残っていますが、大きく破壊を受けた状態で、三湖台古墳群で最初に築造された首長墳、御幸塚古墳も、市の史跡にはなっていますが、いい状態で残っているわけではございません。そのような中で、三湖台古墳群と南加賀窯跡群をテーマとしたフォーラムを開催させていただいた意図は、その遺跡の重要性にあります。出土品を取り上げれば、矢田野エジリ古墳の出土埴輪以外、あまり目立たない存在ですが、それは主体部が既に破壊を受けていたもののが多かったことと、良好な調査が行われていなかつたことにあります。ただ、その遺跡が語る歴史像は北陸の古墳時代を考える上で、極めて重要であり、小松発展の礎が築かれた時代であると、パネラーを務めていただいた先生方のお話から察することができたのではないかと思います。

今後、埋蔵文化財保護を行う行政の立場といたしましては、そういった遺跡の魅力、歴史性を市民に広く発信していくこと、そしてまだ残っている古

座談会篇

墳や窯跡を保護し、活用する道を模索していくことが重要であると、改めて身にしみているところであります。このような埋蔵文化財保護は、市民の皆さまの厚いご支援があればこそ、実現できるものでありますし、これを一つの契機として、市民の皆様にも参加いただく形で、保護と調査を推進していきたいと考えています。

本日は、長時間わたり、ご静聴いただき、心から感謝申し上げます。これからも、まいぶん講座をおもしろく、内容の濃いものにしていきたいと思います。皆さん、今後とも、埋蔵文化財調査室の普及啓発活動をご利用いただけますようお願いいたします。これをもちまして、第22回まいぶん講座「フォーラム 古墳時代後期の江沼と三湖台古墳群」を終了させていただきます。

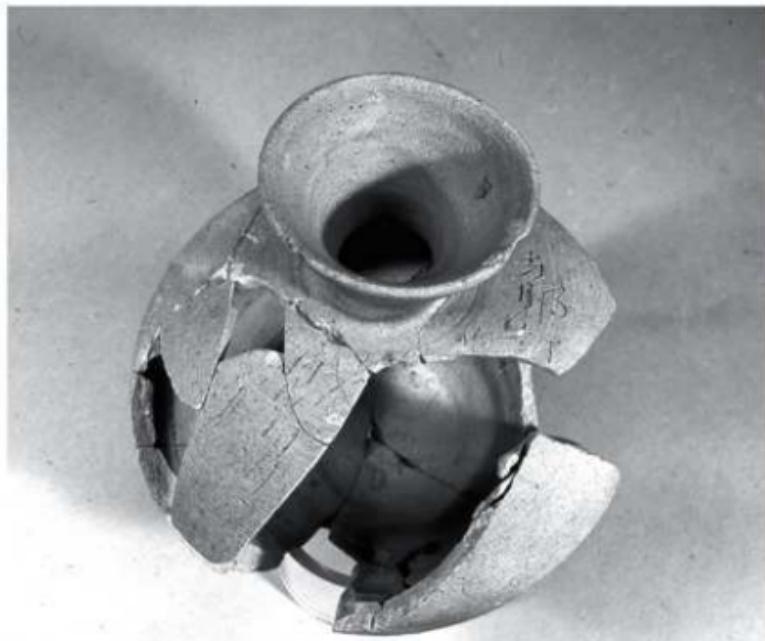


資料篇

時代概説と語句の解説

三湖台古墳群分布図

参考引用文献、挿図出展一覧



那谷金比羅山窯跡出土の「与野評」刻書須恵器

時代概説と語句の解説

1. 時代概説

(1) 古墳時代とは

古墳時代とは、共同体の代表である首長の共通する墓制として前方後円墳が造営され、それを頂点とする政治的な階層構成に基づく古墳祭祀秩序が形成された時代である。前方後円墳の出現する3世紀中葉から、前方後円墳がほぼ消滅する600年頃までの時代であり、つまりは前方後円墳の作られた時代である。古墳時代より以前は弥生時代、それ以降は飛鳥時代であるが、飛鳥時代以降も古墳は継続して作られており、古墳造営の終わる奈良時代前半頃までを古墳時代終末期とする考え方もある。

古墳時代は弥生時代までの共同体間の首長制を基本としていた社会から、飛鳥時代以降の成熟した中央集権国家社会に至るまでの過渡的時代であり、ヤマト王権を中心として初期国家が形成された時代とされている。

古墳時代は前期と後期に分ける2時期区分と前・中・後期の3時期区分、そしてこれに終末期を含める考え方があるが、3時期区分が一般的である。また、3時期区分においても、研究者の資料題材によって各時間幅が異なるが、本書では、概ね、3世紀中葉から4世紀までを前期、5世紀を中期、6世紀を後期として説明する。つまり、本書のフォーラムテーマである古墳時代後期の始まりは500年頃であり、それは繼体天皇の一代前の武列天皇の時代にあたる。この時代、5世紀後半に即位する雄略天皇によって行われた様々な政治施策が実を結んだ時代と言われており、さらに繼体天皇の時代以後、ヤマト王権を中心とする政治は大きく展開していく。

(2) 古墳時代後期について

古墳時代後期は、古墳時代中期の巨大古墳の作られる時代から古墳が小規模化していく時代である。古墳時代中期は、畿内の有力首長層を中心とする限られた大首長層が各地中小首長層を支配し、大王墓を頂点とした、階層性

に基づく首長墳の序列が明確化する時代であるが、それは、ヤマト王権と地域首長、共同体構成員（人民）との、従属と奉仕の関係により成り立っていた。地域首長たちは、王権への貢納、職掌分担、労役、軍務を負担する代わりに、地域支配の承認、政治的身分を授与され、古墳祭祀の承認を受けて、威信材を下賜された。そして、地域首長は地域共同体の代表として、共同体構成員の安全と地域繁栄を保障する代わりに、王権から義務付けられた軍務や労役を各人に分配して、課したのである。王権はこのような「人・もの・情報のシステム」を支配、保障することで、王権支配体制の骨格を形成した。

古墳時代後期とは、この古墳時代中期の階層性に基づく古墳秩序が崩壊する時代である。畿内や地方各地で大首長墳や中小首長墳が衰退し、新たな地域に新たな系譜の古墳が築造される。このような古墳動向は、ヤマト王権が大王を中心とした中央集権国家を目指し、政治組織再編化の方向を歩んだものの現われではないかと評価されている。畿内の首長層は王権を支える組織を強化し、地方首長層はその支配下におさまり、官僚化していくのである。前方後円墳の小規模化と段階的な減少傾向は、地方首長達の大王への従属度を強めた現われであり、家族墓的性格を持つ群集墳の出現は、地域首長層の弱体化に伴う有力家長層の台頭を意味する。地域共同体を核に首長と共同体員（人民）との間で形成されていた従属関係は弱まり、大王を中心とする王権と人民との関係を強め、国王と国民という関係に等しい、直接支配が行われるようになってくる。

古墳時代後期は繼体・欽明天皇の時代とも言われる。雄略天皇の時代に行われた新たな政治体制は、繼体天皇の時代に、より強固な体制作りが行われ、中央集権国家として確立する律令体制への下地が整備されていく。この繼体・欽明天皇の時代に、国造制や屯倉制、部民制など様々な地方支配政策が行われ始めたとされており、畿内の有力首長層による合議制に基づく大王を中心とした諮問機関が整備されていく。部民制・屯倉制・国造制は、人民と土地、そしてそれを管理する地域行政官であり、王権はそれを直接支配、管理することで、律令制の公地公民の下地を作ったのである。

2. 用語の解説

(1) 歴史学用語

【繼体天皇】 和風諡号では「男大連大王」。日本書紀では450－531年とされ、507年即位の第26代天皇とされる。父は彦主人王。母は振媛。母の故郷は越前の高向とされる。

【雄略天皇】 和風諡号では「大泊瀬幼武大王」。日本書紀では418－479年とされ、456年即位の第21代天皇とされる。允恭天皇の皇子とされ、478年に宋に使遣した倭王武とされる。

【倭五王】 古代中国王朝の史書に見える5人の倭国王、讚・珍・濟・興・武。王名は中国風に表現したもので、讚は応神天皇か仁徳天皇、または履中天皇、珍は反正天皇か仁徳天皇、濟は允恭天皇、興は安康天皇、武は雄略天皇のことと言われる。

【大王】 畿内首長連合の長であり、ヤマト王権の代表。各地の王の上に立つものという意味だが、朝鮮三国の大王の名称が日本に伝えられ、5世紀後半には天下を治める国王としての名称として、使われるようになる。大王の名称は、6世紀末から7世紀頃には天皇(アメミコト)という称号に変えて用いられるようになる。

【漢風諡号と和風諡号】 通常に使われている天皇名称は漢風諡号、つまりは死後に贈る名号であり、生前の名称は本名で呼ばれる。特に、日本書紀・古事記が編纂される以前は、死後に天皇名称を付すことは行われておらず、編纂時にまとめて天皇名称を付したものと考えられている。

【ヤマト王権】 弥生時代の終わり頃に畿内の首長で形成された政治連合であり、奈良の大和地方を本拠としていたことにより、ヤマト王権と呼ばれる。王権を中心とする初期国家体制で、大和地方を中心していたことから、大和の字をあてることが多かったが、王権の本拠地が河内や摂津へ移動した可能性もあることから、現在では「倭」の字をあてるか、カタカナ表記が多い。

【畿内】 古代中国王朝の王城を中心に定められた周辺行政区画であり、日本でも皇居周辺の国々を畿内とし、大和・山城・河内・摂津・和泉をその範囲とした。

【百濟・新羅・高句麗】 古代朝鮮三国。百濟は4世紀中頃に朝鮮半島の南西部諸国を統一して建国。660年に唐・新羅の連合軍に滅ぼされる。日本と最も親縁関係にあった国で、文化、技術、政治など様々な分野で日本に影響を与えた国。高句麗は紀元前1世紀に中国東北部、朝鮮半島北部に勢力を有した古代国家。668年に唐・新羅の連合軍に滅ぼされる。新羅は4世紀初め頃に朝鮮半島南東部諸国を統一して建国。668年に唐の協力で半島を統一し、統一新羅国家を建設するが、935年に滅亡。

【国造制】 ヤマト王権の地方支配政策として、6世紀代から7世紀前半の中で地方に順次設置された地方官。クニノミヤツコと読み、國の首長である大王の奴（ヤッコ）として、王権に従属する立場をとる。地方首長層が任じられたとされており、地方首長層の在地での支配力に基づいて行われた地方支配システム。

【部民制】 ヤマト王権による全国規模の人民支配体制であり、生産物の貢納や労役奉仕を義務付けられた人間集団が、地域首長を介して、大王に支配された。6世紀頃に成立した制度とされており、集団ごとに地名・職能名・氏族名が付けられた。

【屯倉制】 ミヤケと読み、「官家」や「御宅」、「三宅」とも表記される。ヤマト王権の政治拠点かつ経済基盤であり、地方支配政策の要として、王権の出張所的な性格を持つ。6世紀前半以降、順次設置されたものとされており、6世紀後半以降は王権の政治的基盤獲得のために列島規模に行われた。

(2) 考古学用語

【前方後円墳】 日本特有の墳丘墓形態であり、ヤマト王権の王墓をその頂点として、その古墳型式、祭祀形態を、王権との同盟関係の中で許されるもののみが築造した古墳である。首長層の墓であり、その規模により権力の大きさを示した。3世紀中葉に出現し、5世紀に最大規模の巨大大王墓などが出現するが、6世紀には規模を縮小し、6世紀末には消滅の傾向を強める。

【群集墳】 同時期の同形態古墳が密集して築造されるもので、小規模な円墳や方墳で構成される。家父長制家族の台頭により顕在化していく古墳形態で

あり、5世紀後葉の出現以降、7世紀まで築造される。古墳形態により、5世紀後葉に出現する木棺直葬等の多様な埋葬施設を持つ小円墳群を古式群集墳、6世紀中葉に出現する横穴式石室をもつ小円墳群を新式群集墳、7世紀に出現する石郭化した横穴式石室の小方墳群を終末期群集墳と呼ぶ。

【横穴式石室】 墳丘内部に大小の石材を利用して作られる横穴系の埋葬施設で、遺骸を納める玄室と外部からの通路である羨道とで構成される。中国の横穴系墓室を原型とし、百濟を経て伝わった。4世紀後葉に九州に導入されるが、全国的な展開を見せるのは5世紀後葉のことと、北陸には6世紀に波及し、中頃以降に首長墳や有力者層の古墳に採用される。大型の自然石を積むものや川原石積みのもの、切石積みのものなど多様であり、南加賀では凝灰岩切石積みが普及した。なお、横穴式石室は埋葬施設形態とともに死者への食物供献儀礼を生み出し、横穴式系墓室に広く採用された。

【横穴式木室】 木柱と板材を骨組みとして、粘土等を被覆して構築する横穴系墓室であり、横穴式石室同様に玄室と羨道により構成されるものが多いが、羨道部を省略するものもある。従来、南加賀地域のものは「箱形粘土郭」または「木芯粘土室」、「木造粘土被覆室」と呼ばれていたが、他地域に確認される「横穴式木室」とされる埋葬施設と同類構造であり、当構造に、粘土を使用しない、木材のみで構築するものが一定量存在することを重視し、木材を使用する横穴式墓室の意味で、「横穴式木室」を使用する。なお、当埋葬施設には玄室内を焼く事例が地域によっては多く確認されており、従来、そのような火化した「横穴式木室」を「窯郭」、「カマド塚」と呼称しているが、基本的には同形態の埋葬施設である。

【追葬】 古墳の埋葬施設への埋葬は、墓室を完全密閉するものであったが、横穴式石室の導入により、追加埋葬可能な墓室形態となり、家族の順次埋葬など、同じ墓室への埋葬風習が始まる。

【威信材】 首長の威儀を示し、共同体員の信望を集めるために、政治的に交換、下賜に使われた先進文物である。時代によりその内容は変化し、前期では鏡類や腕飾具類、半島系武具など、中期では鉄製武具・武器類、玉、須恵器、石棺など、後期では鉄製武器類、玉、石棺などとなる。国内または地方

では入手できない、先進的な技術に基づく文物であり、大王を核とするヤマト王権は、中国王朝や朝鮮半島から、そのような先進的文物やそれを製作する技術を入手し、地方首長層へ下賜して、支配と従属の関係を結んだ。

【江沼地域古墳群】 江沼盆地を取り囲む周辺丘陵地域に分布する複数の古墳群の総称で、三湖台古墳群を含む場合は「江沼古墳群」と呼称される場合がある。4世紀～8世紀初頭の古墳群が分布し、富塚・片山津地区古墳群、小菅波地区古墳群、敷地地区古墳群、南郷・吸坂・黒瀬地区古墳群、二子塚地区古墳群、法皇山・栄谷地区古墳群、分校・松山地区古墳群が該当する。

【能美地域古墳群】 能美平野の東側丘陵部に分布する複数の古墳群の総称であり、和田山・末寺山・秋常山・西山地区の古墳群の総称である「能美古墳群」とは区別して使用する。4世紀～7世紀末の古墳群が分布し、能美古墳群、荒屋・下開発地区古墳群、八里・河田向山地区古墳群、河田山・埴田山古墳群、ブッショウジ山古墳群、八幡地区古墳群が該当する。

【二子塚孤山古墳】 5世紀後葉の前方後円墳で、盾形周溝をもち、墳丘には葺石を伴う。墳丘には人物埴輪と円筒埴輪が樹立しており、江沼地域では数少ない埴輪樹立の古墳である。埋葬施設には組合式箱形石棺をもち、副葬品に画文帶神獸鏡、銀製帶金具、銀環、短甲、衝角付冑等がある。江沼地域古墳群の中で統一的地位を確立した盟主墳と言われており、近隣地に1基の小規模前方後円墳と35基の円墳が群集して営まれる。

【今城塚古墳】 宮内省で繼体天皇陵とされる太田茶臼山古墳の時期が繼体天皇の死没年代とあわない点から、近年の考古学研究者の間では、繼体天皇の陵墓を当古墳に求めるのが通説となっている。全長190mの前方後円墳で、2重の盾形周堀を伴い、横穴式石室を埋葬施設にもつ。周辺に数基の陪塚が築かれる。なお、太田茶臼山古墳は、出土遺物の時期から考えて、近年では繼体天皇の父に当たる彦主人王の墓とする説がある。

【新池埴輪窯】 今城塚古墳の所在する三島古墳群内に位置する5世紀中頃～6世紀中頃操業の埴輪窯跡群。埴輪窯跡群と生産工房とが隣接して営まれており、生産された埴輪は太田茶臼山古墳、今城塚古墳へ供給されていることが確認されている。

【古市・百舌鳥古墳群】 日本を代表する5世紀代の巨大大王墓が存在する河内地域所在の古墳群を呼ぶ名称だが、古墳群としては応神天皇陵や仲哀天皇陵を擁する古市古墳群と仁徳天皇陵や履中天皇陵を擁する百舌鳥古墳群とに分けられる。

【陶邑窯跡群】 大阪府南部に位置する日本最大の須恵器窯跡群。国内で須恵器生産が開始される5世紀初頭から操業を開始し、10世紀まで連綿とした須恵器生産を行う。現在確認される須恵器窯跡は785基とされるが、1000基を越える須恵器窯跡が存在していたものと予想される。須恵器生産開始期から5世紀後葉までは、地方での須恵器生産がほとんど行われていないこともあって、生産される須恵器は、全国に流通している。また、5世紀後葉から6世紀前葉までの地方での須恵器生産開始期においては、この陶邑窯跡群の生産技術が地方へと拡散され、開始されたものと理解されている。なお、陶邑の名称については、日本書紀崇神七年八月条に記される「茅停県陶邑」から来ているとされる。

【須恵質埴輪】 密窯で焼成される際に偶然に還元状態で焼きあがったものではなく、高火度還元焰焼成による埴輪で、胎土調合や成形技法などに須恵器系技術との接触も確認できるような須恵器系統の埴輪を言い、須恵器系埴輪とも呼称される。尾張の猿投窯跡群で須恵器とともに生産される尾張型埴輪を、その典型とし、そこから技術波及したとされる地域においても、須恵質埴輪の生産が行われる。倒立技法は尾張型埴輪の大型品に顕在化する技法で、朝鮮半島の榮山江流域に分布する前方後円墳にも倒立技法をもった円筒埴輪が樹立される。

【淡輪技法】 大阪府南部の淡輪地域の古墳に樹立される円筒埴輪群を技術起源とし、東海地方へ波及した特徴的な埴輪技術。須恵器系技術とされる叩きやロクロ使用の調整が見られるもので、特に底部外面に段状の圧痕が残る。三湖台古墳群では矢田野エジリ古墳の事例が唯一である。

3. 古墳時代の年代根拠

古墳時代の遺跡年代を決定する方法は、遺跡において検出される建物や墳

墓等の遺構と、そこから出土する遺物を検討することによって行われる。遺構では、竪穴建物形態や古墳形状、埋葬施設形態など、遺物では出土品の種類や形態、材質などを比較検討することにより、その前後関係に基づく形態変化の法則性を導き出し、時間軸上の型式編年序列を行う。

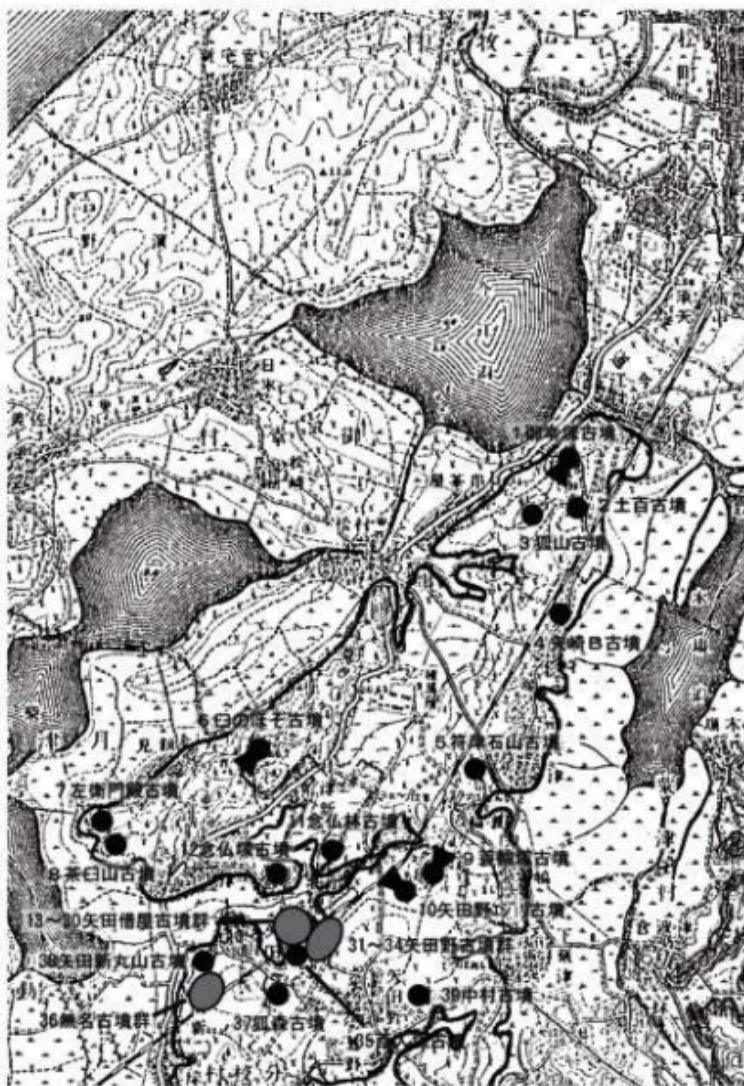
この編年序列された遺構群や遺物群に、遺跡検出の遺構、遺物を照合させ、編年序列における対象物の時間軸上の位置付けを行う。ただ、編年上の序列だけでは、実際の年代にたどり着くことはできないため、遺物に記入された年号や歴史的事件として文献に記録されている遺跡から、出土遺物に年代を与えること、また近年では盛んに行われている自然科学的年代測定法により、歴年代の定点を設定する方法がとられている。ただ、現在もその年代決定を行う際の手続きや方法、資料の信憑性などにより、研究者間で年代観の一貫を見ていながら現状で、本書における遺物年代の考え方については、5～6世紀の古墳から一般的に出土する陶邑窯跡群須恵器を用いて、須恵器型式の歴年代観を示すことで統一した。その年代観は以下表による。

《陶邑窯跡群須恵器型式の歴年代表》

陶邑窯跡群の須恵器窯型式名	歴年代観
TG（梅）232号窯式（最古須恵器）	西暦400年前後
TK（高藏）73号窯式	西暦400～425年頃
TK（高藏）216号窯式	西暦425～450年頃
ON（大野池）46号窯式	西暦450年前後
TK（高藏）208号窯式	西暦450～475年頃
TK（高藏）23号窯式	西暦475～500年頃
TK（高藏）47号窯式	西暦500年前後
MT（陶器山）15号窯式	西暦510～530年頃
TK（高藏）10号窯式	西暦530～560年頃
MT（陶器山）85号窯式	西暦560～570年頃
TK（高藏）43号窯式	西暦570～600年頃
TK（高藏）209号窯式	西暦600～630年頃

（資料篇作成：望月精司）

三湖台古墳群分布図と古墳群一覧



No.	古墳名称	古墳形態	規模	埋葬施設	時期	出土品	備考
1	御幸塚古墳	前方後円墳	30 m	不明	5世紀末	埴輪、須恵器 直刀、指輪	現存、後円部一部破壊
2	十百古墳	円墳	10 m	不明	6世紀前半	管玉	消滅
3	御山古墳	円墳	不明	切石組合石棺？	不明		消滅
4	矢崎B古墳	円墳	不明	切石組合石室？	不明	馬具・金環	消滅
5	符津石山古墳	円墳	不明	切石組合六式石室	6世紀後葉	須恵器・直刀、 金環	石考研究掘
6	日の出古墳	前方後円墳	52 m	不明	6世紀中葉？		現存
7	左衛門殿古墳	円墳	不明	不明			大半消滅
8	茶臼山古墳	円墳(2段築成)	28 m	不明	不明	須恵器	現存、頂部 破壊
9	渡輪塚古墳	前方後円墳	40 m	主体部不明。副 室横六式木室	6世紀前葉	須恵器・管玉、 小松高発掘 白玉・鉄鍼他	小松高発掘 一帯
10	矢田野エシリ古墳	前方後円墳	30 m	不明	6世紀2/4	埴輪・須恵器	市理文発掘
11	急仏塚古墳	円墳	不明	不明			消滅
12	急仏林古墳	円墳	不明	横穴式木室	6世紀1/4。 4/4	須恵器・直刀、 鏡等、金環等	小松高発掘
13	矢田借屋1号墳	円墳	不明	不明	不明		消滅
14	矢田借屋2号墳	円墳	9 m	横穴式木室	不明	須恵器・直刀	小松高発掘
15	矢田借屋3号墳	円墳	不明	不明	不明		消滅
16	矢田借屋4号墳	円墳	13 m	横穴式木室	6世紀前葉	須恵器、埴輪、 刀	小松高発掘
17	矢田借屋5号墳	円墳	不明	不明	不明		消滅
18	矢田借屋6号墳	円墳	不明	不明	不明		消滅
19	矢田借屋7号墳	前方後円墳	35 m	河原石使用横 穴式墓室	6世紀前葉	須恵器、埴輪、 直刀、刀子、 鉄鍼等	小松高発掘
20	矢田借屋8号墳	前方後円墳	30 m	不明	6世紀前葉	須恵器、埴輪、 鏡等	小松高発掘
21	矢田借屋9号墳	円墳	12.5 m	横穴式木室	6世紀3/4	須恵器・埴輪、 刀子、鉄鍼、 五輪	市理文発掘
22	矢田借屋10号墳	円墳	10.5 m	不明	6世紀2/4	須恵器	市理文発掘
23	矢田借屋11号墳	円墳	12.2 m	横穴式木室	6世紀4/4	須恵器	市理文発掘
24	矢田借屋12号墳	前方後円墳	28 m	不明	6世紀3/4	須恵器、埴輪	市理文発掘
25	矢田借屋13号墳	円墳	不明	不明	不明		市理文発掘
26	矢田借屋14号墳	円墳	7.5 m	不明	6世紀後半	須恵器	市理文発掘
27	矢田借屋15号墳	円墳	9.5 m	不明	6世紀後葉	須恵器	市理文発掘
28	矢田借屋16号墳	円墳	9.7 m	横穴式木室	6世紀中葉	須恵器・管玉	市理文発掘
29	矢田借屋17号墳	円墳	10.3 m	不明	6世紀中葉	須恵器	市理文発掘
30	矢田借屋18号墳	円墳	不明	不明	6世紀後葉	須恵器	市理文発掘
31	矢田野1号墳	円墳	不明	不明	不明		消滅
32	矢田野2号墳	円墳	9 m	不明	6世紀後葉	須恵器	市理文発掘
33	矢田野3号墳	円墳	12 m	不明	不明		市理文発掘
34	矢田野4号墳	前方後円墳	25 m	不明	6世紀中葉	須恵器・埴輪	市理文発掘
35	百人塚古墳	円墳	11 m	不明	6世紀後葉？	須恵器	市理文発掘
36	無名古墳群	円墳10基？	不明	横穴式木室？	不明		消滅
37	瓢森古墳	円墳	不明	家形石棺？	6世紀後葉？	須恵器、刀	消滅
38	矢田新丸山古墳	円墳	不明	自然石横穴式 石室内に家形 石棺	6世紀末葉？		現存、埴頂 部等一部破 壊
39	中村古墳	円墳	不明	切石横穴式石室	6世紀中葉？	須恵器、金環	消滅

参考引用文献及び挿図出展一覧

参考引用文献

- 石川県 1982 「加能史料」奈良・平安』
- 石川県埋蔵文化財センター 2001 『小松市 ブッショウジヤマ古墳群』
- 石川県埋蔵文化財センター 2006 『小松市 矢田野遺跡群』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1985 『昭和 59 年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別上地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』
- 上田三平 1932 『孤山古墳』孤山古墳保存会
- 上野与一 1961 『石川県に於ける古墳文化圏への仮説』『石川考古学研究会会誌』第 6 号
- 大野城市教育委員会 2008 『牛頭窓跡群—総括報告書Ⅰ—』
- 鶴田 誠 1999 『北陸における古墳時代中・後期の様相』『第 46 回埋蔵文化財研究集会 渡来文化の受容と展開』
- 北野博司 1983 『箱形粘土郭の再検討と横穴式木室との関連性について』『北陸の考古学』石川考古学研究会
- 小松市教育委員会 1990 『二ツ梨東山古窓跡・矢田野向山古窓跡』
- 小松市教育委員会 1992 『矢田野エジリ古墳』
- 小松市教育委員会 2006 『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ(矢田僧屋古墳群)』
- 白石太一郎編 1990 『古代史復元 7 古墳時代の工芸』講談社
- 鈴木敏則 1991 『横穴式木室雑考』『三河考古』第 4 号
- 鈴木敏則 2003 『淡輪系円筒埴輪 2003』『第 52 回埋蔵文化財研究集会 塩輪一円筒埴輪製作技術の観察・認識・分析—』
- 田嶋明人・湯尻修平・梶幸夫 1978 『江沼古墳群分布調査報告』『石川考古学研究会会誌』第 21 号
- 田村隆太郎 2006 『遠江の横穴式木室墳と土器の副葬』『研究紀要』第 12 号 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2004 『編年のものさし』
- 都出比呂志編 1989 『古代史復元 6 古墳時代の王と民衆』講談社
- 寺井町教育委員会 1997 『加賀 能美古墳群』
- 中司照世 1977 『加賀における古墳時代の展開』『古代文化』第 29 卷 9 号
- 中村辰子 2004 『生産からみた陶棺の変容とその背景』『洛北史学』6 号
- 菱田哲郎 1996 『歴史発掘 10 須恵器の系譜』講談社
- 菱田哲郎 2005 『須恵器の生産者—5 世紀から 8 世紀の社会と須恵器工人—』『列島の古代史 4 人と物の移動』岩波書店
- 菱田哲郎 2007 『古代日本 国家形成の考古学』京都大学学術出版会
- 兵庫県教育委員会 1993 『三田市 北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅲ』
- 福井新聞社 1998 『難体大王と越の国—シカゴハ石棺が語る難体王朝—』
- 三浦俊明 2005 『加賀における古墳編年』『平成 17 年度富山大学人文学部公開研究会 北陸の古墳編年の再検討』
- 吉川弘文館 1999 『古代を考える 難体・欽明朝と仏教伝来』
- 和田晴吾 2000 『国家形成論研究の視点』『シンポジウム記録 2 国家形成過程の諸変革』考古学研究会例会委員会

挿図出展一覧

《報告 1》

図1：石川埋文 1985 の 65 頁図を転載。図2：福井新聞 1998 の 43 頁図を一部改変。図3：田嶋他 1978 の第1図より転載。図4～図7：望月作図。図8：石川埋文 2006 の 199 頁図を一部改変。図9：望月作図。図10：菱田 1996 の 93 頁図を転載。図11：望月作図。図12：小松市 2006 の第30・32・34 図及び田村 2006 の図2 を合成作図。図13：石川埋文 2001 の第10・13・21 図を合成作図。図14：北野 1983 の第8図を一部改変。図15：小松市 1992 の第15図を一部改変。図16：白石 1990 の 46 頁図を一部改変。図17：小松市 1992 の第88図を転載。図18：小松市 1992 を合成作図。図19：鈴木 2003 の第1図を一部改変。図20：小松市 2006 を合成作図。史料1：福井新聞 1998 の 269～270 頁資料を一部改変。史料2：福井新聞 1998 の 265 頁資料を一部改変。史料3：福井新聞 1998 の 9 頁図を一部改変。史料4：石川県 1982 の 1 頁資料を一部改変。史料5：吉川弘文館 1999 の 22 頁資料を一部改変。史料6：石川県 1982 の 213～215 頁資料を一部改変。写真1～3：望月撮影。写真4：小松市撮影。

《報告 2》

図1：近つ飛鳥博物館 2006 の 4 図を一部改変。図2～6：菱田作図。図7：小松市 1990 の第79・82 図より転載。図8～12：菱田作図。図13：兵庫県教委 1993 の第3部第2図を一部改変。図14：中村 2004 より転載。表1：菱田作表。写真1：小松市撮影。写真2：大野城市撮影。

《報告 3》

図1：伊藤作図。図2：中司 1977 の第3図を転載。図3：中司 1977 の第5図を一部改変。図4：田嶋他 1978 の第4図を転載。図5：樺田 1999 の 349 頁図を転載。図6：三浦 2005 の図4 を転載。図7：伊藤作図。図8：都出 1989 の 36 頁図を一部改変。図9・10：和田 2000 の図1・2 を一部改変。図11～14 図：伊藤作図。図15：寺井町 1997 の第64 図を転載。図16～18：伊藤作図。図19：田嶋他 1978 の第5図を転載。図20：上田 1932 の掲載図を転載。図21：石川埋文 2001 掲載図もとに伊藤作図。図22：小松市 2006 の第34 図を一部改変。図23：鈴木 1991 の第13 図を転載。図24：伊藤作図。図25：伊藤作図。図26：寺井町 1997 の第136 図を一部改変。表1：伊藤作表。表2：和田 2000 の表3 を改変。写真1：石川埋文 2001 より転載。写真2：小松市撮影。

協力者・協力機関（50 音順、敬称略）

（個人）

石木秀啓、大野 究、後藤建一、城ヶ谷和広、首原雄一、高橋浩二、中司照世、畠中英二、藤原 學、古川 登、松葉竜司、森内秀造、和田一之輔、和田晴吾、渡辺 一

（機関）

石川県教育委員会、(財) 石川県埋蔵文化財センター、大野城市教育委員会

まいぶん講座フォーラム報告 3

繼体大王と江沼の豪族

—古墳時代後期の江沼と三湖台古墳群—

2010年1月31日発行

■編集・発行

石川県小松市教育委員会埋蔵文化財調査室

〒923-0801 小松市園町ホ62番地

電話 0761-24-8132

■印刷・製本 (株) ゲンダ美術印刷